

団結をめざして

——日本赤軍の総括——



人民新聞革命叢書 1

●人民新聞革命叢書——1●

団結をめざして

——日本赤軍の総括——

人民新聞社出版部

発刊にあたって

「人民新聞革命叢書」の刊行は、私たちのかねてからの念願でした。人民新聞社には、世界各国、各地のさまざまな解放組織や革命組織、運動体から、多くの闘争資料、政治文書、活動報告が送られてきます。私たちは、こうした幾百万、幾千万の世界の人民の血と汗によって克ち取られた貴重な闘いの資料や記録を、限られた人民新聞の紙面ですべて発表できえないのを残念に思い、かねてから「革命叢書」の刊行を考えてきました。今回その第一巻を発行できたことを大変うれしく思います。

第一巻に編集した「団結をめざして——日本赤軍の総括——」は、五月に人民新聞社に郵送されてきた「団結」創刊号（五月二十五日号人民新聞紙上に発表した）「団結をめざし、団結を求め、団結を武器としよう！——五・三〇リッタ闘争五周年によせて——」という総括文章を含めて、総括の歴史的全容を明らかにしている）の全文と、その後送られてきた「五・三〇声明への意見に応えて」「日高隊声明」をその内容としています。

「五・三〇声明」および「団結」が送られてきたとき私たちは、その公表の是非について検討した結果、とりあえず「五・三〇声明」を人民新聞に発表しました。その後、日本赤軍（日高

隊)による「ハイジャック闘争」が起こり、声明文が郵送されました。私たちは、政府、警察・公安の一方的な情報のみで世論が操作され、形づくられていくことに大きな疑惑と警戒心を強めていたので、公正な判断をする資料としてもらうべく「日高隊声明」をマスコミに発表しましたが、正確には報道されませんでした。その上、これを発表した故をもって、人民新聞社への不当なる捜索、弾圧が加えられました。

私たちは、言論・報道活動にたずさわるものの義務として、言論、報道、表現の自由はあくまでも守られるべきであり、また守ることが必要だと考えます。内容の是非の判断は読者に委ねるとしても、その判断の基礎となる資料は正確に発表することが必要であり、特に最近のようには、一面的な情報が流されるときはなおさらだと考え、「団結」創刊号の全文を公表することにしました。これこそが、不当に加えられた言論・報道・表現の自由への弾圧に対する反撃であり、すべての人々の知る権利を守る闘いであると確信し、「革命叢書」の第一巻を編集しました。

この趣旨に賛同され、発売元を引き受けて下さったウニタ書舗の方々に厚くお礼を申し上げますとともに、発行に関する一切の責任は人民新聞社出版部が負うものであることを明らかにして、発刊のことばといたします。

一九七七・十二・一

編者

目次

| | |
|------------------------------|-----|
| 発刊にあたって…………… | 3 |
| まえがき…………… | 11 |
| 団結をめざし、団結を求め、団結を武器としよう！…………… | 15 |
| ——五・三〇リッタ闘争五周年によせて—— | |
| 勝利の源は階級的団結、その保証は思想闘争…………… | 37 |
| 一、はじめに…………… | 39 |
| 二、私たちの歩んできた道…………… | 51 |
| 三、日本革命の歴史と私たち…………… | 141 |
| 四、思想闘争を共に闘い、社会主義…………… | 188 |
| 実現に向け団結しよう…………… | |

日高同志とともに

205

声 明 文

211

家族への手紙

217

(一)

219

(二)

226

あとがき

237

附・1 5・30 声明への意見に答えて

240

附・2 日高隊声明

249

団 結

日本赤軍



〈日高敏彦君 略歴〉

- 1944年12月 朝鮮釜山に生れる。
 1945年10月 鹿児島県、後に宮崎県に移る。
 1952年頃 父、叔父(3.15以来の共産党員)に対するガサ入れで強烈な印象を受ける。(この経験は後に「ガサ入れの唄」として日本赤軍の愛唱歌のもととなる。)
- 小学校時代から一本気の子供であった。5年生のとき、先生と対立し、おまえなんか家へ帰ってしまえ、と言われて彼一人さっさと帰ってしまったこともあった。
- 1960～63年 宮崎大宮高校
 1964～68年 大阪市立大学物理学科
 キャンプファイアーにモロトフカクテルで点火したりした。各種の新聞や雑誌に詩・コント・評論などを投稿。
- 1968～70年 日本高層波KK勤務
 労組で教官部長を担当。70年春闘後、会合の席上で社長を殴打、辞職。
- 1970～71年 家電販売店でテレビ修理工として勤務
 1971年5月 日本出国
 1971年9月 天皇訪欧の際、デンマーク・コペンハーゲンで同志十数人と共に天皇に対し、自ら作った黄尿酸弾を投げ、デンマーク官憲につかまる。
 1971年11月 60日後、国外追放の刑でデンマーク出国。地下活動に入る。
 各国で最下層労働者として働きつつ、朝鮮問題・東南アジア問題を軸に、各国の闘い労働者と連繫を強める。
 日本赤軍兵士として自らを鍛える。軍事訓練では各国の革命組織兵士に混って抜群の成績をおさめる。パレスチナ人はじめ、各国革命組織との多くの共同作戦に参加し、強い相互信頼を勝ちとる。
- 1975年8月 クアラルンプール作戦に参加
 1976年9月27日 ヨルダンのアンマンで奥平純三君と共に敵の手に陥る。連日連夜にわたるヨルダン秘密警察による拷問に耐え抜いた末、黙秘のまま虐待される。日本の警察当局は、「トイレでのくつ下による首つり自殺」などと拷問をかくすデマ報道をくり返し流す。
- 1976年10月13日 奥平純三君の強制送還と同時に、遺体となって日本に送還される。日本の警察当局は解剖を拒否。肉親・友人による解剖・死因追及の試みを妨害し、遺体はそのまま火葬に附される。遺体の灰の中から長さ十数センチの鋭い金柄針が発見された……。
- 日高敏彦：好きなハナシ リズムシとワラジムシのはなし
 きらいな食べ物……ネギ
 常に笑いを絶やさない
 強靱かつ柔かな革命兵士であった。

ま え が き

私たち日本赤軍の闘いの教訓を人民・同志・友人と共有するために、私たちは「団結」を発刊します。

私たち日本赤軍の自己批判を、しっかりと人民・同志・友人に提起しつづけるために、「団結」を発刊します。

私たち日本赤軍は、人民内部の不十分点の克服を共にし、革命の中核部隊をひとつに結ぶために「団結」を発刊します。

この団結には、私たちが、敗北の中で得た教訓「団結こそ勝利の源である」という思いがこめられています。かつて共産主義運動は、非団結でした。今、共産主義運動の普遍的課題として、それを克服し、団結を果たしていくことが問われ

ています。団結を武器とすることです。

私たちは、だれとでも団結できるのが労働者階級の革命であることを、敗北の中から、感情や肉体や魂で学びました。私たちは、この小冊子「団結」を通して持久的に、人民・同志・友人と出合っただけではありません。批判という援助を受け、自らを革命化しながら、その革命化を、より多くの人と共有していきたいと思えます。私たちは、革命の真理の前に、自己を解体しつづけ、より客観的真理へと自らを組織することを、自己批判と考えています。その自己批判の深さこそ、持久性こそ、人民の指導性であると確信します。自らを、革命と人民の利益にむけて改組しつづける中で、学びあい、しっかりとした日本革命の中核部隊を育成することができるからです。私たちは、それをすべての闘いの基軸にしています。それらを私たちは、思想闘争と呼んでいます。ですから、実践のない思想闘争はありません。

「団結」を発刊し、本音を提起しあい、日本人民共和国建設にむけて真剣に現在を問ひあい、闘い抜くために、私たちは、今、ここから始めます。私たちは、私

たちの思想闘争の実現のひとつとして、「団結」を、人民・同志・友人へ提起します。不滅の革命の戦列をうち固めていきたいのです。どこでも、いつでも闘えるように、真の革命の力を準備するときです。

かつて、不十分であることにひらき直り、見ようとせず闘ってきたことを克服する一つの分野として、「団結」があります。私たちの言葉として、私たちの姿として、「団結」を受けとめてほしいと思えます。批判を求め、自己批判を深め、人民の意志を一つに結びながら、前進します。

階級的団結をめざし、階級性を党性とする革命主体を育成するために、団結を求めて！

団結をめざし、
団結を求め、
団結を武器と
しよう！

— 5・30リッダ闘争
五周年によせて —



日本赤軍の誕生日ともいえる五月三〇日を迎え、更なる不屈の、革命任務を担う決意を込めて、日本人民、同志友人に日本赤軍に結集した全ての戦士の名において、心から連帯のあいさつをおくります。私たちが、日本人民を代表して、アラブ・パレスチナ人民と手を握り合って六年目、リッダ闘争から五年目の、五月三〇日を迎えようとしています。その間私たちは少くない革命の教訓を一つづつ導き出そうとしてきました。私たちは、失敗を数えきれない程してきました。そして、失敗を克服する闘いの中から、自らを革命化することを通して、不滅の生命力を養うことを学んで来ました。今、私達は日本人民、同志友人と共に日本革命を勝利完成する闘いの中にささやかな教訓を返し、一つの階級の責務を共に担いつづけることを約束します。

日本革命をめざす者が、日本のことを知らなければ、闘う方向を見失ってしま

うことは、道理ですが、日本赤軍形成母体であった若い革命運動の勇氣と情熱、ごうまんと主観主義の例外にもれず、私たちも又、多かれ、少なかれ、日本の中で教訓を蓄積しないまま、自らの失敗を正当化し、自らの幻想をたくさん抱いたまま、日本人民のことを真剣に知りえず、アラブでの闘いに出発して来ました。

多難の中で、うまくいかなければ情況や対象や時代のせいだ、と思ったり、うまくいけば自分たちの実力を過信するという様な、根本の思想が、帝国主義支配の中で育くんだ思想基盤をしらずしらずに肯定したところでは、闘いきれていませんでした。だから、連赤や諸派の失敗があれば、革命を志す者の共通の責任としてとらえず、自分たちは闘っていて、まちがいをおかさないのに、新左翼はダメだという固定的な見方・批判をもって、自分たちだけが苦勞して革命を担っているという様な悲壯な観点によってたっていたといえます。私たちは、数えきれない教訓を一つ一つ得る度に、その中から勝利の確信を一つ一つうちかためて来ました。そして今も又、その途上にあります。抑圧された人々が、歴史の主人公となり、自らの力で、未来を切り拓く正義の闘いは、いかなる困難に直面しよう

とも、必ず勝利するという確信は、闘えば闘う程、失敗すれば失敗を通して、ゆるぎない確信となって、私たちを支えています。そして、勝利の確信が強まれば強まる程、どの国の革命でもそうである様に、無名の先達が、勝利によって証した様に、私たちも又、団結を唯一の武器として闘って初めて、日本革命を勝利完成させることが出来るのだと実感しています。

私たちは敵共によって、又、私たち自身の不十分さの中から、この六年間の間に、真に日本赤軍が一体何を考え、どの様な社会を実現する為に闘っているのかを、日本の人民・同志・友人に伝えることが、出来ませんでした。私たちの闘いの不十分さに加え、武装闘争に対する神秘主義や、アラブ・パレスチナ革命戦場に対するブルジョアスコミのゆがんだ伝達を通し、日本の人民・同志・友人と一致団結して闘う道をきりひらきえていません。日本の人民・同志・友人と共に担う階級的団結ぬきには、私たちは、敵共を壊滅することができません。私たちは、日本赤軍に対するこれまでの誤解や、神秘主義、そして批判を、まず自らの不十分性の結果として、うけとめていきたいと思えます。そして、自己を更に批

判的に改造するところから、日本帝国主義に対決する被抑圧人民・同志・友人と団結し、力をあわせて、日本の人民共和国を実現する為に闘いつづけることを約束します。

一一

人民の利益を実現し、人民の団結をめざすいかなる闘いも、無限の後続部隊を歴史の中に育成し、闘う人々へ引きつがれてきたように、日本赤軍の先達が切り拓いたリッダ闘争は、今、益々したたかに、アラブ、日本人民連帯の礎石となつて拡がりゆく闘いを支えています。しかし、同時に日本赤軍はリッダ闘争によって示された国際主義の実現の中で、その切り拓いた責務の大きさを、しっかりと果たしえず、十分に人民連帯を、日本の革命運動へと、実践しきれてきませんでした。唯、武装闘争を持続発展させる中から、リッダ闘争の非妥協の闘いの地平

を堅持しぬくこととどまってきました。パレスチナ人民との共同武装闘争であるリッダ闘争の非妥協な敵との対峙は、担い手たる私たちの即自的な主観的展望を越えて、はるかに持久的で広い階級の団結を、客観的に不滅なものとして築きました。それは、パレスチナ人民の闘いの地平に支えられ、私達や、パレスチナ指導勢力の階級的な飛躍を要求していたといえます。

しかし、私達日本赤軍は、自らが限界や不十分性をもって闘ったというリッダ闘争の主體的な内容を問わずに来ました。リッダ闘争を勝利の側面からのみとらえ、その地平を発展させることに全精力を費してきました。日本赤軍の当時の思想的未熟を問い、高める方法を、武装闘争の飛躍によってのみ問い、革命任務を、武装闘争の持続に一面化する軍事一点ばりの観点をもって闘いつづけて来ました。そのことから、武装闘争の勝利によって、逆に思想的未熟さや、不十分性を清算しながら、運動的發展に依存し、強固なものと同錯覚し、隊伍の中味を十分に問わずに来ました。パレスチナ指導勢力も又、同じ問題を問わずに来たのだと、私達日本赤軍は考えています。リッダ闘争そのものが、客観的に実現した階級利益の

闘い、国際主義の実現とやらはらに、私達日本赤軍は犠牲性や勇氣にとどまらない真の革命思想へと、自己を革命化することに遅れて来ました。そのことを真剣に問い得たのは、同志の被逮捕、自供によってでありました。

リツダ闘争を実現する日本赤軍の初期の不十分性は、日本革命運動の不十分性と照応する関係にあります。未経験や、思想的立場の無自覚さ、不徹底さ故に、帝国主義支配の価値基準を知らず知らず肯定した自己の立場を、闘いの中で、革命していくことに、頓着して来なかったということが言えます。革命を理念的にとらえ、生活を基盤とした力を組織しきれて来ませんでした。私達は、日本の革命運動が、敵との非妥協な思想性によって対峙しえていない観念論議であることに反発し、逆に、自らは行動によって、非妥協性を実現することを自己目的化する狭い世界観に立脚していたと言えます。革命思想の生き生きとした生命を実現する闘いを、自分たちで十分担わず、武装闘争や死によって、犠牲性を発揮するというブルジョアの英雄主義を持っていました。自らの感性の弱い側面を、克服するのでなく、死を恐れないという側に身を寄せて、死を覚悟することによ

って、日和らない自己を確立するという程度の決意主義を根深くもっていました。リツダ闘争の主体的地平はそうした未熟さをやはりもっていたし、リツダ闘争後、そのことがより純化されていったということを、失敗し、敗北し、その根拠を問いつづける中でようやく気づいて来ました。確固として闘い続ける生への確信が共產主義を準備していくものである事をリツダ闘争の継承、発展として組織しなければならなかったのです。真に人民と共に社会を建設するという観点、誰でも変革しあつて革命を担う事が出来るという、革命の根本である人間観を基本にすえて闘いを組織しえてこなかったことを物語っています。日本の革命運動の中から成長した私達は最も大切な人間観にふれることは「弱さ」としてとらえ、死を問えば問う程、「弱さ」を切り捨てる、又ひらき直るといふ非弁証法的な観点を克服することに無自覚であったと言えます。自分の身近な人々と団結できなくて革命が勝利する筈はありません。人間、親、兄弟、家族を問う事が自分にとって弱さに転化することのない、真の人間観、革命観の確立にむけて、共に克服すること、私達は、失敗や、不信や、不団結の現実の中で学んで来ました。そうして初め

てリッダ闘争の切り拓いた客観的責任に答えていく日本革命の担い手たる自らを革命と真理の側から謙虚に問い合う事が出来るようになって来ました。そうして初めて一人一人が人民の代表として生き生きと「人民と共に！」団結を力として前進することが頭ではなく生命力となって実践に生かされ始めたのです。敗北の中からその事を教えたのは、リッダ闘争の戦士への限りない愛と客観的なリッダ闘争の不滅の価値だったと言えます。

私達は多くの失敗や困難の度にリッダ闘争の無私の革命精神と、その国際主義によって体现された国境を越えた階級利益の闘いの客観的な革命の意義をとらえ返してきました。そして、かつてよりも深くリッダ闘争をとらえ返し、より自らの主体の育成にむけた豊富化血肉化しながら、歩んで来ました。リッダ闘争の実践は不断の失敗や困難の中で私達にいつもいつも階級の利益を闘うらしん盤として行手を示し、現在に至る私達の闘いを支えていたということが出来ます。その過程に於ける日本赤軍自身の主体の未成熟は、革命の武器であり、階級の利益の実現である団結を自らのものとなしえずその結果として日本の人民、同志友人と団

結することに誠意を果たさず、国内の、人民の闘い、労働者の闘いと、思想的絆によって結ばれた実践を担いて来ませんでした。

私たちは、これまで、日本赤軍が、失敗や敗北の中で自らを打ち固め、そして、今後も闘うであろう道のりを全人民に示し、共に闘っていくことを、ここに約束します。そのことを通し、労働者階級の思想によって結ばれた一つの利益を、共に実現していくことができるのだということを、自らの総括として、提起します。

二一

人民・同志・友人と、本当に革命の勝利を現実のものとして出会っていく為には、自分たちに少しばかりあるいい面を強調し、そのいい面で出会い、幻想を抱きあうのではなく、敗北や弱さをありのままに伝え、ありのままの克服をこそ共有していくことが、もっとも大切なことだと実感しています。そして日本革命を

志し、結果としてその不十分さから敗北した個々の闘いもまた、私たち自身の敗北として、階級の一つの責任を共にし、共に克服することの中に、真剣な団結へのきざしがあると確信しています。自らの立場に固執するのではなく、主観的なつもりがひきおこした客観的現実を直視し、客観的な革命の真理、革命の是非の前に自らの「確信」を解体することを革命任務の基本とすることが問われていると私たちは考えます。そのことを通して、より主体の認識能力を改造する革命実践の中で、一つの階級的団結、一つの党性を組織しあうことが出来ると、実感しています。日本赤軍は国内の人民・同志・友人と団結し、革命の利益の一点によって結ばれる階級的団結を求めるところから自らの自己批判を課していこうとしました。それこそ、革命の喜びと希望の任務として自らが実践することに他なりません。

日本革命の中で主観的には精一杯闘いながら、敗北した個別の闘いの不十分性を共に克服する中から、すべての敗北を自らの教訓としあう階級的団結へのよびかけとして、私たちは一九七五年クアラルンプール米・スウェーデン大使館制圧同志奪還闘争を担いました。そして同志奪還闘争の軍事的闘いの勝利は団結を不滅に実現する第一歩をしっかりと実現しました。かつての闘いの自己批判実践として奪還闘争に応えた五戦士の固い握手の熱いぬくもりは、今、日本赤軍の命脈となつて、この間の闘いをうちかためています。日本赤軍が奪還した意味は、そして、奪還に応じた戦士たちの意志は、本当に日本革命を勝利完成させる階級の中核を組織しあうことにあります。勝利の幻想によってではなく、敗北や、人民・同志・友人にもたらした害毒まで教訓としあい、共に克服することを通して、人民・同志・友人と団結することが出来ると確信するからです。私たちの現在が不十分であればいつまでも人民は過去を忘れたりしないし、問い続けることを知っています。そして反対に、どんなに過去が不十分でも、現在とこれからの一時一時の革命に対する誠実さは必ず人民と深く団結できると確信しています。

私たちは勝利を確信する中で、そのことを一つ一つ、実現しぬけるのだと実感して来ました。私たちは五戦士と自己批判を共にし、一つの階級的団結をうちかためてきました。自ら進んで革命の道を志した者が一つの敵をうちたおすのに団

結しえないはずはありません。革命に目覚めた人々が、自らを階級の一員として組織し合い、階級の責任を共に果たしていく中に、団結は必ず実現されます。敵の思想の反映によって分断され個人主義の責任観念であるセクト主義や、革命の私物化や競争心を共に克服しあい、階級の組織された一つの力へと結集しながら団結してきました。革命は全人民を必ず一つに結ぶという団結にむけた確信は、クアランプールアメリカ・スウェーデン大使館制圧、同志奪還闘争を経た私たち実践によって、今、証されています。日本赤軍という名称や、〇〇派という党籍によってではなく、人民に服務する革命の中核部隊として、革命と人民の利益の前に、自分の立場を解体し、普遍的な立場により高め団結する中から、真に日本革命を導く、党的な力が、人民を主力として育成されてくるのだと考えています。私達は、この間学びあい、敗北の教訓を組織しあい、これだけは言いたくはない点について語り合い、どの同志も、どの人民も同じなのだと思っています。階級支配によってもたらされた被抑圧人民の一人一人の価値や、不充分さも同じであると認識する時、真剣にその克服を共有しあい、自分を他人の様に、他人を

自分のように一つの責任をわかちあうことができます。資本主義社会の中で育んだ他人との利害の対立や、競争や、他人憎悪心を、日々の革命実践を通して革命化しあい、人間の本源的欲求である団結にむけて前進し、その力で、敵共を孤立解体することが問われています。人民・同志・友人と信頼によって結ばれた階級的隊伍の育成に誰もが真剣に援助しあっていく事を私達はこれまでの自らの自己批判をこめて呼びかけます。敵共は自分に似せて世界をつくり変えることしか知りません。逆に私達は自己批判と改造を通して世界をより創造的に実現することができます。歴史の中で被抑圧人民のすべての闘いが示してきました。同志奪還闘争の中から階級的にうち固めた同志愛、人民愛の団結を武器として、私達はあらゆる機会にあらゆる人々に団結を求め続けるでしょう。私達は自己批判と批判を通して主体的な力を高め形態や方法や技術ではない革命に対する態度、不滅の革命思想を確立し続けるでしょう。人民の自己批判とは、自らを革命する実践であり自らが自己批判を軸に階級的団結を求めることに他なりません。私達は団結をひき続き求める中で思想的に一致し、形態や方法においては分離した、多く

の人民・同志・友人と出会いつづけることができると確信します。そのことを通して、生活を闘いの場とする人民の解放と革命の事業を、人民共和国の建設にむけて、あらゆる分野で、あらゆる方法で、一つに団結して実現していくことができます。革命の主人公は、そうした人々にほかなりません。革命は誰でも担うことができ、共に闘って初めて勝利しえるのだという実感をこめて、再び、団結をめざし、よびかけます。

四

かつて、日本赤軍は、人民・同志・友人と真剣に出会うことに無頓着でした。それは、革命を、限られた何十人、何百人にのみ求めようとする狭い人間観に由来します。そして、また、そのことに気づき、自らを革命化する闘いを、自己批判を軸として闘いつづけたのは、敗北の教訓によります。一九七五年、スウェー

デンにおける同志の被逮捕、自供という日本赤軍の隊内にある団結の質、勝利の確信の質を根底的に問われた時点においてそれまでの敗北や失敗の総括や検証が技術や方法や形態や方針のみにすぎなかったことを思いしらされました。自供するはずがないという思いが事実の中でしつぺ返しをうけた時、自分たちに抱いていた幻想がはがれ始め、方法や形態ではない、根本的な問題を問うことができ始めました。敵に捕えられたり殺されることは、革命行動の失敗の結果として、不断にありうることです。しかし自供はどんなことがあっても、人民と革命に対する裏切りにはなりません。被逮捕の二同志を信頼するという仲間意識は、私たちが同質の弱さをもっていることを気づかせてくれました。そして、仲間意識でない階級の団結を真剣に切り拓く契機を与えてくれました。日本赤軍指導部は、被逮捕の二同志に対して、十分に同志の立場にたち、革命観を組織し合えなかった自己批判を二同志に対して、そして全同志、友人、人民に対して問うことから、この間の闘いを実践してきました。未だ不十分であるけれども、個人的にはなく階級の責任をひき受ける革命の任務について教訓を得てきました。そして、敗

北を階級の一つの責任としてとらえ、共に克服することを通して、日本革命の団結を創り合うことが出来ると確信してきました。その教訓は今、連赤やM作戦や、東アジア反日武装戦線の同志と一つの自己批判を共有しあい、団結を深め階級の利益にむけて、一つの責任を共に担うことを可能としています。今、すでに一つの隊伍にうちかためた力を、ここに結ばれた不滅の階級的団結を、国内の人民・同志・友人に、自己批判実践として返していくことを担いつづける任務を私達は負っています。

そして、その実践を共にし、闘い抜く途上にあつて、私達はかけがえない日高同志をヨルダン反動に虐殺され、奥平同志を日帝の獄中に奪われました。私達のこの間の闘いを、革命的に実践し、完全黙秘をもって革命任務を全うしようとした日高同志、奥平同志に対し、ヨルダン反動共は残酷な拷問を加えつづけました。日高同志が、その果敢な闘いの過程で、敵に肉体的に虐殺された事實は、奥平同志の拷問の証言、日高同志の遺骨からあらわれた十センチ大の針が、明確に証明しています。敵のどのような弾圧にも屈さず闘い抜いた日高同志、奥平同志

の教訓を、私達は、どんな時にも忘れることはないでしょう。私達は同志への限りない愛を、更なる敵愾心へと組織し、不屈に革命任務を担いつづけることを確認します。そして、私達の代表として敵の獄中で、不退転に闘いつづけている奥平同志との階級的団結を再会にむけて準備し、再会を通して更に教訓を深め、いついかなる時にも、人民の利益と革命を守る人民の軍隊へと、自らの革命に更なる任務を課していくでしょう。私達日本赤軍は、同志・友人・人民が、奥平同志の闘いを共に支えあい、敵の獄中にあるけれども、着実に、一つづつ団結を深めていくことを確信します。

そして、奥平同志、リッダ闘争の地平を、本当に日本革命の責務へと返していく任務を、再会するまで、離れた戦場で、共に一つの心で担うことを、再度確認します。

私たちは、日本赤軍の誕生日とも言える五月三〇日を迎え、これまでの闘いの検証を現時点から一つ一つあきらかにし、日本人民の一人一人として隊伍を整え、更に日本人民・同志・友人と団結し、世界の人民・同志・友人と団結し、日本革命の勝利、完成にむけて世界の人民の闘いを支えあい、前進することを約束します。

この間、私たちは、全軍的に、不屈の党性、階級性、人民性を革命に対する私たちの基本的態度として、一致した力を確立することに重点をおいて、闘ってきました。自分たちの必勝の信念を一つの階級的団結の力で発揮する組織性ぬき、階級の組織された暴力をうちかためることはできません。私たちは、未だ不十分であることを卒直に認め、共に克服することを提起します。すぐれた革命の先進的部分は、欠陥をもたないのではなく、誰もが持ちあわせている欠陥に対し、真

剣に、誠実に、謙虚に欠陥を克服する闘いを、休むことなく続けていることに、その先進性があるのだと考えます。その克服の闘いこそ、自分たちだけでなく、人民・同志・友人を革命化しあい、共通の敵に対決する一つの力を組織しぬくことができるかと確信します。徹底して人民の利益の観点にそって闘う人民服務の中にこそ、真に革命の指導性は形成されつづけるでしょう。

私たち日本赤軍は、人民内部の矛盾を革命化しあう、こうした闘いを思想闘争と名づけ、人民と共に団結する主体的な準備を、この間つづけてきました。今更に私たちは、思想闘争を基軸に、あらゆる分野で、あらゆる人々と思想的団結をかちとりながら、各々の闘いを共に補いあい、資本主義にとってかわる新しい社会の建設を、現在から展望する闘いにむけて、一步一步、人民・同志・友人と団結しあうでしょう。そうした闘いは、更に日本赤軍の武装闘争実践を、人民の意志の表現として、持久的で階級的な国際、国内遊撃戦として展開せしめるでしょう。

共に団結し、共に克服し、共にもりたてあって、人民が主人公となる社会を建

設しぬくことを、再度確認します。
不屈の階級性を覚性へと高め、一つの団結した力で一つの敵を打倒する為に、
熱い握手を！

勝利の源は
階級的団結
その保証は
思想闘争



一、はじめに

1 私たちは敗北の中で、人民が勝利する闘いについて真剣に考えた時、何の為に闘ってきたのかを、根本的に問い返す必要を痛感しました。革命と人民への求愛に燃えた闘いと情熱の正当性に固執する限り、現在を過去から解放することは出来ません。革命と人民を言いながら、何の為に闘って来たのかを、闘争主体のつもりから離れて、人民の利益を問う側から、自己を批判的に検証する必要性を私たちの敗北は教えてくれました。資本主義社会の腐敗した中で生まれ育ち、その抑圧や差別や、不合理の中で矛盾に直面する度に、何かがまちがっている。人間はもっと素晴らしいものであり、又、素晴らしい生き方が出来るはずだ」と考えた時、かつて私たちの闘いは始まりました。

その闘いの中で、私たちはマルクス・レーニン主義を知り、人間の解放について

て、また資本主義のからくりについて知りはじめました。知りえた時の喜びは、生への感動と確固とした生への姿勢となつて戦闘性をきたえました。人間が宿命や運命としてあきらめてはいけないこと、そして逆に、宿命だと思ひ込ませようとする社会的な力を発見し、根源を廃絶し、自分たちの力で、自分たちの運命を切り拓くことができるという確信を深めました。そういう闘いを通して、革命組織と出会い、多くの同志と出会ってきました。こうした闘いの中で、人間同志の連帯が実現できるといふ人間の素晴らしさを実感してきました。

しかし、そうした私たちの闘いが、自分の立場からの生きがいである限り、連帯は秀れて資本主義社会の人間関係を越えたものであつても、人と人との関係の矛盾を原動力としてより深い団結をうちきたえることはできません。私たちは自然成長した自分の立場を、意識的に革命する闘いを通して、団結をもとめていたのではなく、自分の立場を固定して団結を求めていたということに気づきえませんでした。その為に、運動的な発展は不断に孤立し、人民的広がりとなりきれず、前衛の責務という思ひ込みの中で、更に前衛性を運動や戦術の左傾化に求め、

結局は情熱とうらはらに、人民の求める団結に自らが人民の代表として応えきれないできました。私たちが闘いの過程で、資本主義社会の中でそれをこえる兄弟的絆をうちかためた闘う者同志の連帯が人民と結びつかない、又未来の確信によつて結ばれえなかつた結果として、革命実践の中で混迷をつくりだして来ました。反帝闘争が物化した思想の中でしか組みえず、人間の団結、階級の団結した力、新しい社会の継続革命の準備としての反帝闘争を階級の絆である思想を基礎として築きえませんでした。

かつて、私たちは自分たちの不充分に気がつかなかつたのではありません。そのことを根本的に問わずにきたのです。敵をうち破り、人民を解放することを考える時、自分たちの姿が、本当に人民を解放しうるのか、人民の為であつても何故、人民と共に、と言えないのか、そんな確信のない自分たちを問うことが、運動を阻害すると合理化し、今はこの道しかない、べき論的に闘ってきたのだと言えます。革命を担おうとする私たちがどれだけ人民を愛し、信頼し、団結を求め続け、団結をよりどころとして闘い抜くことができるかを問わなければ、革

命を実現することはできません。革命の指導者、組織が、知識の量や能力で決定されるような革命運動には、前衛と自称する時、必ず人民をべつ視する資本主義社会と相似形の社会を容認しているのです。私たちは、過去の「ひたむき」な闘いを直視し、切開しなければならぬと思います。

私たちが、出発点として来た人間の解放が、資本主義社会における階級の解放が、何故、資本主義と同質の内容を持ってしまっているのか。現在の資本主義の支配に抗して闘うことは必死にやっても、未来そのものを創造する確信がなければ、勝利と団結につながる現在の闘いにもなりません。人間が闘いの中で欲望や、感情までもかわりながら、人間の根源的な類の団結をかちとることができません。人間が変わるし、自分が変わるといふ確信の中で闘って初めて、改造や創造にみちた各々が、自己の革命を基軸とする団結をあちこちから生みだすことができます。

自己の決意の純粹性に正当性を求めたり、感性的に理解しえないものを、無理矢理理屈で整合する観念論へのおきかえによっては、階級的な、団結を力とする

社会の創造を担いきれません。私たちは団結しなければ闘えないという敗北の中で、真剣に団結を求めあった時、日本革命の普遍的な弱い点としての非団結と、その克服としての団結を求め続けることの、階級的な力を生命力とする闘いに、ようやくたどりつきました。

私たちは今、自己の敗北を団結にむけて提起し、日本赤軍個別に問われているのではなく、どの革命でも最良の武器として問われながら、なしえない団結への自己批判実践として、ここに総括を提起します。

2 そして同時に、日本の多くの人民・同志・友人から問い続けられてきた「日本赤軍とは一体何か、どのような社会をつくろうとしているのか」を、現在の地平から、持久的な、人民・同志・友人との出会いの中で明らかにしていきたいと思えます。

私たちが物理的には日本から遠くはなれたアラブ戦場にいること、そして「武装闘争を最良の言葉」として武装闘争にのみ革命性を委ね、日本の人民・同志・友

人へ真剣にあらゆる分野で働きかけていくことを怠ってきました。その結果として、私たちと団結しようとする人民・同志・友人は敵のプロパガンダからのみ私たちを知ることになり、私たちに対する幻想や誤解が形づくられました。また私たちに批判的な人民・同志・友人は誤解にとどまらない多くの問題で、私たちを様々に批判してきました。私たちが狭い観点から、ひとつひとつそれに答えていくことを怠ってきました。そのため日本の人民・同志・友人と私たちの闘いを共有し、そして日本革命の勝利完成にむけて闘う隊伍をつくりあげていくことができませんでした。こうした革命に対する態度の積み重ねが敗北を生み出してきました。そして、敗北を真剣に問い始めた時、自らの思想的な立場・観点・思考方法を根本的に改めていく機会を与えられました。日本の戦闘的左翼の情熱や献身性、主観主義とごうまんさをひきずり、武装闘争を自己目的化し、根底的な革命観の確立を目ざさず、何のためかを問わないまま闘ってきた結果として、日本革命に責任を負う自力更生の立場から国際主義の闘いをしっかりと闘い切れずにいました。これは不断に日本人民の代表としてある自己の責任を放棄していたことに他

なりません。私たちはこのことをしっかりと自己批判する立場から、私たちが今もっている問題意識、更には私たちがめざす日本人民共和国建国の闘いを人民の力で発展させる為に、今、人民・同志・友人に総括提起を果たしていくことを責務としていきたいと思えます。そして、その中で再度私たち自身を問い返し、人民・同志・友人と共に学ぶ中で、日本階級闘争の発展と革命の指導的の中核形成を果し、共に前進する中で一つの団結をうち固めていきたいと思えます。

3 私達が、そして今、日本の階級闘争が問われ続けている問題は、革命の団結と勝利の確信の問題であると考えます。それはとりもなおさず、私達の革命に対する態度、革命思想を根本的に問うところから問題をとらえていかなければなりません。

これまでの日本革命の敗北の歴史をもたらし続けてきたものは、状況や諸々の外因ではなく、根本的には内因、つまり党・指導の側の革命に対する態度の問題であると考えます。それは革命の哲学ということでもあります。私たち日本革命を担おう

とする者が、労働者階級の立場、物の見方、考え方、作風にしっかりとたつた実践を果たしてこなかったことに、その根拠がありました。

共産主義思想——労働者階級の思想とは、人間を第一とする思想であり、革命活動は人に対する働きかけであります。その目的は、人による人に対する搾取支配をなくし、人間の本源的な集団主義——団結を通し、高い品性と愛に支えられた共産主義社会をつくることにあります。

共産主義は、最も人間主義の思想であり、敵帝国主義の思想である人間憎悪の思想や虚無思想とは全く相いれないものです。階級社会の中では人間の団結した生産活動は不断に孤立・分断・競争を余儀なくされてきました。資本主義の人間観そのものを否定しぬく力を階級へと組織する闘いは、人間の本源的な連帯としての団結を武器とすることにかかっています。その団結は、人間の共通の利益を実現する労働者階級の思想的絆によって結ばれた力でなければなりません。この思想的な絆とは、文献や理念や「べき論」でなく、生活感情・意識・無意識の感情を土台とする団結をつくることに他なりません。そして、その思想的団結は自

らのあるがままを変革しあって初めて他との団結を果たすことができます。

私達の日本は帝国主義・軍国主義の腐敗した国です。私達はその腐敗した国に生まれ育ち、生きているわけです。奴らの腐敗した思想に深くおかされています。自分さえよければ良いという利己主義や個人主義といわれるものはその腐敗した思想の特徴です。

それが革命家や、革命組織に影響を与えていないとはいえません。反対に影響をうけていたからこそ、局面局面で困難にあえば団結力を失い、様々な敗北というものを結果していったのです。

私達は自らの立場、ものの見方、考え方をしっかりと革命化していく闘いを日常の生活の中で問わなかったために、マルクス・レーニン主義を学んでもそれを本当の革命の力とできずにきました。逆にその様々な立場性、ものの見方、考え方からマルクス・レーニン主義を矮小化・卑俗化してしまつたのです。だから人民を愛し、人民にしっかりと服務し、共に闘うことができませんでした。革命の勝利の保障である団結と勝利の確信にみちびかれた同志愛と敵愾心をつくり出す

どころか、逆に分裂に分裂を重ね、力をますます分散化させ、人民を不信と混乱の中におとし入れ、人民と全く結びつけない状況を生みだしてきました。

私たちが敵の思想と不断に闘うことなしには、全ての人民が仕合せにくらせる共産主義社会をつくりだすことはできません。勝利した革命がどこでも経験しているように、社会主義の制度は樹立することはできても、人間の思想改造は、一朝一夕に行なうことはできません。人間の思想改造こそ、社会主義社会、共産主義社会をつくっていく上で、一番重要なことです。

まして、私たちのような制度的樹立も果たしていない段階の共産主義運動に、より思想改造が問われるのは、当然のことだといえます。

反帝闘争は、小ブルジョアジーでも、ブルジョアジーの一部でさえ担うことができます。しかし、労働者階級の立場にしっかりと立たない限り、社会主義・共産主義社会をつくりだしていくことはできません。

4 思想改造・思想闘争とは、マルクス・エンゲルス・レーニンなどの文献による知

識戦戦ではありません。また、血統の純潔を争うものでも、経験を競いあうものでもありません。思想改造とは、小むずかしい解釈ではなく、生き続ける人々との関係を、より普遍的な利益へと革命化しあう日々の生活そのものだからです。自然成長した思想は、社会構成内で位置づけられている立場（階級的立場）、ものの見方（世界観）、考え方（思考方法）を通して形成されるものであり、その実践の仕方が生活にあらわれます。

私達の思想改造、思想闘争とは、自己の立場、ものの見方、考え方を人間中心のものとするために、その世界観にもっとも立脚している労働者階級の思想に变革しつづけることにあります。そして自己の立場、ものの見方、考え方の革命化なしには、対象変革も果たせません。自己の立場、ものの見方、考え方、作風の階級的な統一こそ、すべての、人民の階級的団結をつくりだし得る保証でもありません。思想闘争とは、全ての革命闘争と切り離されたものではなく、革命闘争そのものが思想闘争であります。革命とは全ての人間の思想改造、労働者階級化にあります。労働者階級独裁にむけて、形態ではなく中身を、現在から、不断に準備

するものでもあります。

私達は自己の立場の革命化の方法を自己批判と批判として問うてきました。人民の自己批判と批判の実践は、確固とした生への確信を準備し、その中で人間が変わりあうことに、共産主義の確信をみつけだすことができます。私達はまず自己の立場の革命化を第一とし、その立場からのみ相互批判をなし得ると考えます。自己批判とは人民・同志・友人に、謙虚に学ぶことであり、自らの犯した誤りの教訓を人民・同志・友人に返していくものです。これまでの「批判活動」のあり方が、自己を合理化、絶対化したところからの批判であったといえます。自己を絶対化したり固執するのではなく、客観的真理の前に謙虚に自己を批判し、不断に革命化し、立場を改造する自己批判からのみ、批判活動が生き生きとした相互の労働者階級化として果たしていけると確信しています。

私達が何故思想闘争を基軸として問うたのか、日本階級闘争に何故思想闘争が問われているかを、私達の総括として具体的に明らかにし、団結にむけ問題を共有していきたいと思えます。人民・同志・友人からの積極的な提起を期待しています。

二、私たちの歩んできた道

1 私たち日本赤軍が歩んできた道のりは、未だ短いものにすぎません。アラブ戦場で、ひとにぎりの革命を志す意志が、日本赤軍の結成にふみきったところから始まります。それは悲愴であったり、ごうまんであったり、唯、人民の権利の一端を私たちが担うのだという、若く、熱い決意にまみれて、生まれました。その時、私たちは、唯、革命を欲していました。それが、科学のないひたむきな情熱や、焼ける様な人民愛の心情であり、無鉄砲な、目先の責務にかられた一つの結論だったのです。自分たちが〇〇派の貸借関係の上になりたっているという様な重くするしい観念の絆をとりはらうことから、私たちの革命は歩みはじめました。革命は、精一杯やれば許されるというものではありません。どの様な献身と、どの様な犠牲を払った精一杯であっても、その社会的実践が人民の利益を貫いたも

のであったかどうかが問われます。私たちは、精一杯という自分たちの献身と革命への忠誠にのみ闘いの価値をおいてしまっていることに無自覚であったのです。私たちと国内母体との関係は、勝利の確信や思想を共有していたのではなく、唯、戦術や実践を共有していたにすぎなかったのです。その結果として、日本を離れた日が重なれば重なる程、距離を広げていきました。それまで革命や組織や、人民や、自分の利益が唯一のものであると信じていたものが崩れはじめました。人民の為に闘おうとすれば国内の組織は抑圧機関となり、国内の組織の為に闘おうとすれば私たちは抑圧機関となってしまおうという自己矛盾を克服することが問われました。その時、私たちは、自らの献身と革命への忠誠にのみ正当性を持ち、自己の立場を変革した力で国内母体に働きかけることが出来ず、別組織宣言によって、かつて、わかちがたく結ばれていた一人一人の同志を思いながら組織的に別個に歩みはじめました。

私たちは、精一杯闘っている自分の忠誠をうたがわなかったので、そのことの困難や、訪れる難題を自ら切り拓く意志を持っていることに、唯希望を重ねました。多くの失敗を教訓とした、これまでの道のりをふりかえりながら、二度と同じ失敗や無駄をくりかえさない様に、私たちは自己批判する眼で、革命的な団結を求めつつ検証を提起します。

2 私たち日本赤軍は、日本階級闘争、とりわけ六〇年代後半のベトナム民族解放闘争を軸とする世界的な階級闘争の中から生まれてきました。ベトナム人民の闘いに呼応する波の中で、日本においては学生運動をその基盤とする、戦闘的左翼・インテリを中心とする日韓、ベトナム反戦、全国学園闘争などの大衆実力闘争の波が高まっていました。日本の戦闘的左翼は学生を出身階級とするところのプチ・ブルジョア性を有しながらも、その実践の戦闘性は、高揚の中で一定の運動を領導し、大衆実力闘争の波は広く全国的規模でひろがっていったといえます。その中で私たち日本赤軍の母体であった共産主義者同盟赤軍派がうまれました。

赤軍派は、この世界、日本階級闘争の高揚を背景に、世界階級闘争の攻勢の段階、世界共産党、世界赤軍建設へと世界の階級闘争が具体的に結びつきあえる時

代と考えました。赤軍派は、この時代を帝国主義・資本主義の時代から共産主義の時代——真の人類史への世界史的な過渡期ととらえ、過渡期世界と呼びました。赤軍派は、過渡期世界においては攻勢こそが革命情勢を發展させるものであり、レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」という受動的待期主義的な革命の時代ではないと考えました。この世界的な革命勢力を統合するのは、先進国の労働者階級のもっている世界性であり、それを領導する先進国革命主体であると考えました。それは赤軍派の力をのぞいてはありえないし、国内で実現する「前段階蜂起」を軸に、世界党建設を展望するというものです。そこから、赤軍派は武装闘争の開始を軸に、建党建軍を組織することこそが問われているとして武装闘争を開始しました。

そして、六九年「前段階蜂起」、七〇年「よど号ハイジャック」、その後の武闘実践へと、戦術的にはジグザグしながらも、先にあげた基本認識をもって展開していきました。

私たちは、この基本認識と、赤軍派の戦略・戦術展開のひとつである「国際根拠地」建設の方向の中から生まれました。「国際根拠地論」は、世界共産党建設、世界革命戦争の根拠地を先行的に組織するというものです。未だ、赤軍派の世界同時革命論に立脚した革命根拠地はなく、一国社会主義論との党派闘争を基軸に、赤軍派の理論の戦略・戦術を可能とする世界党建設にむけた場所的根拠地を創出するというものです。それに向けて国際党派闘争を担うということは「ブントを普遍的形態とし、毛沢東、ゲバラ、カストロを地方的形態としてある世界の革命派を普遍的形態であるブントへ糾合していく」という観点に立脚していました。その観点は、自己を絶対化したところからのセクト的、主観的なものでしかありませんでした。自分たちのところへ糾合していく同時革命は、主観的にはどうであれ、客観的には他の革命を日本革命の後方として考える侵略思想——天皇制思想を根深くもっていました。それはしかも純軍事力学的なものでしかありませんでした。その当時の指導思想は、革命観がなく、運動的には戦術のエスカレートでけん引しつつも、ブルジョア英雄主義的な独善に結果していました。それは、赤軍派を生みだした共産主義者同盟、共産主義者同盟を生みだした日本共産党と、

日本階級闘争の中で、革命的な世界観を真剣に問わない結果として、不断にあるがままの自己の認識が生みだす階級性の欠落した思考方法によつています。

真の国際主義は、各国の闘争が相互に結びつき相互に支えあい、各々の個性、特殊性を共に自己批判―相互批判をつうじて、共に個性性、特殊性をふまえ、単一の思想の結びついた世界共産主義運動を作り上げていくものでなければなりません。しかし当時私たちは世界に對する幻想や神秘主義の中で、自分の主観にあわせて世界をねじまげたのっぺらぼうの世界革命論に立脚していました。そして革命の権力の奪取形態の一國性をも否定する中で、アジアの社会主義建設を一國革命として勝手にきめつけ、自らが唯一国際主義を実現しているという幻想にあふれていました。私たちは世界主義、利用主義を根深くもっていました。こうした赤軍派の理論や認識は、個別赤軍派のものではありません。日本革命の中で現在に至る指導思想のもつ欠陥として克服を問われる必要があります。

3 赤軍派について問えば、形成期の段階から大きな思想的誤りを露呈して生れ

ました。それは赤軍派の登場の契機となつた7・6事件（69年秋の方針をめぐる共産主義者同盟内で前段階武装蜂起を主張する赤軍派に對して、共産同中央指導部の過半数は時期尚早を理由に赤軍派の分派動向に對峙し、赤軍派フラクションへの処分を行なおうとしました。これに對して過半数以上の学生・青年・労働者は中央指導部に對し批判的に對抗し赤軍派に結集しました。赤軍派の指導部は、大多数の支持をうけているという認識のもとに「中央官僚派」を共産同指導部から追放すべく計画しました。自分たちの主張をとおそうと「中央官僚派」の秘密会議場所へ乗り込んで包圍し「中央官僚派」に對して暴力的に對処しました。この赤軍派のやり方で共産同は急速に分裂して赤軍派は共産同としてではなく、共産同赤軍派としての闘いを担うべく別党宣言を行ないました。）に示されるように真に党を革命する立場にたてず、人民内部の矛盾であるにもかかわらず、暴力的に自分たちの意見をおし通そうとする態度に現れていました。こうした人民内部の矛盾が克服しえず、分裂を結果している問題は、日本共産主義運動の根本的な誤りであり、今なおそのような状況が、日本の共産主義運動の中に強く残つて

います。

日本共産党結成以来、革命の普遍的命題である階級的団結を真剣に問うことを果たしえなかった結果といえます。その根本は、人間が生のものであること、不斷にその過程で人間が普遍的利益によって結ばれる類的な存在であること、不斷にその過程で人間が欲望までも変革して団結を果たしていくというマルクス・レーニン主義の根本的な確信に立脚していない所にあります。そのため人民・同志・友人を心の底から信頼し、団結することを、理念や規則や技術や形態的に実現することに力を尽して来ました。革命の立場・観点・思考方法を人間観としてうちたてて来れなかったのです。その歴史的结果として、団結の質に規定された指導の質を運動的発展の極限化と、又は量的な大衆性に拝跪することによってのみ、革命性を維持するという形となってきました。

あるがままの自己・組織を絶対化し、人民の利益、階級の利益のために団結を求めるのではなく、主観的にはどうあれ客観的には自己の正当化のために、敵との対決の矛盾をそのまま味方内部に敵対的にもちこみ、他の組織をつぶすという

ような態度に、日本階級闘争が背負ってきた思想的な誤りがあります。人民を愛し、信頼せず、党の路線、方法、形態を自己目的化し、人民よりも党を優先し、分裂を結果させることによって人民の普遍的な利益を党として実践しえませんでした。ブルジョア思想の反映をうけた組織利己主義として現れています。前衛と意識する部分が自らの思想性を革命化する立場を持ち得ず、人民に革命化を求める立場にたつて革命を指導しようとした。その結果、他の組織を批判することをもって自己の存在基盤とし、敵階級との熾烈な階級攻防の敵愾心を階級的団結へと組織しぬけずに来ました。自己を革命し、働きかけるといふ階級性を党性とする指導性がうちたてられずに来ました。こうした党的指導勢力の混迷と非団結は、人民の革命性を抱摺し領導しえず、敵の延命を結果させるという大きな害毒を生んでいます。これは革命に対する態度の問題です。革命の哲学ともいえます。同じように赤軍派もその根本的な思想的誤りから自由ではなかったのです。また、赤軍派における団結の質とは、思想的一致にたつた真の党的質ではなく、武装闘争や戦略戦術というところでの一致でしかありませんでした。個々の思想

性は問われず、様々なブルジョア思想が蔓延し、それらを武装闘争や戦略・戦術で結びつけているものでしかありませんでした。階級的是同志愛から堅く結びつくのではなく、階級性を問わない仲間意識からの団結、戦闘団的な団結しかありませんでした。自分自身の意見が通らなかつたり、問題が出てくるとバラバラに分裂するという内実を結果せしめました。また、軍を担うものと軍以外のものとの矛盾や、様々な型での思想の統一性のなさの結果が、赤軍派の組織性の欠如としてあらわれていました。赤軍派がひとり一党だといわれる根拠はここにありました。それを組織として維持発展させる為に、赤軍派の最大の党派性としてあつた武闘の実践をエスカレートさせていく運動的領導にのみ拝跪していました。武闘実践を階級性の側から、人民の利益から闘う余裕もなく、武闘そのものを自己目的化していくことになりました。それが国内においては連赤の敗北までつきすむことになりました。

私たち日本赤軍は日本の革命運動の不十分性、革命の根本のしっかりしていない、このような思想性・組織性をも継承して生まれました。

4 また、赤軍派は、これまでの日本革命の様々な武闘実践の中で、敗北の教訓の中から学びぬくということができませんでした。敗北の中でその否定面を直視し、その思想性の、組織性の根本から問い直すことができませんでした。敗北を、形態や方法の問題としてみてしまい、形態や方法をかえることで、革命の担い方を根本的に問わないままつきすみました。そのような態度は、他の組織の敗北や、誤りを自己の正当化につかいこそすれ、人民の利益の立場からその敗北や誤りという否定面を共有し、日本革命・世界革命を勝利完成させるために共に克服し団結していくという立場にたてませんでした。

赤軍派は結成のひたむきな闘いの中で導いた望月同志の死を体験しながら、それを教訓化しぬけず、そのことを、ただ、自分たちの情熱や、戦闘性の純化におしとどめる結果になっていきました。こうした結成当時のあやまりを、赤軍派は、克服する契機を自己批判実践（赤軍パンフNo.2）として提起しようとはしましたが、根底的に、階級的に問えない結果として正当化論に回帰していきました。

5 そうした未熟さを孕み、使命感に燃えて、赤軍派は、「前段階蜂起」の山岳における軍事訓練中の大量逮捕などの多くの打撃をうけつつも、再度の「前段階蜂起」を貫徹し抜くため、国際根拠地建設に向け、七〇年よど号ハイジャック闘争を行いました。「国際根拠地」論の不十分性、思想的弱さをもちながらも、このハイジャック闘争によって国境をこえたということは、日本人民にとって、非常に重大な意味をもちます。私たち日本赤軍が、「日本革命は世界の革命と同じであり、その一つだ」という、今実感をうる想いは、当時ありませんでした。世界と日本を鎖国的にとらえる歴史的な制約の中に、赤軍派の闘い自身があつたものといえます。私たちが国内から見た世界ではなく、世界から国内を相対する契機がハイジャック闘争によってつくられたといえます。この作戦の軍事的勝利は、左翼陣営に影響を与えました。同時に、日帝権力は、赤軍派に対する壊滅作戦を決定し、無差別逮捕がはじまりました。その中で赤軍派は指導思想の不在の結果、ゲリラ戦の勝利を組織化へつなぐことはできず、唯、裸の合法主義に依存した運動の蓄積は、個々バラバラの防衛戦におちいつてゆきました。

九同志のよど号ハイジャック闘争が、国境の向う側で終結した時、見通しもなく、社会主義国に行ってしまったことを実感しました。論理的な整合性によって、語りつくしえない自分たちの不十分性を、感性的に意識し、それを「理論」に邪魔されながら闘えば闘うほど解体する赤軍派に対する、又自分たちの闘いに対する疑問は拡大していきました。しだいにこれではダメだ、何か間違っているという確信の中で、「世界」とがなりたてて、文字の端々に飛びだす「世界」から日本を相対化することが、主観主義を克服する道だと考えました。

日本、世界革命を準備する主体として、いまだ不十分であることを即時的に克服するために、世界の前線で自らの革命論をきたえ、世界で闘っている革命組織と共に共同武装闘争を担う必要性をそうした中で痛感しました。国際的な質を国内の闘争に反映させるために、第二の根拠地建設を問うこと、それがアラブ戦場への出発の起点でした。そして赤軍派の中で、それが認められないままアラブ先発隊は準備を開始しました。革命の勝利した国ではなく被抑圧階級が主人となるべく闘っている革命の過渡にある戦場へ行くことを考えました。賛否の中で当時幾度か

方針は変りましたが、私たちは行くことを変えませんでした。日本革命を救う道だという大義は、赤軍派として行くかどうかは二の次という一方的な情熱の中で正当化していききました。こうしてパレスチナ戦場へたどりつきました。

ベトナムやその他の国ではなく、パレスチナ・アラブ戦場へと向ったのは直観的なものでありました。パレスチナ・アラブ戦場は世界帝国主義、シオニスト・アラブ反動勢力と対峙する矛盾の集中点であるということに由来します。そしてそのため、パレスチナ革命は必然的に帝国主義本国内の質と第三世界の民族解放闘争の質を二重に持つており、パレスチナ・アラブ戦場が、世界革命の根拠地として成長することが問われていると考えました。ここに国際主義があり、帝国主義国内の闘いを共有できる質もあるのではないかと考えました。「国際根拠地」を国際主義として口ではいいつつも、それは日本に武器を入れるための後方ぐらいにしか考えない傾向があったため、それに反発して生命をかけて共に闘うことが連帯だと、自分たちのパレスチナ・アラブ戦場での闘いの純粋性に誇りさえ持っていました。赤軍派の誤りや失敗の一部を自分たちが担っているという意識よ

り、自分たちがやれば何とかなる式の自己の確信にのみ正当性をみいだした闘いの出発であったといえます。

6 私たち日本赤軍は、このような思想欠陥をかかえて生まれ、自らの存在を「武装闘争の持続、発展」にのみおいてしまい、思想性、組織性の内実を問わずにきました。日本の人民としっかりと結びつくことが出来ず、革命の指導思想を持たず、そこから生れる真の革命路線をもつことに無自覚なままでした。

革命の指導思想である人間を第一とする思想にたてず、人民を愛し、人民を信頼し、人民と共に革命を担うという立場にたちきれませんでした。従って世界革命への自らの主体的な責任であり、日本人民への責任である日本革命、日本人民共和国建国という主体的な革命路線をもつことが出来ませんでした。

私たち日本赤軍は、今ストックホルムでの二同志の被逮捕、屈服、自供という私たちの否定面の総括を真剣に繰り返す中から、やっと自分たちの本当の姿を観ることが出来たといえます。その教訓を人民・同志・友人に提起し共有する中か

ら、私たちは共に前進していけるのだと思います。

私たち共産主義者のめざす革命とは、人による人の搾取支配をなくす闘いであり、党活動の基本、革命活動の基本は「人に対する働きかけ」です。人間に対する働きかけ、人民との結合を組織していくことは、党及び個々の黨員が、人民の模範となる共産主義社会の未来を体現しえる思想性・品性をもとうとして、不断に自己の欠陥と闘っていなければなりません。それは日々、不断に自らを革命化することなしには、可能となることはありません。

しかし、私たちの歴史は、人間を第一とする階級的思想をうちたてようとする党内部の活動が不十分、いや、なかったといっても過言ではありません。

つまり、敵の思想の反映をうけたまま、自らの革命をおこなおうとせず、人を組織しようとする対象変革のみの思想です。プチ・ブル思想つまり敵の思想の中で育った私たちが、自らを革命化することなくしては、果して人民に責任をもてるでしょうか。「自らを革命化することなしには勝利しえない」ということを、私たち自身本気でやりぬけませんでした。様々な生活環境の中から自然成長した

階級性をもって、その積極面、消極面を問わず、当面の目標に団結するだけの近視眼であったといえます。

私たちは、人間を物の価値におきかえる敵の思想、人間よりも物を第一とする思想におかされてきました。私たちの目的である人間を解放していくことが、その手段によっておきかえられ、党の形態や路線、また武闘を自己目的化し、同志や人民はその下においてしまっていたのです。主観的には、同志、人民のために闘いつづけている非妥協性の決意の中にひたりきっていたために、そのことを客観的に直視することに遅れてきました。革命主体の最大の思想闘争は、主観主義との闘いであるといえます。希望的観測や、「べき論」や、そうした思い込みは、素直に、客観的世界を認めることをむづかしくしていきます。七・六や、連赤、そして、今なおつづいている「内ゲバ」に共通の主観主義の思想性があらわれています。

人民を、人民の代表である同志を、自然に愛せる感情を育てえなくては、革命を事務や実務におしとどめることになりません。また、おとしまえや個人的営為の

決意の連合によってしか隊伍を保ちえません。人を知識や技術能力ではかりランクづけするのは資本主義社会です。そうした敵の思想のままに闘えば、自らが前衛性を意識する時、しらずしらずに、人民・同志・友人を後衛として蔑視して考えてしまっているのです。そうした革命に対する人間第一の思想に無自覚のまま主観的な革命性を発揮すればする程、必ず孤立を準備していきます。孤立をおそれているのではなく、連帯を真剣に求めなかつた自己を問うことが問われているのです。闘えば闘う程人民の団結につながる持久的な闘いを通して、革命は実現されるのです。これまでのような闘い方では、本当に人民・同志・友人が、未来——共産主義社会を確信し、共に闘い抜くという気持がおこらないのは当然だといえます。

逆にいえば、私たち自身が本当に共産主義社会をつくりあげようと考へなかつたといえます。共産主義を文献や理論の中で、形態論で考へてみても、人間を第一とし、共にかわっていくという確信がない限り、共産主義の本当の確信が生まれてこないのは当然です。自己——対象がかわるといふ客観法則の認識がない限り、

人間を愛することも、その未来を確信することもできません。

人間の本質的欲求である団結で結びあうことを阻害している根源は資本主義であり、階級支配の中からうみだされた思想は、利己主義・個人主義として人間の連帯を破壊しつづけています。そこから生まれる人間憎悪思想は、共に生きるといふ人間の本来の姿である共産主義を見失わせています。資本主義が良いか、社会主義・共産主義が良いかなどという比較論議も敵共の思想的支配の結果であるといえます。

革命と、社会主義・共産主義は、いかなる人でも人間を第一とし、矛盾に真剣に非妥協に対決して、必ず到達する社会への確信です。

だから、革命の一定の成功の中でも、新たな社会の制度の樹立ということだけではその基礎をきざいたにすぎず、私たちは資本主義思想の残りかすと不断に闘いつづけなければなりません。

虚無思想やその他の様々な思想は、人間を愛することのできない、人間の未来を信じることができないことからくるブルジョア思想です。

私たちは、しらすしらすこうした敵の思想を肯定したところから資本主義批判を實踐していたのです。資本主義に反対する人々はたくさんいます。しかし、敵の思想の中にあつては、人間が共に生きる未来への確信がもてず、不断に虚無的な思想や、形而上学的なあきらめに流されていきます。資本主義批判は、日々の生活に立脚した実践であり、自己をも、資本主義批判の対象としうる全面的で、持久的で日常的な批判実践として成立することが、革命の思想の確立の過程といえます。それこそ労働者階級独裁・継続革命を客観的に準備する姿であるといえます。

私たち日本赤軍、赤軍派をはじめ、日本の共産主義運動は、資本主義の幻想と非妥協に対決する思想の強固さをうちたてえず、敵の思想におかされていたといえます。人民と人民の代表である同志ひとりひとりを愛すること、そして、互いに不断に革命化を果し得るといふ確信こそがしっかりと団結をきざずき、共産主義の未来を獲得し得る道を準備します。この確信こそが勝利の源です。

7 私たちがパレスチナ・アラブ戦場にきてからの闘いは、まず自分たちが観念の中で肥大化させていた革命を、世界で現実に関う全体と共に学び、解体する過程でした。

しかし、路線的には共産同赤軍派の「政治路線」を継承するという矛盾の中にもありました。それは「プロレタリア国際主義」と「国際根拠地」に立脚した世界党―世界赤軍建設という方向性でありました。「プロレタリア国際主義」「国際根拠地」の建設そのものは革命的な観点であり、革命の先達、そして現代の革命の勝利の中で実現されている闘いです。しかしその内実は、世界党建設を自己目的化したものでありませんでした。(人民の闘いに立脚した社会主義建設のない)観念的な論理で党派闘争を肯定し、それで勝敗を決しても世界党が出来るはずもありません。政治路線はしっかりと感性的認識にうらうちされた論理的認識に高められたものでなければ、「べき論」のみに帰ってしまいます。その意味で真の政治路線について思想的にしっかりと理解できていなかった私たちは、「国際根拠地」の建設、党建設を人民性に立脚した主体的な日本革命の展望として問うこと

に遅れて来ました。建党建軍を武装闘争の持続の中で展望するということのみにゆだねた自然成長性として狭い観点でとらえていました。

当時私たちは、外国で出会う同志たちが「理論」に無頓着なことに、かつしたたかであることに驚きました。そしてその驚きは数ヶ月もしないうちに自分たちにはね返って来ました。言葉では革命は成熟しないという事実です。そして私たち自身が振りかざしていたものが「理論」ではなく剽窃された知識の記憶であることを知りました。戦闘的な諸組織が衝動と主観的願望の中で、それにあわせてマルクス・レーニン主義の教本を切りきざんで張り付ける時、どんな悪質な論理も論拠を得るということです。私たちが客観的世界を客観的にみることが出来なかつたこと、つまり感性的な認識の变革と、それを土台とする論理的な認識を持ちえなかつたことを理解し始めました。労働者階級の立場、観点にたとうとする党の革命を実践するところから政治路線を確立しえていませんでした。

最初に気づいたことは、「国際根拠地」とは日本国内でもあるということです。そこから「前線は銃後々方であり、銃後々方は前線」であるという認識にたちま

した。世界党建設という問題が、私たちが考えていたものでは全くないということがわかりました。それは国内での私たちの思想の現れであった「国際党派闘争」によって世界党を作るということ、すなわち赤軍派を世界で一番「普遍性」を体現した正しいものとし、「地方性」の現れである中国を中心とするベトナム、チヨソン、キューバを自分たちの下に統合するというものでした。自己を絶対化して対象の变革をはかろうとする、主観主義のあらわれであったわけです。それほどのようにして党をつくるかという問題意識が革命的世界観を基礎として出されず、党を人民と結合していかないもののように考えていたのです。党は人民がつくるものであるという当然のことについて、やっと思想的に理解し始めました。

各国の革命、人民に責任をもつ指導性の結合を深め、党の学習と革命の場を作り合うこと、それが各国の革命思想をより普遍的観点から指導し抜ける質をつくりえるのだと考えました。そうした運動的な場こそ共産主義運動を組織するといふことです。各組織が出合いの連合性の中で党の戦略的団結を深め実践を共にし、一つの思想的結合をはかっていくことが問われているのです。そしてその方向に

向けた現在の姿として「党の戦略的統一戦線」から出発するという立場にたちました。私たちはその統一戦線を、より運動的なものとしてとらえ、その場を世界革命に向けた党の同質化、革命化の場として発展させていくものと考えました。学習と相互組織化の中で単一化を勝ちとつてゆくものであると考えました。

しかし当時私たちは、政治路線を思想的に再検証せず、むしろ赤軍派の「政治路線」を豊富化する形で政治路線を構築しようと思いました。そのことから、やはり運動的發展にゆだね、自己主体の中身を問わないまま、共同武装闘争による「党の戦略的統一戦線」の組織化を基本的な革命路線として、共産主義運動の組織化を開始しようと思いました。この共同武装闘争による組織化の路線は、思想的に再構築しぬく中で、再検証されながら現在の日本赤軍の総路線の一環をなしています。しかし私たちの闘いのこうした自己解体と再生の闘いの端緒期には、組織された力として全軍化をはたしえず、政治と軍事の分業の中になりました。同時に国際主義の実践に向けた闘いを、これまでの観念論を克服するとして、理論をすべてふりすてた武装闘争行動にのみ価値を依存して闘い始めました。

8 そうした中ですでに71年、私たちは国内赤軍派の同志たちとの矛盾をかかえました。矛盾そのものは、国内当時からあったものがより明らかになってきたのです。国内の党的ヘゲモニーの確立を第一義とし、「国際根拠地」を自分たち赤軍派のみの後方としてしか考えない赤軍派の同志たちと、国際主義は口先だけでなく命をかけて連帯することであり、国内、国際で同時に準備していくという私たちの意見は、正當に深く討議しえぬまま、不信がつのりつづけました。パレスチナ・アラブ戦場へ来て以来の私たちの感性的認識の変化を国内に返し切れない分だけ矛盾は更に広がり、また通信体制などの技術問題を含めて私たちと赤軍派の淵は深まりました。

私たちは最前線構築を目指し、同時に国内の後方としての任務を遂行するという一個二重の主体としての「国際根拠地」をめざしていました。国内赤軍派は、国の権力問題を抜きにして在外活動はありえないという方針の中で、国内武装闘争共闘をすすめていたのです。両者の問題意識を指導する質を両者とも持ちえず、矛盾を党の革命へと組織しえず分派へとすべてを結果させました。その分派提案

にも国内から一切回答のないまま関係はとだえ、私たちは悲愴な決意にみちて、一握りから始めることになりました。赤軍派と自己を改造し、働きかけ、団結をつくり出していくことはもう無理として分裂し、とにかく現在の闘いに呼応しえる国内の友人・同志を新たにつくるということに転換して歩み始めました。そして同じ頃、国内の赤軍派は連赤へと向っていました。

私たちは国内母体を失う中で、精神的にも物質的にもゼロからやり始めることになりました。何々派という意識の残滓が進歩を邪魔していると考えた時、私たちは日本人民の代表として自らを考えなければいけないことを悟りました。このことは私たちに、逆にどここの組織の支部として形成されたはずという重苦しい鎖から自らを革命し、解放し、全人民の革命に責任を持つ主体として自己規定しうる契機を作ったといえます。勿論、その意識性が全面的に人民性を基礎に転換されえない、一つの契機でしかなかった為に、古い組織感や革命に対する観念を抱いて、敗北をその後導いていったのです。私たちは日本人民の代表としての広さを持つことを、党派への反発ということをもバネに自己組織していったのです。

9 そして数ヶ月後、国内の連合赤軍の同志たちの痛苦の敗北を目の前につきつけられました。冷静に受けとめる程私たちは理性的ではなかったし、それ程離れがたい「同志」というものを実感しました。連合赤軍の敗北を通して、赤軍派の同志たちが苦難の飛躍を問われていたことを知り、唯、共に担わなかったことにくやしさにとらわれていました。

連合赤軍へ向った同志たちの闘いの誤りは、私たちがそして日本階級闘争が持っていた根本的誤りの露呈であったといえます。それは党を革命する立場に根本的にたぢきれなかったためです。とりわけ指導部が自己を改造し、働きかけていくことができなかつたことと、指導思想の未熟さが大きな原因をなしています。激しい権力との攻防の中で連合赤軍の同志たちは鋭く自らの思想性が問われ、自らの革命化、労働者階級化を果たそうとしたのです。その時指導部は、自己を改造する立場に立って働きかける指導性を持ちえず、自己の小ブルジョア思想を絶対的な基準として、下部の同志たちへの対象変革を求めることに陥りました。

同志の欠陥も自己の欠陥として共有し、克服しようと思わず、各個の欠陥を各個

の私的なものとしてとらえ、克服を又個人の問題に帰して行なおうとしました。その中で否定的側面を克服することを死をかけて闘い抜く質とし、生きた人間への働きかけを清算し、結果的に「べき論」で抽象化していきました。その抽象的な共産主義から同志に対して暴力的に自己批判、総括を要求するという事態を生みました。

人民の代表である同志を愛することが革命勝利の源であることは、革命の先達が幾度も示しています。同志を信じられない思想、人民を信じられない思想、人間を真に解放する立場にたち切れない思想の貧困さは自分の尺度を絶対化します。革命の指導はブルジョア社会の上から下へではなく、全員が共に強化される隊伍の統一を作ることです。指導性はすぐれた同志に進んで学ぶことが出来る自己の革命に対する真剣さの中で育成されます。

連赤において退くことのない使命感が強まれば強まる程、こわさ、いやさという段階にある感性の正直な本音を、「べき論」でがんじがらめにしながら、飛躍、闘いの質に応える主体形成を問うたことに問題の根拠があります。指導部も同志も、

本音と「べき論」の中で、確信を本音に向かって組織するような開きもなく、「べき論」の中に弱さのすべてを保身していたのです。こうした飛躍の問い方はブルジョア軍隊と共通の思想基盤にたどりつきます。革命と人民がかわりあい団結しぬけるという勝利の確信からではなく、即自的なのりこえをのみ問いつづけ、敗北を結果させました。これは「七・六」という赤軍派の形成期からひきずってきた私たちの根本的誤りが露呈したのです。そして一四人のなにもにもかえがたい革命戦友たちを自らの手で死においやってしまったのです。そして、「七・六の不徹底」ということが、連赤の同志たちの間で問われていたことを聞いて、私たちはそのことを考えるとき、日本の左翼の思想的貧困が多くのかげがえのない革命戦友たちを自らの手で殺していたということに痛苦の思いにかられます。

これは連赤だけの問題ではなく、日本の左翼総体がそうであったと私たちは考えます。それを連赤が尖鋭に示したにすぎないと実感しています。

私たちは、この連赤の敗北に対し、軽井沢銃撃戦を、連赤の同志たちの即自的ではあるけれども人民への自己批判の積極的契機として確認し、共に、日本革命

家、革命組織の革命化、労働者階級化を果してゆくべきだと思えます。

10 私たちは、国内母体を失ったまま、パレスチナ人民解放戦線と共同軍事行動にむけて闘いはじめました。その結晶がリツダ闘争です。

リツダ闘争は、その武闘実践によつて、私たちの主体的力量をはるかにこえてしましました。リツダ闘争がもたらしたものは、パレスチナ・アラブ人民の利益を最大限の内実として闘い抜くことによつて、パレスチナ・アラブ人民に国際主義に貫かれた勇氣と力強い勝利の確信を示しました。リツダ闘争はパレスチナ・アラブ人民の心に深くきざみこまれました。街ゆく人のひとりひとりが本当に、この闘いに感動し、日本人の代表の文字どおり生命をかけた連帯に力強い握手を求めました。

更には生死を共にする連帯こそが、世界革命に向けた各国人民の代表の結合環であることを示しました。それまでの口先や観念の国際主義をうちやぶり、宣言や会議で結合する限界を批判し、生きた武闘実践こそが、各国人民の闘いをひと

つの世界革命の潮流へと結合させてゆくものであることを示しました。

リツダ闘争は、日本人とパレスチナ・アラブ人民、更には反帝国主義・反シオニズムの闘いを担っている世界の人民の闘いを結びつけ、うる主体を生み出しました。日本革命が世界のどの国の革命とも同じ立場・観点によつてなりたっていることを、日本革命主体の建設にむけてさし示したのです。その闘いは又、私たち日本赤軍の誕生でもありました。

被抑圧人民の共通の利益の実現にむけて、パレスチナ・アラブ人民のために、自らの犠牲を恐れず、一兵士として闘い抜いたリツダ闘争の戦士たちの作風に闘いの一切の根本が示されています。リツダ闘争を最前線で担った戦士たちの共産主義にむけた非妥協な闘いは、深く国際主義にのつとつた人民性をさし示しました。

日本帝国主義は革命の国際主義化を恐れ、日本人がこの闘いに思想的共鳴をもたない様に様々な反革命宣伝を行いました。しかし、アラブ諸国が「リツダ闘争支持、日本商品の排斥へ」と流動化する中で一握りの日本赤軍の存在によつ

て、日帝のアラブ侵略政策を、根本から検討せざるをえない外交路線の破産を生みました。

そして同時に、当時の日本の左翼の人々は、この闘いを十分理解しきれず、大量虐殺であるという日帝の反革命宣伝に、知らず知らずに、結果的に加担する意見が多く出されました。戦闘の最中に死んだシオニストの中にプエルトリコ人がいたということで、この闘いの階級性・人民性を無視しようとなりました。死んだプエルトリコ人の問題は単に被抑圧民族という問題ではなく、「イスラエル」という戦場へ行った人々であり、また、ヤングローズ党が声明したように、そのようなどころへ行く人々はプエルトリコ人民ではないのです。どの被抑圧民族にも必ず階級矛盾があります。「イスラエル建国」を支える彼らはプエルトリコ人民にとっても階級敵、民族敵とけつたくする民族のうらぎりものであるといえます。そして、その銃弾すらシオニスト国境警備隊の無差別な銃弾によってあびせられたものであることは、後に証明されました。シオニストは人民ひとりひとりの生命よりも、「イスラエル」という選ばれた「民族」の「国家」そのものを第一とす

るファシストでしかないことを示しました。それは、マローットの闘い、キリヤトシエモーナの闘いでみられたように、シオニズムの「民族」「国家」を第一とする反人間的な思想・人間憎悪思想しかもちえていないのです。第一次大戦中、「有能」なユダヤ人とひきかえに、数百万のユダヤ人をアウシュビッツに送りこんだのが、シオニストユダヤ人自身であったことは、広く歴史の中で証されています。このシオニストの人間観に対決し、私たちの同志たちは、「民族」「国家」という幻想の領域をこえ、パレスチナ・アラブ・ユダヤ人民の階級性・人民性のうえにたつて、最大限パレスチナ・アラブ人民、そして反シオニストのユダヤ人民、更には世界の反帝国主義・反シオニズムを闘い抜いている人民の利益のために、シオニストの心臓部を撃破したのです。

自らの生命よりも、人民が仕合せに暮せる社会の建設のために未来を確信して闘いました。同志たちが闘いのあとにのこした家族への手紙で、「ハダシでキャンプを歩るくパレスチナの子供たちをみてみると、この子供たちが自分たちの後につづいて銃をとるといっしかりとした確信がわいてくる。この子供たちのため

に……」と語ったように、最大限パレスチナ・アラブ人民の利益のため闘おうとしました。同志たちは、人民のひとりひとりへの愛といかりをむねにいだいていました。

また、常に日本人民の闘いへ思いをはせ、何故、力をあわせて闘いえないのだろうか、連赤のようにかけがえのない同志を殺すことになってしまったのだろうかとかと考えつづけて闘いを担いました。階級の利益、人民の利益を最大限内実とする闘いによってこそ、日本の人民に団結を訴えられると確信し、闘いへと向いました。それは、一年以上の間、私たちが、このパレスチナの最前線で学びえた、革命の勝利は団結することだという内実を返し切れず、国内においては連赤の敗北を生みだしたということに對する自己批判でもありました。「もうすこし早く闘いを担っていたら……」と連赤の敗北を知った時の悲しさ、くやしさの中から、本当に私たちが実践の中で団結を求めることを決意し、その実践として、リッダ闘争があり、日本赤軍の誕生がありました。

私たちは同志たちが残していった人民への愛、同志への愛は不滅であると考えます。そして、そこにこそ、私たちが出発しなければならない共産主義思想の根幹があったのです。

11 そうした革命性と同時に、リッダ闘争の主体的地平は、又様々な限界をもっていました。当時の私たちは、日本人民の代表として自己規定しなければならぬということ、客観的には少数の戦闘団でしかないことの矛盾の中にいました。

戦闘団という現実から出発しなければならなかった私たちは、物質的限界だけでなく、思想的にも限界をもっていたといえます。私たちの情熱や献身性というもの、思想的なまでに高い同志愛をはぐくみながらも、それが党性、階級性というものを持ちえぬ個々の確信や決意の中にあつたといえます。その同志愛がひとつの指導思想と、その思想の統一としての労働者階級のもっている組織性をもちえぬままにあつたといえます。

私たちの個々の確信や決意が武装闘争という行動の極限としての団結、すなわち死を共有する団結にとどまっていました。共産主義の生の哲学を示すには、自

己に犠牲的死を課すことが必要なのだというロマン主義がありました。日本の同志たちにわかってもらうには、自分たちが死ぬことしかないというせつな的で十分な思想がありました。悲愴で根本的には団結を求めない、自分たちでなんとか日本革命のあけぼのを切り開くという自力更生のはき違えに結果していました。それが私たちの党性、組織性をうちたてられない限界を形作っていました。

そうした自分たちの納得の中で革命をめざすやり方は、客観的には大きなすばらしいリツダ闘争の闘いを国内へと普遍化しきれない質としてありました。国内赤軍派との分裂以降、共に闘い抜く国内の同志への働きかけが、不十分な心情的結合や信頼が階級的に強固にうちたててることをしなかった結果、すばらしい闘いとは対照的に国内の母体の敗北を生み出しました。国内母体は、私たちが赤軍派を母体として関係を作りきれない所から、個的な信頼関係、それこそ戦闘団的な団結の中で作り上げてきた組織でした。日本革命の歴史的段階の地平に立脚した国内同志たちの組織作りを共有せず、パレスチナ革命の歴史的な地平を闘いの基盤とする武闘実践は、作りかけた国内の母体を解体せしめました。

その同志たちが、リツダ闘争のあとの敵の大弾圧の中で解体され、その中心的に担っていた同志が敵権力に屈服するという事態までうまれました。敵の弾圧は市民をはじめ面識があるというだけで悪らつなデマ攻撃を加えて、リツダ闘争と人民との結合を分断しようとしてきました。

この敗北は、私たちの団結の内実を示していました。私たちの団結の質そのものが、ひとつの階級の思想を指導思想に結びつけた党的な団結ではなく、ひとりひとりの確信や決意といったものを武闘行動という一点で統一しているだけのものでした。そこには言葉や観念論に対して、行動を実践をとという立場にたちながら、それは日本左翼諸派の観念性・主観性への反発からきたものでしかなく、反発である分だけ私たちは、同じ誤りをもっていました。権力の圧倒的な攻勢に対してまさに耐えられない質でした。私たちのひとりひとりが労働者階級の立場、ものの方、考え方、作風を与えるような不断の革命を組織的につくりえなかったのです。

私たちの人間観、組織観、革命観のために、自分たちが人民と同じということ

をとらえられずにいました。自分たちの特別の使命と考えて、他とを区別する英雄主義は、団結を差別に転化させます。区別する中で団結を革命を担おうとすれば、必ず強い者と弱い者は固定的な関係に陥っていきます。戦闘性や知識の量はその思想性ととりちがえ、自分たちを何かしら人民と違うものと考えているために、人民との結びつきをつくることができず、逆に自己の根本である人民と同じであり、共に生きるという本源的な欲求を、ブルジョアジーに近い出身階層にある分だけ、またそこから組織しきれない自然成長の分だけ、そこを敵につかれていくことによって敗北していききました。それは私たちの革命に対する態度の問題であり、革命を方法や形態、能力や技術の問題として考えることしかできませんでした。革命の根本は人に対する働きかけであり、人を第一とする労働者階級思想を持ちえない限り、物を第一とするブルジョア思想に敗北していききます。

当時の私たちは、国内のこの敗北から根底的に学びきることはできませんでした。国外の私たちは、リツダ闘争の勝利の中で、勝利の側に身をよせ、個の確信や決意の連合である全体内部の矛盾を問わず、自らの問題としてとらえきれませんでした。国内の敗北を、全く私たちと関係のないもの、国内主体の問題であると考えてしまいました。そのことがその後、私たちの敗北を生み出す結果となりました。

同時に私たちの団結の質の不十分性としてあらわれている問題として、岡本同志の問題があります。ブルジョア新聞やシオニストニュースを通してしか知りませんが、私たちはリツダ闘争後の非妥協な同志の態度が変わっていないことを信じています。しかし、その中に私たちしか知りえない事実があるということを認めざるをえないと思います。しかし、私たちはそのことによって、岡本同志が私たちをうらぎったとか岡本同志の個人の問題とは考えません。それは私たちへの痛烈な相互批判としてあるということです。私たちは岡本同志への徹底した自己批判が問われているのだと考えます。

それは、私たちの団結の質が、まさに共産主義へ向う団結の質をつくりだしていかなかった結果だといえます。私たちが、個々の確信や決意を、武装闘争と死を共有することを軸に結集した、そういう団結でしかなかったためです。ひとりひと

りの同志たちのもっている人民への愛と確信を、ひとつの指導思想へと結びつけるということができず、それを武装闘争という行動へと一面化していたために、同志たちの共産主義へ向けた真の闘いを主観的にしか考えきれず、その闘いのもつ客観的な大きさや階級性を、私たち自身が狭くしか考えられなかったためです。それがブルジョア新聞によって伝えられる「同志の態度」の根拠をささえていると思います。

私たちは、岡本同志を必ず奪還し、再会し、その不十分性を開示しあい、克服し、私たちが今握りはじめたばかりの勝利の確信を共にうちきたえてゆきたいと考えます。

12 私たちはリッダ闘争で切り開いた地平を発展させるために闘おうとしました。ひとつは共同軍事行動による「党の戦略的統一戦線」の構築と発展であり、もうひとつは日本の革命主体に団結と前線化を呼びかけ、その一個二重の闘いを通し、日本人民の代表として私たちの主体を構築することでありました。しかし、リッダ闘争の地平の発展を、武装闘争の持続発展の中で実現することに精一杯であった私たちは、武装闘争の持続を目的化していきました。私たちの当時の意識としては、とにかくリッダ闘争の同志の闘いを引き受け、発展させなければと、必死の思いで闘いつづけていました。そして同志たちの闘いのすばらしさ、同志たちの思想性のすばらしさを、すべての人民に共有してもらいたいと思いました。そして情熱と献身性を武器に次の闘いを準備していきました。

私たちの団結の質はリッダ闘争を基軸にしながらも、個的な三戦士に対する愛情から敵への復讐を誓うといった態度があり、客観的に実現されたリッダ闘争の階級性を普遍化しきれないものであったといえます。人民を組織し動員するよりも、戦士の個的な強さに、その決意に依拠する建軍に傾斜していきました。

それと同時に、軍事行動の自己目的化によってもたらされる政治・思想の軽視、政治思想的退廃をもたらしました。敵がつくる幻想を、しらすしらすに肯定し、自分たちを力量以上に考えてしまうことでした。私たちが学び教訓としてきたことを隊内にとどめ、十分に国内の人民・同志・友人に伝えようとしぬい虚栄心を

もっていました。自分たちの気持としては精一杯正しいことを貫いていても、客観的には英雄主義も傲慢もその中であつたのです。

それが、私たちが小さな陣型を拡大できないまま、武闘を担わなければならない現実として結果させました。同時にそのような現実には、国内の同志友人との思想的力を軸にした団結ができない分だけ、闘いの戦列を民族解放闘争を担っているパレスチナ解放人民戦線に依拠したまま運動展開していく結果を生んできました。

13 リツダ闘争を一回性にとどめず、積極的に日帝打倒へと組織しぬくものとして、七三年日航ハイジャック闘争が行われました。共同武闘の発展として、更なる共闘主体の結合を果しながら闘われました。私たちは、赤軍兵士奪還とシオニストへ日帝が賠償した金の10倍の金額を要求しました。

日航ハイジャック闘争は、S.O.L.O.（被占領地域の息子たち）との共同武闘として闘われました。しかし、私たちの作戦は、日帝を相手にしながら、主導的に

政治展開をにないえないことから軍事的敗北をもたらしました。

その敗北が闘いの展望を示したものは、戦士たちの革命的態度にありました。それは、あくまでも任務をまっとうし、その結果としての死をもって闘いを防衛した女性戦士並びに戦士たちによって支えられていました。

私たちは、日航ハイジャック闘争の中から、国内の革命組織やグループの統一をめざす呼びかけを發しました。これは国際的な革命組織間の団結をめざすものと照応する関係にあります。と同時に、日航ハイジャック闘争を通じ、担い手たる私たちが、国際的連帯強化に応えうる自らの基盤のせい弱さの中で、闘いを通して現出する矛盾を克服しえていないことが明らかになりました。共闘組織間の矛盾を積極的原動力とせず、矛盾をかかえこむことにおちいつてゆきました。

私たちはこれを自力更生の欠如として総括しました。自力更生を軸とする日本革命の責任を問わずに、国際主義連帯はありえないことを戦闘の中から学びました。

私たちはより意識的に自力更生へと向っていきうとしました。そして、私たちが現在の闘いをおしすすめると同時に、どこにも依拠せず、しっかりと日本の人

民と団結し、闘いの持久的な物質基盤と再生産構造をつくりあげる必要性を感じました。

14 シンガポールクウェート連続闘争は、より自力更生をめざし、アジア戦場とアラブ戦場の結合をめざして闘われました。しかし、自力更生路線が、革命組織間の依存関係を克服するということに目をうばわれ、人民の自力更生の闘いの側から確立しぬけず、即自的なものでしかありませんでした。自力更生の組織化が、思想的にも物質的にも確立できないため、より矛盾が集積していきました。そして、国際的団結の必然的広がりの中で、共同武闘を軸にとらえることが、自己の主体的蓄積がない分、国内を育成するより、自分たちの闘いの後方としての任務を担わしめていきました。不断に、原則と現実の中で、現実の闘いに制約され、無理な任務を国内におわしめることになっていきました。人民と団結し、団結を武器としなければ、どのような闘いも長つづきしえませんが、

私たちは「前線は銃後・後方であり、銃後・後方は前線である」と認識してい

たにもかかわらず、不断に国内を自分の現在の闘いをきりひろくための後方としていることに気づきませんでした。しかし、私たちが自力更生をかちとらない限り、パレスチナ革命への即自的実践を統一戦線内実へと高め切れず、またパレスチナ革命の発展強化に向けた持久的な国際主義が果たしえないと考えていました。日本赤軍としての主体的な闘いの強化が要求されたのです。しかし、その主体育成を、武闘を基軸とする闘いの中で作りうるということのみ純化する傾向としてありました。

シンガポールの闘いにおいても、作戦部隊の持久性をとおして、その闘いの意義を明らかに示し、更にはクウェート作戦を生み出すことによって、敵との非妥協な闘いを貫くことが出来ました。しかし、敵との非妥協性を、主体内部の階級的な結合へと組織する観点がなく、味方内部の矛盾があるがままに放置していき

ました。私たちは、自力更生を日航ハイジャック闘争の総括として出しながらも、武闘の持続を自己目的化する中で、建党・建軍における待期主義と、パレスチナ革命

主体への無原則な結合を解決することが出来ませんでした。

15 私たちは日航ハイジャック闘争、シンガポール・タウエート連続闘争を経る中で、自力更生を、リツダ闘争とそれ以後の闘いの地平から確立することをめざしました。しかし、私たちは国内に対して諸組織の統一をめざす建党・建軍の提起にとどまり、主体的な国内組織化の弱さゆえに、陣型の現実的弱さを克服する基盤と再生産構造をもちえませんでした。結局、その矛盾を即自的に武闘を目的とすることにおいて、組織強化へと短絡させる結果をまねきました。これは赤軍派との党内闘争を、赤軍派の指導部と支部という関係の中でしか提起できず、結果として訣別（分派）による自己組織化を行なっていた時から、より蓄積が問われていました。それが実現しえず、革命党・軍へ向けた組織化を組織日和見主義的にしか提起できず、国内建軍を国内主体の自然発生性にゆだねる中で、自然成長的な相互関係をもち、組織の発展を待期主義的にとらえていました。そして、国内主体との不通という状態、また問題意識のズレも、そうした団結の質の結果

に帰因しています。

また、私たちは、自力更生の問題を階級的な観点からとらえきれず、人がいないとか、物質基盤がないとか、ブルジョア思想の反映としての物化した観点を持っていました。このブルジョア思想の反映を、自覚的にとらえることができませんでした。被抑圧階級の側に身をおいて自力更生を路線化しえても、自らの感性をも自己改造していく方向性を持ちえませんでした。それは、日本の左翼の観念性に対する、うらがえしの実践による克服というレベルでしかなかったためです。私たちは、自らの主体の不十分性という問題に対して、屈辱的な敗北をしていない、おこなっていました。それは、自らが一回一回の闘いで、屈辱的な敗北をしていない、勝利に向かって武装闘争が発展しているという武闘実践に対する誇りが、しらすしらずに傲慢さをかたち作っていたのです。非妥協な武闘実践の貫徹という時代に問われている質に応えぬいて、政治的勝利ととらえることにより、闘いえている自らに幻想をもち、幻想の中におちいっていました。

16 個々の戦士が、死を決意して日本赤軍に参加するという中で、その決意の質を問わずに放置し、個々の決意がブルジョアの組織観となっていました。思想性を問い、革命化・階級化を問い、階級的な団結をめざすことができずにいました。私たちの間には、武闘を軸とする連合性、仲間意識の団結しかありませんでした。この団結の質は、武闘の勝利には涙ぐましい団結を誇り、一担敗北すると不信に転化するような質でした。革命への真剣さが武闘への真剣さに一面化され、人と人との関係における真剣さが軽視されていました。革命任務が二四時間の日常の闘いであり、その結果として、戦時の質が示されるといふことを考えきれずにいました。

新たに志願してくる同志をその決意ではかり、その決意がどこからもたらされたものかを問わずにいました。組織生活も確立していなかったため、日常の隊内生活の中で思想闘争を通じて改造していくこともありませんでした。志願してきた同志たちは、一様に日本の左翼の口先だけの武闘への反発と、リッダ闘争以後闘いつづけてきた日本赤軍の武闘実践に結集軸を求めて志願してきました。日本赤軍に対して、より軍事を求めるといふことであつたため、私たちの隊内生活は

軍事技術の向上と肉体訓練へ一面化されていきました。そして、リッダ戦士から学ぶ観点も、すべて軍事の観点にせばめられていきました。リッダ戦士たちの作風は、軍人のモラルへ一面化され、リッダ闘争の地平というものがますます理念的にとらえられるようになりました。

この隊内生活においても、一定程度は、個人主義の克服や同志愛の発揚というもの萌芽的に語られていましたが、それが階級的な立場、ものの見方、考え方へと発展しきれず、軍事技術や戦術などと切り離れたものとしてあり、具体的に個人主義の克服、同志愛の発揚を思想闘争を通して作りあげていくという態度も生まれてきませんでした。それよりも、個々が軍人のモラルをどれだけもちうるかということを中心に考えることしかできていませんでした。そして軍事を實際に担うことが、軍人のモラル＝共産主義者になれると短絡させて考えていました。だから、不断に政治思想的観点は忘れられ、軍事的観点ばかりの軍事至上主義となつていきました。魂である政治思想的観点が欠如してくると、不断に私たちの軍事とは何のためかということをおぼえていくのでした。

私たちがアラブへ来たときは、日本の左翼のもつ、能力や知識の量で自分たちを前衛と思いついてみたりする組織のブルジョア性に対する疑問を持っていました。しかしそれを切開しぬけず、軍事の自然成長性に無策のまま、こうした本音のところにある感性的疑問を抑えていく結果となっていました。不断に軍事の知識と能力の競争へと向かい、更に軍事至上主義へと向かう結果をもたらしました。日本の「新左翼」のブルジョア性を批判しても、同根のブルジョア思想を持っていました。不断に革命と人民の利益を理念的にしか問いきれないまま、ブルジョア思想を蔓延させていきました。

17 「パリ事件」は、私たちの限界性が白日の下にさらけ出されたものでした。自力更生を、ブルジョア思想の物化した観点からしかとらえられなかった私たちは、自力更生を何のためかということを問うより、当面の打開を自己目的化していききました。自力更生による当面の打開は、我々の側にある矛盾を、欧州の同志と共に克服し、日本革命主体の確立をめざすものとしてありました。しかし、欧州の

同志・友人のもっている状況や基盤を育成する観点が十分でないため、「これからのりこえれば、共に勝利の陣型をつくれる」という主観的願望にあわせた共同作業に結果しました。そして、主観的思い込みは、結局、逆に欧州の同志・友人たちを後方化してゆきました。自力更生に向けた闘いを欧州の同志・友人たちに担わせ、作戦共闘貫徹によってのみ組織化を考えていました。このことは、自らの立場の正当性を闘いに集約することによって、他の組織や友人への疎外を結果させました。自分たちの闘いの正しさと困難さを、「正しい」故に、共に背負ってもらうことに何のためらいもなく、武闘への集約に一面化した実務主義的結合であったのです。革命観を一つにしていくことを問わないまま、欧州の同志・友人の能力にゆだねる結果をもたらしてゆきます。それが、古屋同志の逮捕をきっかけとして、D.S.T.による大弾圧の中で敗北してゆきました。

「パリ事件」の当時、私たちは、より自力更生をめざし、革命の軍隊として、革命組織として自己確立しようとしていました。その矢先にこの敗北はありました。それまで国内に向かってはアラブ赤軍、世界に向かっては日本赤軍として提起し

ていた主体性を、日本革命の後方としてのみならず、国内的にも責任をはっきり果たしていくことを基軸に、日本赤軍として再確立しようとしていました。戦闘的質をのりこえ、真に革命の軍隊として改組しようとする闘いが真剣に問われはじめていました。思想とか組織性を問いいながら、根底的に革命化をはたしているつもりでしたが、それも根本的に、自己を問う闘いになりえていなかったのです。その矢先の敗北の中で、私たちはまだ強気でした。ハーグ闘争の貫徹によって、敵の攻勢に私たちの攻勢をもって反撃を組織しました。

18 ハーグ闘争後、私たちは、この敗北の事態から、より組織的な質が問われていることに気づきました。しかし、古屋同志の完黙、そしてパリの敵の反革命に対するハーグ闘争の勝利の中で、問題を深く問うことができずにはいません。また、思想性・組織性の問題であると気づきながら、それをどう組織するかがはつきりとわからずにはいません。そして安易にパリの敗北の中で、完黙を貫徹した古屋同志の質を日本赤軍兵士の質とし、逆に欧州の同志・友人たちの弱さを階級形成の

未熟さの敗北としてとらえていました。そして、私たち自身が闘ってきた持久性を強さとして固定化したまま、組織確立へと向かうようになりました。

その中からは、リッタ闘争の質の堅持というかたちで、主体形成をめざす隊内組織化が問われました。しかし、リッタ闘争の勝利の側面とその積極面を理念的にとらえ、理念のべき論へと、自己を組織していくことを考えつづけるのみでした。自己の前衛性というものが、自己の主観世界の改造にある、党の革命にあることに気づきましたが、まだまだ方法的に、路線的に確立しえなかつたのです。つまり、勝利の確信が理念的なところにとどまっていたのです。

だから、私たちの隊内団結の質は以前そのままでありました。形態的には、一定の体制や意志統一の軸が出来ても、同志間では、なれあいや仲間意識の団結の質を止揚し抜けずにはいません。理念的なりリッタ闘争の質の獲得の提起は、それが理念的であるだけに、日常実践に生きていませんでした。組織体制をととのえ、任務分担しても、不断にブルジョア的な分業となり、団結して進むどころか、軍人の優越意識、非軍人の劣等意識という左右の軍事至上主義を解決しえず、思想を

基盤とする統一性としての組織性も、一丸となった指導性も生み出しえませんでした。

形態的に改組しても、ハーグ闘争の勝利的貫徹の中で、更に唯軍的思想を隊内にはびこらせていきました。武装闘争の自己目的化は、ここにおいても敵のふりまく幻想の中にまきこまれて、政治思想的な未熟さを真に革命し抜けずにいました。本音の側の政治思想の変革——「何のためか」を問うことも提起しあえない組織体質を作っていました。個々の思いや疑問は個々の中にしまわれ、個々の本音はバラバラで、克服を意識的にめざしつつも、あれこれうまくいかず、実際は如何に軍事至上主義となるかが競われることに陥っていたのです。また、各同志が死への決意とかで自らを律しようとする分だけ、個々の質を団結へと転化していくことができませんでした。相互に不信をもちながらも、それを人の和で解消していくという状態でした。

19 ハーグ闘争以降を、私たちは第二次建軍運動と呼び、党の革命を担おうとしていました。自力更生をより即自目的化するのではなく、国内母体建設を重点化し、「党の戦略的統一戦線」世界革命統一戦線、「アジア戦略的統一戦線」の同時発展をめざそうとしていました。そして、より路線を緻密化しようとしていたのです。その路線に規定された組織確立をしようとしていました。しかし魂の革命になりえぬところで、まだ「党の革命」という問題に対して形態的・技術的側面が先行していました。路線・組織を規定する思想の革命化に欠け、またその統一性に欠けるため、路線が路線として生きた内実を持ち切れませんでした。

また、できたばかりの指導部も、思想の統一性と指導性に欠けていました。指導部がしっかりと団結してやるのではなく、相互不信・相互反発を本音には持っているながら和しているという状態にあり、不断にブルジョア的分業から思想が逆制約される結果に陥っていました。

又、私たちの持っていた「世界同時革命」論は、私たちが獲得してきた質の古い外被として存在していました。私たちが「党の戦略的統一戦線」と呼び、「世界革命統一戦線」として国際共産主義運動の再編へと向かう内実や国際主義の基本

を自力更生としてとらえた時から、すでにその外被との矛盾を起こしていたのである。「世界同時革命」論とは、私たちの未だ思想的・理論的未熟さの中で、日本の左翼運動の中で持っていたものをとらえ返さず、放置していた一つの側面でありました。積極的には世界の革命潮流の攻勢という時代認識の中から生れてきたものではありましたが。しかし、それが、即自的に「世界同時革命」として「一国革命」に對置させる時、その積極面はその否定面である主観主義によって歪曲されていきました。何かしら世界の各国・各民族がその歴史的に負ってきた特殊性・個別性がまちがいであり、即普遍性にとってかわらせる闘いを国際党派闘争によって実現するという認識であり、普遍性の側からのみ革命を提起しようとしていたからです。もちろんその普遍性が、主観的な位相にあったという観点の欠如も問われなければなりません。特殊性・個別性そのものの中に普遍性があり、普遍性を基軸とする階級的団結、人間の本源的欲求としての団結によって、その特殊性・個別性を発展し抜く、長期にわたる人類の建設過程の中で実現する世界的な労働者階級独裁、社会主義体系の問題です。そうした社会主義論のないところで、

「同時革命」が語られていました。

それは一国の社会主義建設が、プロレタリア、農民とかの人民を一挙的に労働者階級化することができないのと同じ問題を持っています。人民の革命事業は個別性・特殊性をおびながら、一挙的であったり、持久的であったりします。その根本的な人間観の一致を求めあい創造しあう過程の権力の奪取形態は、やはり一国的であり、建設過程は、一国的な社会主義の自力更生を基軸とする国際主義によって、世界社会主義の勝利完成へと向かうものです。

かつての「同時革命論」は、社会をどのように建設するかということに何ら内容を持たないものであったのです。「同時革命」ということを強調する必要はありません。いかに同質の革命を形成し、一步一步共産主義へ向かう中で、その個別性・特殊性をより普遍性の側へと組織していくかが問われています。それを、より現時点から準備していくものを、私たちは「党の戦略的統一戦線」と呼んでいました。その中で各国人民の代表である党は、党の革命の場としての統一戦線形成の運動を通して、同質化をかちとっていくというものです。現在、「党の戦略

的統一戦線」を国際革命協議会と呼んでいます。それは中味にふさわしく、外被を規定していく中で改称されたものです。

また、「同時革命」が「一国革命」に對置される時、それはトロツキスト流の即自的悲觀主義をともなっていました。一国で革命すると変質し、「スターリニズム」になるという論議に規定されていました。しかしそれは、形態や方法上の對置でしかなく、真に「一国革命」の個別性・特殊性を不斷に世界革命へ向けて止揚させていくためには、その不斷の思想闘争、継続革命によって保証されていかなければなりません。人と人がかかわりあう、質的な発展を重視していかないことにも帰因していました。

「一国革命」に「同時革命」が對置される時、自分たちの人民への責任を放棄した世界主義の観点を根深く持っています。共產主義の根幹は人間を第一とする思想であり、人民を愛し信頼すること抜きには達成されません。主観的には、世界性の側からその世界党の質と物質基盤をもって国内革命を実現するということが、客観的には、自国の革命を自らの力で実現する主体的任務を回避する結果に

陥ってゆきます。一国における責任を回避し、その主体的・自主的任務を回避することは、人民への不信を根拠とし、敵への幻想を肯定した認識に他ならないのです。「同時革命」論が、人民を無視した党の裁量、党の権力闘争で革命が成就するようなまちがった前衛意識を持っていたことを示しています。

又、修正主義との闘いは、「一国主義」という結果的な観点によってではなく、何よりも人間を第一とする労働者階級の思想へと不斷に自国を世界中の人民の利益に向けて改造する継続革命の質を問うことが問われています。現時点から労働者階級独裁と継続革命を準備するものとして、「党の戦略的統一戦線」（国際革命協議会）が問われ、それと照応する日本革命協議会運動が問われていると、私たちは提起しています。

かつて、思想的根源をみきれない観点は、自力更生という国際主義の原理を理解できず、自力更生を世界革命の単なる対立物としてとらえる形式論理的な考え方がありました。各国の人民とその代表である党の自力更生を基本とする主体的な闘いの結合こそが、世界革命を準備していくのです。ベトナム民族解放革命闘争

が示したように、人民を敬愛し、人民を防衛し、人民と共に闘うしつかりとした党性、人民性、階級性をもってこそ、小国が大国をうちまかし、民族解放と社会主義建設の道に勝利することができます。

それを問わず、即的に「世界同時革命」を主張することは、人民を愛し信頼し結びつこうとしないことからきているのです。抑圧されている人々が一つの心で結びあうこそが、私たちの帝国主義に対する決定的な武器です。なぜなら帝国主義は人間憎悪思想そのものであり、個人的な利益の中で人間同士を競争させている社会だからです。帝国主義軍隊を構成しているもの多くは人民であるように、私たちがしつかりと労働者階級の思想をもって闘うことが、帝国主義を解体し、どのように近代装備した帝国主義軍隊にも、どのように帝国主義が結託しようとも、人民がしつかりと武装し、人民がいる限り私たちは必ず勝利します。過去私たちは、日本には武器がないから、帝国主義が強いからと外因に転化し、その悲観主義的な観点、ブルジョア思想の観点を根深く持つてしか革命をとらえられませんでした。赤軍派の世界認識（「パンフNo.4」に示される）を継承するも

のであった「世界同時革命」論は、私たちが具体実践として国際主義をもって闘おうとすればするほど矛盾していききました。私たちが日本人民の代表としての内実、自力更正が問われれば問われるほど矛盾していききました。その矛盾を徹底して主体化しつづける闘いの基礎が、ようやくハーグ闘争後少しづつ萌芽していききました。しかし、まだ政治路線に対するとらえ方が未熟であり、私たちが感性的認識を主台とする自己改造を問われた内実そのものを論理体系へと高めていく過程で、論理的認識を十分対象化しぬけない分だけ、古い外被のまま理念的に豊富化・緻密化をはかることによって補おうとしていたのです。

そして又、ハーグ闘争における作戦上の問題点を契機に、日本革命の任務を問いつ返す中から、パレスチナ革命を担う同志・友人との関係性をとらえ返していききました。リツダ闘争以降、パレスチナ解放人民戦線との戦略的共闘を基軸に闘いながら、階級的団結が十分実現されず、実践共闘が不断に問われる中で、ブラグマティズムを作っていたことを問い返していききました。革命組織間の本位主義を克服することが問われていることに気づきました。私たちはパレスチナ人民を

戦略的友とし、日本人民の代表としての革命連帯を發展させるために、パレスチナ革命の同志・友人へ自己批判と批判を提起し、国際主義の実践を階級性の側から問いつづける作業を開始しました。

そしてパレスチナ革命が人民的規模の恒常的武装対峙を不断の客観情勢として持ちながら、それを真に組織しえない指導主体、革命組織の質の改造を問わなければならぬことを提起しつづけてきました。革命組織間、組織内の矛盾を、敵とそれらの関係のみで処理してはならず、人民と敵との攻防の中で人民の利益を真に実現する指導性を問われていること、その中で不断に革命伝統を継承発展しぬくべきであるという立場から、私たちは共闘の総括と共闘の展望を問いつづけました。しらずしらずのうちに、パレスチナ革命組織内の不団結の質を批判することをもって自己の存在基盤としていた日本赤軍の立場の不十分性を問い返し、パレスチナ革命と人民の闘いの利益、日本人民の利益に徹底して立脚し、服務する立場から、日本赤軍と他のパレスチナ革命指導勢力間の批判を、より党の革命として実践することをめざしはじめました。

20 自力更生を日本赤軍として自己確立していく闘いであった第二次建軍運動が開始されたばかりの時、私たちの根底を更に問う敗北がありました。

それは、ストックホルムでの二同志の被逮捕、強制送還、そして日帝権力への屈服、自供としてあらわれた問題です。これが私たちの団結の質、勝利の確信の質を根本的に問う敗北でした。武装闘争の勝利貫徹の中で、敵に作られた幻想の中に自らをおき、自分たちの本当の姿を客観的に見ることができなかつた私たちは、そこで自分たちのありのままの姿を見せつけられる結果となりました。

私たちは、二同志の権力への屈服、自供を、最初はデッチ上げと考えました。日本赤軍兵士が権力に屈服するわけではないという幻想を私たちはまだ持っていました。フランスで逮捕された古屋同志が完黙したのを安易に日本赤軍の強さと考え、DSHに屈服自供した同志・友人たちを欧州グループの質として、根拠のない自己への幻想を作っていたからでした。「死を決意し、命をかけて共に闘ってきたのだから、屈服するわけではない」と考えていました。けれどもブルジョア新聞にのせられてくる自供内容が、私たちしか知らない事実を伝えてくるにつれ、それが

真実であることがわかり、しつぱ返しを受けました。

隊内では、共に闘ってきた同志たちに様々な反応があらわれました。ある同志は「気持はわかる」といい、ある同志は「共に信頼してやってきたのにひどい」という様々な反応としてあらわれました。そして、全同志が二同志の立場に自分を置いてみるとどうであろうかと問いつめていった時に、過去の敵によって与えられていた幻想がつき崩れ、私たち総体の思想性、組織性の弱さとして自己批判にとらえていかざるをえませんでした。決して、二人の弱さの問題ではありません。組織内における個々の弱さは、総体の弱さの反映としてあり、個人的な責任ではなく、階級的に問われる責任を負っています。

私たちの思想性・組織性の不十分さをどう克服するのか、革命的同志愛で結ばれた階級的な団結をどう作りあげるのかとして、私たちはその敗北の教訓から学ぼうとしました。私たちは、自分たちの思想性・組織性を客観的にみつめていく中で、自分たちが武闘を自己目的化することによって、一体何のためかということとを理念的にしか問わず、理論では世界革命、人民のためにと考えていても、自

らの姿が日本の左翼運動の当時持っていた様々なブルジョア思想を克服しえないものであるということがわかってきました。私たちの日常生活のひとつひとつの実践が、利己主義や個人主義からなされ、真に階級的団結をつくりえていないことがわかりました。同志の間には不信が蔓延し、それを武闘実践への待機としてつないでいただけということが客観的に見えるようになりました。愛情や、個人的信頼や、なれあいの中で結ばれる、階級性のない人の和でこれまでやってきたことを知ることができました。私たちのひとりひとりが、労働者階級の立場、もの見方、考え方に立つような努力を、いつもいつもしないことがわかりました。

そして私たちは、それを如何に克服し、勝利の確信に裏づけられた階級的同志愛にもとずく団結を作り出していくべきかを問いました。それを「隊内共産主義化」の問題の欠如、日常的な思想改造の組織化の不十分性として気がついてゆきました。これまで何度も思想性・組織性の確立を訴えても、それが理念にとどまり、各同志の実践の基準たりえていませんでした。だから主観的には、思想性と

か、組織性を問い、「隊内共産主義化」はべき論でしかないことになかなか気づきませんでした。

21 同時にそれまで提起した路線を、全同志のものとしていく作業を開始しました。そして、「隊内共産主義化」の組織化の方法として、自己批判―批判運動としてあるということがわかりました。私たちの、その当時までの態度は、自己の根柢のない幻想におちいり、自己を正当化し、絶対化し、すべての問題を外因に返していくことから、自分たちの内因を問い切れずいました。そのことよって、国内の人民との団結を阻害していました。また国内母体との矛盾をも持続させました。自己変革こそが、不断の自己の立場の革命化、労働者階級化こそが、まず問われています。そのことを通してしか対象変革はなしえないことに気づきました。また、それが、私たちだけの問題のみならず、出生基盤である日本階級闘争の問題として気づいていきました。

それは革命に対する態度の問題だといえます。不断に階級の利益のために自己を改造していく立場こそ問われているといえます。私たちのそれまでの態度は、人民よりも自分たちを大切にし、武闘を自己目的化し、またそれをもって自己の正当性として自らを絶対視して対象変革をしようとしてきました。しかし、それは、プチ・ブルが自己にあわせて世界をつくりあげようとするものでしがなく、客観法則に合致するはずもないので必ず敗北します。

自己批判（自己改造）―批判（対象変革）活動の実践こそが不断に私たちの思想を改造し、より人民のために闘う立場、ものの見方、考え方をつくりあげていき、党と人民の階級への組織化を実現していく運動であることに気づきました。武装闘争の自己目的化とは、まさに日本の左翼運動の中に持っている党の形態や方法を自己目的化する態度と全く同じであり、それは資本主義の物化された思想の反映であるといえます。労働者階級の思想とは人間を第一とする思想であり、私たちの革命活動とは人に対する働きかけであることに心から気づきました。

資本主義社会の中で育った私たちは、批判することに對しまちがった観点を持っていたのです。相手をせめるのが相互批判となり、自己批判が、自己弁護や迫

られてするもののようにとらえていました。連赤の中に、そうしたものの見方、考え方がよくあらわれています。自らすすんで自己主体を革命化しようとするのとぬきに、外的な力だけで人の頭の中が変わるはずがありません。本当に納得し、自主性が結合して初めて力となり、革命の原動力となってゆきます。共に自らを革命化しようとするを通して、団結をめざす闘いを、私たちは思想闘争と呼びはじめました。これは真剣に団結をめざし、求めあった時、はじめて実現しはじめたものです。

不団結であることに気づかず、不団結でもかまわないという考えに立っている時、思想闘争はさして重大でないように見えるかもしれませぬ。しかし革命は思想戦であり、人民内部の矛盾は、思想闘争によって自己を革命する中で、他に働きかけることによって解決することができます。すべての実践は、思想闘争であるように、実践と切りはなれた机上や頭の中での思想闘争はなりたちませぬ。

思想の階級的表現とは日常であるといえます。軍事闘争はその発展段階の証であるといえます。すでに性格とまでなってしまった個人主義、習慣となつてしま

ったブルジョアの作風、好みやこうした人格に表われるすべてに対して総点検することを始めました。階級的立場に立つて集団主義と統一性を確立していくことは、人民の革命を領導する必然にみちびかれています。まず同志に対して人民の代表として学ぶ立場を相互につくることです。人民は遠くにいるものではなく、そばにいる同志が人民の代表であるという自覚を相互にもつことです。つまり私たち全体が人民の模範となる日常生活を実践し、人間性をつくることです。無自覚に放置されていた性格や習慣を、まず自分でなおそうとする自己の革命化を基本に、同志に批判してもらえらるような態度をつくるということでもあります。これは思想を打ち鍛えるためのものです。自己を革命化することは、自己批判にのつとつた思想闘争です。高い共産主義的な品性が創る、人民の革命勝利の路線を保証するためです。

頭の中にある古い思想を根本的に革命し、労働者階級の立場に立ちつづけることを、言葉ではなく、日々の生活の中に実践することを通して、不滅の同志愛を鍛えることができます。そしてこの同志愛にうらうちされながら、私たちは、あ

らゆる既成の公式に束縛されない方法と形態を確立しようとしています。すべての勝利した革命をみる時、同志愛のない隊伍をもって勝利したことはありません。同志愛のない隊伍は、人民を革命の付属物のように考えるからです。勝利した革命を見る時、勝利の確信と敵への階級的憎悪——これこそが労働者階級の思想です——が、味方の限らない団結の源になっています。すべての勝利した革命はまた、個人主義を解体する過程でもありました。革命組織及びそれを担っている個々人が、自らを革命化すること抜きには、革命の勝利は導かれません。隊伍をうちかためることが、革命の保証であり、また社会主義の規範を、日々そこでつくっていくということです。革命はどのような方式であれ、労働者階級独裁・継続革命を通して、生産関係をかえつつ人間をかえることです。つまりすべての人間が革命家になることです。そのためには、私たち自身があらゆる領域で、人民の模範となる人格をつくりつけ、肉体的生命のある限り自らを革命化する立場に立つことが基本だと考えたからです。

22 私たちは、人民に対して、共闘組織に対して、私たちの団結の結果、勝利の確信の欠如の結果として敗北した二同志に対して、自己批判実践を行なうこと、そして同時に、帝国主義者に私たちの総括として反撃を加えることを決定しました。それがクアランプール米・スウェーデン大使館制圧同志奪還闘争でした。

この闘争は、まさに私たちの根底を問われた敗北から学んだ地平から闘い抜きました。そして私たちの自己批判は人民に対してであり、それは私たちの敗北だけではなく、私たちもその一端を担っている日本共産主義運動の自己批判として、日本共産主義運動の敗北を共有し、共に克服する闘いとしてありました。その敗北を共有する階級的責任こそが、団結の、革命の発展の根本であるという確信から闘いました。M作戦の敗北、連赤の敗北、東アジア反日武装戦線の敗北を革命の一つの責任として共有すべく、それを担った同志を奪還しました。かつて自らが担った闘いの総括、自己批判実践として、五人の同志は私たちの呼びかけに応じてくれたのです。そして、真に日本革命を勝利完成させる中核部隊の育成に向

けて、真剣に思想闘争を共有しあつてきました。

資本主義社会の思想の反映は、自らを階級の一員として考えられず、個人主義・利己主義に立つて、常に自分が他よりまさり、それを支配するという競争の中にしか自らの存在を確認しえません。自分と他者を同一として考えていくことができません。それが革命運動を担おうとする人々に反映し、組織利己主義になります。組織は自らを通すためには、「党派闘争」というかたちで、革命の先達の文献を正当化の道具に引用しつづけてきました。そこには、人民の利益とは無縁なただ自己を正当化するだけの、自己を絶対化するためのものとなってゆきます。情熱や、ひたむきの量が大きければ大きいほど、それはエスカレートしてゆきまです。組織と組織が不十分点を援助しあい、共に克服し、共に一つの革命のためにひとつになつていくということができません。自己の組織の主張をどれだけ通すかということになつてしまつています。それは自己の下に他をおくという見方しかありません。それぞれの組織がそう考えていればいるほど、団結は遠いものになります。自分たちの不十分点を共に克服するため、他の人々の不十分点を自分

の問題としてとらえ、援助し、ひとつの階級の革命として共に団結して闘つていくこと抜きに、新しい人間社会の展望はありません。

自分たちの立場に固執し、立場を革命せず固定化し、主観的に思う正しさに固執してやろうとすれば必ず敗北します。団結をもとめあい、主観的な立場を不断に解体しようとする中で、革命の勝利の主体的力が育成されます。団結の基軸とは、労働者階級というひとつの立場に不断に立脚しようとし、その相互にもつ否定面を共有することから、共にそれを克服しあう闘いの中で実現することができません。自分の正しさだけを主張しようとするれば、自己批判を恐れることや、自分のおかした誤りをかくし、めんどろな問題をうやむやにして万事うまくいっているとごまかし、みせびらかしたりすることになり、自分の犯した誤りを教訓として更に共に改造し、団結していくことを阻害していきます。

物事の否定面の中にこそ、私たちの発展の契機、団結の契機があります。勝利した革命の指導者たちは、誤りを犯さなかつたから偉大なのではなく、私たちと同じ誤りや欠陥をもつていて、その誤りや欠陥に対して闘いつづけているから、

革命に勝利し、また偉大な指導者となりえたのです。彼らが、様々な思想的誤りに対して指導し、また著作をあらわしたのも、同じ誤りをもっていただけからです。完全無欠というのは何もすばらしいことではありません。それは発展がないということではないのです。自分たちの否定面の中にこそ、それをくつがえす否定があることは客観的な真理です。自己批判こそが団結を求め、団結をつくりうる根本であると確信しています。階級の利益、真理の前に謙虚に自己批判することこそ、階級的な団結の基礎です。自己批判の徹底、ここに、階級の指導性があります。これは、二同志の被逮捕、自供の問題、クアラ闘争の勝利の中でえた、また確信することのできたことです。

23 このクアラ闘争の客観的成果とはうらはらに、その過程において、またその後においても、私たちの不十分性が一挙に克服したわけではありません。思想闘争は、肉体的生のある限り闘いつづける革命実践ですから、そのことに気づきつつも、しらすしらずに敵の思想を肯定した主体である私たちは、不断の闘いを問われています。まだまだ全軍的に自己批判の立場を確立しえていなかった私たちは、不断に日常実践の中では、以前と同じような状態をつくっていました。理念としては、自己批判を承認するが、それを日常実践としてやり切れていなかった結果です。

私たちはクアラ闘争を開始する時、これまでの私たちの任務分担が分業としてかなりえていなかったという認識から、「作戦部隊は残留部隊の立場に立ち、残留部隊は、作戦部隊の立場に立つて闘う」ことを、団結の基礎として闘おうとしました。しかし、残留部隊においては、自らが闘争を担っているという意識がもてず、手伝っているという没主体的な態度におちいたりしました。そこには以前と同じ、一回の作戦に向けた日常の革命任務ととらえる観点が残っているからです。日常のたゆみない革命活動の蓄積の証しが、ひとつひとつの戦闘にあらわれるわけです。これは、思想闘争、自己批判という党の革命の問題を理念的にしかとらえきれず、日常の革命任務の中でのひとりひとりの同志の実践的な問題であることが、全軍化しえていない結果としてありました。党の革命の基本が、日

常の中での自己の立場の不断の革命化にあることがしつかり理解できませんでした。

人民との団結とは、となりにいる同志と団結することから始まり、同志とは人民のひとりであり、人民の代表なのですから、同志と団結できなければ、本当に人民と団結していくことはできません。同志愛のない隊伍は、人民愛をもつことはありません。私たちは不断に自己を革命し、団結をかちとる党の革命をめざしつづけました。あれこれの言葉ではなく、どう団結に向けて実践しているかを日常の行為の中から点検し、不断に自己批判を貫徹していくことが問われました。団結を求めつづける実践は、客観的に団結を実現していきます。私たちの日常任務は、不断に思想闘争を要求していました。その中でこそ私たちは人民の軍隊として、人民に対して責任をもちうる主体として、自己組織化することができるのです。

私たちの革命活動の基本は、「人に対する働きかけ」であり、実務主義とは無縁でなければなりません。実務主義とは、物化した敵の思想でしかありません。人

間を第一として人間に働きかける中で、自己を革命し、その革命を人に返していく関係、すなわち思想闘争によって、生き生きとした闘いを不断に生み出すことこそ革命活動の基本です。不団結でもかまわないと実務実践すれば、技術的にうまくいっても、それでは革命を成功させることはできません。

私たちは組織生活をとおして、不断に自己を革命する第一歩を、こうした教訓をつみ重ねながら開始しました。そのことによって、はじめて思想闘争、自己批判―批判が理念ではなく生きた実践として組織され、私たち日本赤軍の不断の革命化をかちとれることが確信できました。

クアラ闘争と、その後の階級的団結に向けた実践は、より思想闘争を発展させ、勝利の確信をうちかためました。

24 又、クアラ闘争の作戦上の問題として、坂口同志、松浦同志の拒否という問題がありました。とりわけ坂口同志の立場は、私たちへの相互批判としてありました。

批判点の内容は、①日本赤軍の闘いは大衆から遊離しており、支持できない。

②各国の革命は各国人民が主体的に担うものであり、外部のもの日本赤軍はそれにとってかわることはできない。自力更生の各国の闘いが基本である。③真の国際主義は世界を駆けめぐることではなく、パレスチナ人民に誠心誠意奉仕すべきである。それは銃を握ることのみではない、というものでした。

この坂口同志の批判提起は、私たちが自己批判検証の中で握りしめている勝利の確信とその現在の姿を伝えきれない結果としてありました。私たちが階級的団結、共に敗北や欠陥や責任を共有し、克服していく立場から働きかけをしたつもりでありましたが、武装闘争実践というひとつの形態でしかやり切れなかった結果、私たちの団結を願う心を訴えかけきれませんでした。私たちは、坂口同志とも松浦同志とも、これまでの日本階級闘争でおかしてきた誤りを共に克服する中から、団結を求め、共に人民への責任を果たしていこうと提起していったのです。これはまさに、国内に自己の闘いの総括と、その思想闘争を持続的に提起しきれない私たちの限界のあらわれでした。もちろんこの自己批判の側から、

階級敵の手中に甘んじる坂口同志の革命の責任のとらえ方を批判し、共にしっかりと手を結びあうことを、私たちはひきつづき提起します。

私たちはクアラ闘争を実現しぬく中で、一つの前進をみました。しかしそれは一步にすぎません。日本革命を勝利完成させるために、革命の全般から武装闘争の持久性を実現し、より全人民とともに思想闘争を押しすすめていくことが問われていると実感しています。

25 作戦部隊の同志たちは、クアラランプールの戦場で奪還闘争に伝えてくれた五同志と、団結に向けた熱い握手を交わしました。五同志は、再会に同志といたきあい、敗北してもその敗北を共有しようとしてくれた同志たちと感激の涙を流しました。私たちは、闘えば必ず出会えるという確信をさらに深めました。けれども、団結をめざし、団結を武器として革命を担うことができるという実感は、十人の同志たちの熱い握手の中で交わされた確信だったのです。

闘争後、私たちの作戦部隊と五同志は団結へ向けた作業を開始していきました。

しかし、毎日くさるほど論争しているのに団結できないのは何故だろうかという疑問が、多くの同志たちに、理念や理論上の問題ではなく、私たちの生きた日常実践、日常活動にある根拠を問うことが必要であることを気づかせました。その根拠と結びつかない理論など、生きた理論にならず、「頭の中を多忙にするだけです。階級の唯一の武器である団結をもたらさない原因である利己主義・個人主義を、人民の利益の側へ日々不断に自己改造することが、団結をつくり出すということがわかりました。私たちの隊伍を統一していくことが、自分たちの理念や頭の中の理論知識ではなく、それぞれの同志が日常活動態度を問うたとき、初めて本当に思想闘争、自己批判―批判を理解し始めました。

そして戦場に復帰して、本部・残留部隊との出会いの中で、よりその方向性に対する確信をもった実践が始まりました。思想闘争、自己批判―批判が、再び全軍の力へと組織しあつていけるようになりました。当初は、「思想闘争とはこんな日々の細々としたことを総括、自己批判するだけではだめなのではないか」「思想闘争とはこんなものじゃないのでは」という疑問が出されたりして、とまどいを

もった同志もいました。しかし、その疑問やとまどいも、思想闘争実践を共有する中で、克服されてゆきました。まだまだ思想闘争というものを、理論闘争とかを想像する古い殻の中から見えていたためといえます。

思想闘争とは自己の立場の革命化であり、一人一人の革命に対する態度は、私たちの日々の実践にあらわれます。その実践を日々問い、それがどのような立場、ものの見方、考え方から生まれ出てくるのかを自己批判として日々検証し、常に私たちが労働者階級の立場、ものの見方、考え方、作風へと自己を解体していくことが必要であったのです。そのことによつて理論と実践を統一していきます。感性的認識に立脚した論理を作り出すためには、感性を革命化しつづける習慣を実現しなければなりません。感性はブルジョアの欲望で充満し、頭の中に大衆を指導する理路が整然とあるなどのまやかしでは、人民の力を主力とする闘いに人民が続いてくるはずありません。理論と実践の統一は、日々の思想検証を通してうちきたえられます。共産主義に向かう生きた実践としての隊内生活、集団主義の力を発揮し、日本赤軍の党性、階級性、人民性を日々革命化し、人が必ず変わ

りあって団結しぬけることを実感してきました。

今私たちは、思想闘争を通して、これまで私たちの敗北の教訓を共有し、そこから私たちは更に自らの不十分性と闘い、日本革命の指導中核を作り出すために更に闘いつづけています。不滅の同志愛、敵愾心をうちかため、自らを日本革命に責任をもちうる主体として形成しようとしています。私たちはこの間の闘いの中でかちえた教訓を、人民・同志・友人とともに共有し、それを団結と主体の飛躍の契機としていけると確信しています。

今私たちは、まだまだ不十分性をひきずりながらも、又いろんな困難にぶちあたろうとも、着実に前進しています。本当に思想闘争から出会う中で、勝利の確信をたかめてきました。共産主義者としての、共産主義の生きた実践こそ、人民に明るく未来への確信を与えるものです。

私たちは敗北の中から、共産主義社会を建設していくには、主体の思想的確立——それは労働者階級の立場、ものの見方、考え方を自らのものとしていくこと——が、一番重要なことであると考えました。その欠如が、様々な敗北の根拠で

あり、私たちの主観主義や傲慢さの根拠でした。私たちが資本主義を打ち倒し、新しい社会を建設していくには、私たちひとりひとりが人民の代表として、人民とともに資本主義の反映である敵の思想を解体していくことが最も重要な課題であるといえます。

ひとりの利益が全体の利益と共通し、生きることそのものが共産主義を求めざるをえない労働者階級の立場こそ、人民が仕合わせにくらせる社会の根本となります。労働者階級の立場、ものの見方、考え方、作風は、人間を第一とする思想であり、資本主義社会の物を第一とする思想とは相容れません。私たちの革命活動とは、まさに人に対する働きかけであります。人民・同志を愛することなくして、共産主義の勝利を獲得できません。

今、日本革命を勝利完成させるには、思想闘争、自己批判——批判を軸にした階級的団結が問われています。全ての人民が団結してこそ革命は勝利します。私たちは日本の人民・同志・友人とともに、人間を第一とする日本革命の指導思想を確立し、それに導かれる革命路線を確立しようとしています。

私たちは今、それを日本人民共和国建国としてめざしています。

26 私たちは遊撃戦を主軸に革命活動をつづけてきました。しかし、私たちの闘いは、遊撃戦といっても本来の意味の遊撃戦にはなり切れていず、本格的遊撃戦の端緒を担っているにすぎません。遊撃戦の端緒期に、遊撃戦陣型を闘いぬぐために、不断に組織の総力戦展開を余儀なくされます。それは、組織戦としては、遊撃戦というよりも正規軍戦に似ています。その持久性の中で、真に遊撃戦陣型を獲得していくことができます。持久性の中で党性をきたえ、階級性を価値とし、人民性に立脚して、初めて真に人民の戦争を担うことができます。私たちは、味方を保存し、敵の弱点をつくるところで、敵と私たちとの攻防の観点にのみ立ち、根本的な人民性ということに欠けてきました。これは軍事力学主義ともいえません。まだまだ、私たちはひとにぎりの革命をめざす集団であり、そこからの遊撃戦展開はおのずと限界があります。連帯を求めて孤立を恐れずという言葉がありますが、人民の利益を実現する正義の闘いの持久性の中で、連帯を求めつづ

ければ、孤立することにはなりません。私たちの思想的限界としてあったのは、この連帯を求めるといふ人民性に欠けていたからに他なりません。人民性がなければ、自分たちと敵との攻防しか見え、人民の利益を実現することにならず、孤立化することになります。私たちが、そのような限界性の中からも、闘いをつづけてこられたのは、人民性を目的意識的にもつというよりも、逆に敵との攻防というところから、自然発生的な人民性をもっていたからです。敵にダメージを与えるには、人民の意志、敵の政治動向の中から判断する必要があり、結果として人民の利益に沿って闘うということが、私たちの作戦の勝利の保証となりえていました。言いしれぬ困難の中で、連帯を求めず、自分たちに敵対するものは敵だ、という立場を知らないうちに増加させると、戦闘団化、テロリスト化してしまいます。

どの国の革命主体においても、武装闘争の開始はひとにぎりの部隊から始められました。そして、彼らが人民に連帯を求める闘いにひとつひとつ勝利していく中で、人民との深い結びつきをつくり出していきました。戦闘団化して解体する

か、人民との結合の中で建軍していけるのかという問題は、まさに私たちの闘いの人民性にかかっているといえます。

現在の私たちの闘いは、自力更生の力で、日本人民に依拠した根拠地をつくり出しえていません。日本人民の代表としての実体を十分にもちえない私たちの弱さは、私たちの闘いが、遊撃戦を「正面对峙戦」としてしか未だ闘いえていない現実としてあります。その弱さを、弱さとして清算するのではなく、よりその弱さを弱さとして正面からうけとめ、その弱さの克服の闘いを、自力更生の主体の確立としてめざしてきました。私たちが、いまだ、パレスチナ・アラブ人民に支えられてしか闘いえていない現実を、日本人民の根拠地建設、すなわち日本人民との深い結合を軸にして克服していかなければなりません。

闘いの人民性とは、最大限人民の利益を実現する闘いを組織し抜くことであります。リツダ闘争のもつ人民性が、パレスチナ・アラブ人民と私たちとの結びつきをつくりえたように、日本人民の利益を実現する闘いの一步一步が、日本人民と私たちとの結びつきを深め、社会主義の根拠地をつくり出してゆきます。その

人民性こそが、点である遊撃戦を面と化し、帝国主義支配の解体と人民共和国建設の道をひらいてゆきます。

現在の私たちの闘い方の中であらわれる問題として、私たちが闘い抜く非妥協な敵との攻防で、「人質」をとるといふことがあります。又、敵の消滅ということにおいても、軍事的に消滅させるというよりも、敵に要求をつきつけ、それを獲得することによって敵にダメージを与えること、人民への政治宣伝のための闘いであるといえます。それに対して敵は、人民を楯にしているとキャンペーンしています。私たちは、当初、目的意識的な人民性は持ちえていませんでしたが、最大限の人民の支持を獲得するということは考えていました。攻撃対象の設定においても、敵の出先機関である大使館などを標的にしてきました。けれども、この過程に不幸にも人民がまきこまれるという可能性がありました。この可能性の大きさは、現在の私たちの弱さの表現であります。しかし、私たちはこの弱さを固定化するものではないし、その闘いの中から、一步一步弱さを克服し、遊撃戦を闘いぬける陣型をつくりあげていきます。一つの作戦に勝利すること、人民を徹

底して守るということは、不斷に、私たちの力量に規定されています。敵は、自らが人民を人質として正義の闘いを恫喝しているのに、奴らの大量宣伝によって逆転させ、私たちの不十分な闘いを、「罪のない人をまきぞえにする」という論理で大衆教育を行ないます。私たちは、自らの発展過程における不十分な闘いを、より人民の利益に立つて闘いつづける持久性の中で克服することをめざしていません。

私たちに対して、よく世界主義だとかいわれます。私たちが国外支部というかたちで出発し、その国内母体を失う中で、自らを日本革命の銃後・後方として形成しようとはしました。自らがその場において最前線任務を担うことがなければ、日本革命の銃後・後方ともなりえないからです。しかし、現実の闘いにおける自力更生の思想的物質的欠如から、不斷に最前線任務を担いつづけることが、即時的に国内を後方化してゆきました。自力更生の立場から、国内国際の闘いを同時に準備しきれませんでした。思いは国内建軍・建党を準備しなければとしながら、実践においては、国際的闘いの発展の中で、自力更生の欠如との矛盾を拡大し、

多くの失敗や敗北をしてきました。革命の根本を理解することに不十分だった私たちは、共同武装闘争を団結の基軸にするという一方で一面化し、武装闘争の持続発展を自己目的化する中で、国際遊撃戦が同時に国内遊撃戦の準備拡大としてすすめられませんでした。その準備とは、国内との思想的一致に立った団結であり、そこから闘いを組織していくことが必要でした。

私たちは、本当に武装闘争の端緒についたばかりです。そして幼年期の思想的弱さをもっていました。また、人民ともしっかりと結びついていませんでした。今、その弱さを克服する闘いとして、私たちは自らの革命化にとりくんでいます。その改造こそが、まだまだ自らの力量に規定された弱さとしてある闘い方を、その内実において変革していくこととなります。そして、そこで表現される人民性こそが、現在の弱さを根本的に変革し、全面的な遊撃戦を準備し、権力奪取の道をきりひらいてゆきます。

一見、人民と分離された、しかし逆に深く一つの目的に向かって結合した闘いの担い方がより問われています。闘いの内実としての人民性が、人民を武装闘争

を共に支えあう道を切り開いていくこととなります。即自の人民の武装ではなく、したたかな持久性をもって、それを準備していく闘いとして今、私たちの遊撃戦が問われています。

私たちは、党性、階級性、人民性を革命任務の中で不断に意識化し、実践し、持久的な武装闘争を、より発展させることを約束します。それは、ただ、人民と共に、同志と共に、あらゆる分野で英智を出しあい、もりたてあい、団結し、団結しつづける中で保証されます。団結に向けて、更に自己批判を基軸にする階級的結合を深め、一つの責任をわかちあい、全面的な持久的な人民の革命闘争を組織しあおう！

三、日本革命の歴史と私たち

1 私たちは、思想闘争、自己批判―批判が革命の根本問題であることを、赤軍の敗北の歴史の中で学び獲得して来ました。私たちは、この実践検証からえた総括点を、更に、日本革命の歴史より普遍的問題として、とらえ返していきたいと思います。何故なら、日本革命の敗北の歴史の中から生まれてきた私たちは、その良さも、不十分点も、うけついできたからです。

日本革命の敗北の歴史を、自らの問題としてとらえ返すとき、その根本的弱点が、現在の私たちの根本的に克服を問われている問題と同質であることを認識することができません。歴史的な総括を通して、私たちが日本革命の勝利完成へ向け、是非とも克服しつづければならない問題として、やはり指導思想の問題があります。それを獲得する闘いが、思想闘争、自己批判―批判としてあり、日本赤

軍という組織の個別的な問題ではないと考えます。思想闘争は普遍的な革命任務であり、革命の遂行を担おうとするすべての革命家・人民の問題であると考えます。思想闘争は革命実践として不断に問われています。

思想闘争は、それをやる人の立場を固定化しては、自分の主観・ものさしでしか人をみれません。自分を変革する志向と、「立場」を解体しつづける能動性ぬきには、意義をもちません。また、思想闘争は、個人的に、頭の中でやっても、それは一見認識の変化にみえる観念だけを多忙にするものでしかありません。思想闘争は社会主義建設と、継続革命を、現時点から準備する集団主義、労働者階級の組織性を基軸に、実践しぬくものです。だから思想闘争は、生活実践、革命実践、行為によってなされるものでなければ、意味をもちません。

私たちが敗北を通して握りしめた勝利の確信は、思想闘争の確信であるとも言えます。そして、これが人民の革命と社会主義建設を実現する人と人との関係を創出する普遍的な闘いであると実感しています。

しかし、これまで、日本赤軍が闘ってきたことの不十分性から、私たちの提起

が、階級の普遍的課題というよりも「党派性」の一つの表現として人々に写るかもしれません。それが当初、思想闘争の意義を狭めてしまいかもありません。それを、真に、人民の闘いの課題へと実質化していくためには、日本赤軍が実践において、自己批判を指導性の柱として、闘いぬくことにかかっています。客観的真理の前に自己を解体しながら、人民の利益にたちつづける持久性の中で、普遍的な思想闘争を、広汎な人民の闘いとすることが出来ると、確信しています。

今、私たちは、日本革命の歴史をしっかりとらえ返しながら、日本赤軍の現在の同質の不十分点を克服し抜くために、闘いつづけます。そうした中で、人民・同志・友人と結びあい、階級的団結を、あらゆる現場に実現し抜けると確信しています。

2 私たちは日本革命の歴史を、人民を信頼し指導することを為し得なかった階級の前衛の敗北の歴史ととらえます。日本階級闘争の中で、革命情勢を勝利の革命へと導き得なかった主要因は、党とその指導に根拠があったと総括しています。

一九二二年、国際革命軍の一部隊として、日本の革命的伝統とコミンテルンの指導のもとに誕生した日本共産党の歴史もまた、その根本的欠陥を克服しえず今日に至っています。徹底した思想の非妥協性の上のうちたてられた指導性をもたらえず、思想的に妥協する結果、理のない後退と敗北を多くの決定的局面において生んできました。そして、現在もなお、労働者階級の思想の非妥協性を基盤として、日本人民の階級的闘いを担いうる革命の指導思想と、そこから生まれる正しい革命路線をもつ指導勢力は登場していません。

日本階級闘争における欠陥は、党の、革命に対する態度にあります。つまり党の路線・党の方法・形態を自己目的化し、人民よりも党を優先し、分裂を結果させることによって、人民の普遍的利益を党として実践できませんでした。資本主義生産関係の中で育成されたブルジョア思想の反映をうけ、党の組織された力が労働者階級の集団主義である団結を実現しぬけずにあります。実践は、主観的理屈とはうらはらに分裂を助長し、組織利己主義としてあらわれつづけていました。そこに階級的思想性の弱さと思想の統一性としての党の組織性のなさがあらわれ

ています。

現在にいたるまで、日本の前衛部分は自らの思想性を革命化する立場をもちえず、対象、すなわち先進的部分、人民に対する革命化のみを求める立場にたつて、革命を指導しようとしてきました。そしてまた、唯物弁証法のあやまった適用から、良質の部分においてさえ、根底的に党の革命をしぬけずきました。革命実践における否定面の克服が、連赤を根本的に問う作業として、久しくなされながら、やはり、どうどうめぐりをくり返している現実の實踐に、それが示されています。そして、逆に、個々の人民の闘いにおける感性的認識は、諸派の問題意識を主体的にのりこえた地平から、個別的に闘いの現場を構築している現状にあります。諸派が理論と実践の弁証法的統一を果たしえない根拠は、やはり、マルクス・レーニン主義の思想で武装することが十分にしぬけないことにあります。自分たちが否定面をもっており、それを克服するという闘いが、なされつづけています。しかしやはり、自分たちの持っている肯定面に立脚しつつ、否定面を克服しようとする結果、逆に肯定面をも否定面に転化させているということが、主体

的に認識しえないところにあります。肯定面に立場をおこうとする時、逆に肯定面が固定化され、そこに弁証法の観点が欠落していることに気づかず、結局、否定面を克服しぬけずにあります。その結果、多かれ少なかれ自己の正当性の側に身をよせて、他の組織を批判することによって存在基盤を固めています。

不断に自分の立場を固定化したところからしか人民の闘いをみきれず、革命の立場を問うこと自体が出来きれずになりました。敵階級との熾烈な階級攻防の敵愾心を、階級的な団結へと自己を革命し、働きかける階級性を党性とする指導性がうちたてられていません。こうした、党的指導勢力を自認する人々の混迷と非団結は、人民の革命性を包摂し領導しえず、敵の延命を結果させる要因を作っています。

それは、日本の共産主義運動の歴史の中で、不断に解決を問われていた根本問題です。今もまた、私たちをも含むすべての闘う人民の一大結集を実現しぬく闘いで問われていることであると実感しています。それ故にこそ、革命思想の非妥協性を武器とする団結をめざし、歴史的な検証を現在の闘いの克服として実践し

つづける必要があります。

3 日本の共産主義運動は、一九二二年、日本共産党の結党によってはじまりました。しかし、日本共産党の結党は二つの意味でそれ以後くりかえしあらわれる問題をもっていました。

ひとつは、その形成が、コミンテルンの直接的指導によって形成されたことであり、もうひとつは、その結集した主体が知識階層であったことです。それが日本共産党、日本共産主義運動の思想的弱さをつくっていたといえます。ひとつには、人民の生きた闘いと結合した革命の指導思想をつくりうる主体的準備と、指導がなかったことであり、もうひとつは、階級的な思想のひとつの表現である自力更生の立場の欠如ということです。

日本共産党に結集した同志は、知識を先どりしうる知識階層の先駆的役割を、そのまま革命の前衛性としてもちこしました。思想的には、根づよいエリート意識、ブルジョア英雄史観を孕んでいました。それは、マルクス・レーニン主義を

論理的正しき、またロシア十月社会主義革命で証明された物質化された力としての知識に依拠することになりました。また、それさえも、歴史的な制約の中で十分なものとしてありました。同志たちは、マルクス・レーニン主義を人民の生きた思想としてとらえきれずにいました。マルクス・レーニン主義を、革命的境界観としてとらえられず、知識や権威としてうけ入れてゆきました。

マルクス・レーニン主義の革命的境界観が、人間を第一とする思想であり、何ものにもまして人間を第一におくということが理解されず、ブルジョア思想の物を第一とする思想を変革することなく、運動は発展していきませんでした。人民を愛し、人民をしっかりとまもり、人民の利益を実現していく態度が欠如していました。人民愛からうまれる、階級的な敵愾心をもちえず、敵の弾圧の前に恐れおののき、自ら解党するなどの誤りを犯しています。

また、その知識階層としての思想的限界から、人民としっかりと結びつかず、自分たちをコミテルンのおすみつきを持った権威として絶対化する態度がありました。そして観念的な理論でもって、人民の闘いに分裂をもちこんでゆきました。

人民を愛し、人民を信頼し、人民に学ぼうとしぬけないため、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本人民の闘いとをしっかりと結びつけることができませんでした。マルクス・レーニン主義を主体的、創造的に発展させることはできませんでした。そのことが、日本革命の敗北の歴史に一貫して流れています。人民を愛し、人民を信頼し、人民に服務するという立場がない限り、その「目的意識性」とは即座に主観主義と組織利己主義となります。

人民を第一におくということができず、組織や路線を自己目的化することによって、人民を大切にすることができず、マルクス・レーニン主義を反人間的思想だとする敵のデマに根拠を与えてゆきました。

共産主義は、人による人への搾取支配を終わらせるための学説であり、共産主義は知識ではなく、人間が生きつづけようとするとき必ずそこにたどりつきます。それを科学的に解明し、実践的な方向を明確にしたのがマルクスやレーニンの業績でありました。人間が搾取支配や差別などの苦痛なく共に生きたいという欲求が共産主義を準備します。共に生きようとする人間の本源的な姿にしっかりと依

拠し、それをおして人民と深く結合することが問われていました。それは人民の肉感的な感性をふるいたたせるものであるし、また、だれもが革命に参加しうるということであります。人民が共産主義を知らないのではなく、人民こそが、その感性のうちに共産主義をもっています。それにしつかりと結びつき、学び、マルクス・レーニン主義を発展させていくことこそ革命勝利の根幹です。

4 日本共産党は、共産主義インターナショナル（コミンテルン）日本支部として生まれました。それは国際、国内の人民の勝利を実現する中核部隊として、日本の階級闘争史上画期的な革命組織としての第一歩をふみだしたのです。

コミンテルンは、ロシア十月社会主義革命勝利を軸に形成されました。そして、ロシア革命を勝利へ導いたボルシェビキを中核として、各国の共産主義者が結集して形成されました。歴史的要請にこたえぬく、世界人民の、世界労働者階級独裁にむけた総司令部として熱望されていたのです。それは、各国の、人民の主体性を階級的に育成することを軸に問われました。しかし、各国の指導勢力の未熟

な現状から、結果的に、上からの党建設ということに一面化されていきました。

世界の共産主義運動の未熟な初期の段階においては、直接、各国党を形成指導していくということは重要な意義をもっていました。しかし、各国革命主体が人民と結びつく闘いを組織する主体的な立場が十分でない為、人民性を階級的な力としてつくりきれませんでした。人民に依拠しないところからくる自力更生の力量のなさが、国際権威主義を形づくりました。コミンテルンが実質上、ボルシェビキの直轄組織となっていきました。ボルシェビキがロシア革命の歴史性、個性の中で育成したもののや経験そのものを、即世界党の指導の普遍的な質としてとらえる傾向を孕んでいました。各国の歴史性、個性性に対して、真に普遍的な質を獲得しながら、各国の闘いを発展させる中でこたえてゆけませんでした。そして、日本においては、それが顕著にあらわれました。日本人民の代表である党が、人民に深く根ざした自力更生の闘いによって組織する困難さを回避していました。こうした他力本願は、革命と人民を軽視した権威への服従を許し、闘いの発展を逆に阻害してゆきました。

世界的な共産主義運動の発展の中で、人民と深く結合しようとした革命は、自力更生をその立場とし、コミンテルンの指導の飛躍をうながしていきました。そのことが、やがては、これまでのコミンテルンの存在そのものを不要とし、その解放をうながすことになってゆきました。

しかし、日本共産党は、日本人民と深く結びつかず、日本人民に服務するといふ思想性が弱く、戦前、戦後と一貫した国際権威主義をもっていました。それが、主体的な革命路線をもちえず、コミンテルンが下す路線を教条的にうけられることによって、存在基盤をかたち作っていました。また、それを日本革命の状況に合致・発展させることもなく、コミンテルンの方針転換ごとに態度を一変してきました。また戦後においては、「国際権威」からの批判があるごとにゆれ動きました。いくらコミンテルン自身が正しく、方針・路線が正しくても、それだけでは革命の勝利は実現できません。うけとめる主体の側の実践とその結果としての総括がない限り、つねにそれは消化不良になってゆきます。戦後においては、反ファシスト連合国の中にソビエトが入っているからとして、米帝軍を「解放軍」と規定して「平和

革命」の幻想にとらわれたりしました。それを「国際権威」から批判されると、条件を全く無視して民族解放革命戦争の方式をそのままもちこみ、敗北してゆきました。しっかりと人民を信頼し、自分の頭で考えることができなかつた為です。

5 日本共産主義運動の大きな弱点に、団結の問題があります。今日、日本共産党や、様々の小グループまで、日本革命運動は全くの分裂状態にあります。日本の革命家が、真に人民との団結をめざさなければ、分裂はいつまでも放置されます。それぞれが、自らを絶対的に正当であると主張し、他の組織をたおすことやつきになっています。人民の解放をかちとる革命をめざすもの同志が、自己の組織の正当性を示すために殺しあうという悲惨な現状があります。そのことが、人民との結びつきを弱め、支配階級を延命させる結果を生んでいます。人民の利益よりも、自らの路線などの方法形態を絶対化し、それに対して意見の異なるものを敵と規定し、それを破壊することに精力を費しています。それぞれの革命組織が、ひとつの階級の利益、一つの階級の責任から、その不十分点を共に克服し、

ひとつになつてゆくことができない為です。他の組織の不十分点は、自己の正当化の道具となりえても、決してその責任を共有し、共に克服する対象とはなりませんでした。そこには、敵の思想の反映である競走心や、組織利己主義があります。革命の責任をひとつの階級的責任としてとらえられず、また、様々な不十分点というものは、また自らの不十分性の反映であるとしてとらえきれない為です。

もう一つの根拠は、人間観の問題としてあります。それは人間が變つてゆくというところがとらえきれず、固定的にとらえ、人間を物理的に扶殺しようとする態度にあります。それぞれの組織は人間がつくつていくものです。人間は、相互のはたらきかけを通じて變革しあい、變つてゆき、ひとつになつていくことができます。客観的な真理です。人間が變わるという確信がなければ、共産主義を本當に確信することはできません。また、人間を深く愛してゆくこともできません。人間が變わるという確信がない限り、それは人間憎悪、虚無思想に即転化します。

党働者階級の立場は、すべての人民と団結しうる立場をもっています。資本主義社会の中で、商品価値におとしこめられた人間が、人間としての解放を勝ち取る為の自然な姿、そこに労働者階級の思想の基本があります。だから、労働者個個のあるがままの思想から、人間の解放を実現する階級の思想へと不断に力を組織しなければなりません。この労働者の階級としての力そのものが、人類解放の普遍的質を創造し、共産主義を実現する原動力となります。労働者階級の立場のみが、すべての人民を、しっかりとひとつに団結させることができます。

かつて日本の革命運動は、労働者階級の立場にしっかりとつとめ、あるときは無原則に合同しようとして分裂をみちびきました。そしてあるときは、人民の闘いとかけはなれた「理論闘争」をもちこみ、分裂させ、その分裂まで合理化してきました。また「国際権威」をカサに自己を絶対化し、自らの立場を労働者階級の立場へと改造しようと思わず、団結を求めたのではなく、分裂を生み出してきました。また、コミンテルンが社会民主主義者をブルジョアジーの代理人・敵とした時も、全く日本の具体的な状況もみることなく、社会民主主義者を敵にまわしてきました。団結を求め、団結をつくり出すことは、ひとつの利益、人民の利

益の実践に向けて、それぞれがもつ不十分性を共にし、克服するという態度の中から生まれます。人民の利益の実現に向けて、不断に自己を改造するという立場、そしてその立場から働きかけることこそ問われているのです。それが無い限り、団結とは自らに従わせることになり、統一戦線とは利用のための手段となり、革命の勝利完成にむけた人民の力の結集をかちとることはできません。

6 日本共産主義運動は、労働者階級・人民の中に根をはることができませんでした。人間を第一とする指導思想の欠如と、人民にしつかりと服務する指導性の欠如によって、人民と結合できなかつたためです。日本共産主義運動は、「目的意識性」ということをはきちがえ、「すすんだ前衛」と「おくれた大衆」という発想をもっていました。「すすんだ前衛」が「おくれた大衆」の上に立って、それを引き上げるといふ態度としてあらわれていました。自らを優越者として絶対化し、そこから指導しようとする能力主義的人間観のおもいあがりがあります。私たちが指導性をもって闘おうとする時、不断に自己を人民の利益へと解体していく立

場、人民に服務する立場がない限り、ひきまわしや、組織利己主義となり、人民とはなれていく結果を生みます。

ロシア革命以降の共産主義運動の発展は、人民を愛し、人民に服務することが指導性の核心であることを示しました。この核心こそ、人民としつかりとした結びつきをつくり、革命を勝利完成させていくものであることを証しています。

日本共産党をはじめとする日本の指導主体は、労働者階級の思想にしつかりと立ち、人民に根をはることができずにきました。自らの思想的な限界を気づかずに来たといえます。不十分の克服を、その方針や形態の問題としてしか見ることができませんでした。だから形態的に大衆にうけ入れられるということを基準に、マルクス・レーニン主義の普遍的な真理までを修正しています。労働者階級と人民の本質的な所にふれ、そこから結びつくのではなく、大衆の欲求の即自性にのみ拝跪してきました。

たとえば、暴力革命を「強力革命」という言葉におきかえ、労働者階級独裁を「執権」という言葉におきかえても、その本質的な内実を問わない限りにおい

ては無意味なことです。形態や言葉をかえても、私たち日本共産主義運動の過去の思想戦の敗北を克服しない限り、大衆が、日本共産党に、また日本共産主義運動に対してもつ、本質的な恐れを取り除くことはできません。日本共産主義運動の中で問うべき核心は、武装闘争か議会主義の平和革命かという方法上の問題以前の、人間観・革命観の問題です。

私たちが、本当に問われなければならないのは、私たちのめざす革命が、人民の生きた感性を力とするものであったかどうかです。私たち共産主義者が、人間を第一とするマルクス・レーニン主義の世界観にしっかりと立ち、人民を愛し、人民を防衛し、人民に服務しえていたのかを問わなければなりません。そのこと抜きに、言葉上で暴力という言葉をなくしても、本質的に権力とは暴力であり続けるにすぎません。私たちは、共産主義という一切の暴力のない社会をつくるためにブルジョアジーからその権力を奪いさり、彼らに対してはまさに暴力的な独裁をとります。労働者階級が権力者たちに向ける「暴力」とは、人民を愛し、人民を防衛し、人民の利益を実現するためのものです。人民を抑圧し、人民を搾取し、人

民を殺すためのブルジョアジーの暴力とは、全くその内実においてはちがうものです。人民は、闘いの中で躍動し、欲求として闘い、団結を求めながら、共産主義をきりひらきます。革命活動が人民の生そのものにふれるとき、はじめて人民との深い結びつきが生まれます。それは当面の戦術や、単なる形態的な要求の実現にとどまらない、本質的結びつきを必要とし、また可能としていきます。

しかし、日共をはじめとする革命組織が、どのような「暴力」をもっていたかを考えるとき、「暴力革命」または「暴力革命の否定」の行動の中に、その本質が、よりはっきりとわかります。「分派闘争」や「党派闘争」において、暴力のブルジョア性、反人民性がはつきりと現われているからです。自己の組織の利益のために、人民の代表である同志に対して、また、自らと意見の異なる革命組織に対して、暴力は一貫して向けられてきました。それは、思想的貧困からの、人間憎悪思想からくるものです。決して、階級的暴力の本質である、人民を愛し、人民を防衛し、人民の利益を実現するためのものではありません。五〇年代の日共の「武装闘争」にあらわれているように、人民を楯にする思想の延長にあります。武装闘

争とは、何よりも敵をせんめつし、味方を防衛するものでなければなりません。五〇年代以降、日本共産党は暴力を否定していますが、味方への党派闘争の暴力は、肯定しています。結局、暴力を没階級的にとらえ、敵の思想を肯定しているのです。

一方で、日共に対して、「平和革命」反対、暴力革命をとなえた人々がどうであったかを考えてみると、やはり、その内実そのものが日共と同じであったといえます。彼らもまた、人民を愛し、人民を防衛し、人民の利益を実現するためにというより、客観的には日共に対して、形態的に暴力革命を対置したにとどまっています。そのことから彼らも日本共産党と同じく、「分派闘争」「党派闘争」にその暴力の本質があり、敵との攻防においても、そのことしかみえていません。根本的な人民性に欠け、自ら孤立化してゆくことになっていきました。そして、その思想の貧困が、人民の代表である同志たち、かけがえのない革命の同志たち、人民の代表である同志たちを、自らの手で殺してゆく悲惨な現実を生んでいます。そして、それは日本赤軍自身の前史でもありません。

7 日本共産主義運動の問題として、武装闘争に対するとらえ方があります。日本共産主義運動の歴史において、武装の準備と武装闘争は十分なされてきませんでした。根本的に合法主義的な体質をもっています。それは敵との闘いの中で、多くの困難をもたらしました。合法主義は、武装闘争を左翼日和見主義的に行使します。人民から孤立し、持久戦を担いませぬ。

何故合法主義かといえば、思想的な階級協調を無自覚にもちこしているからです。革命を欲求し、必要とし、創意の中で人民の海を闘い、ことに努力が向けられませんでした。それは、敵の支配下で闘い、いうと積極面を拡大し、保守主義となり、幻想の中にいるためです。非妥協な力を真剣に勝利の闘いへと組織していかないことも意味します。人民の意志、その総意としての党の意志は、徹底した非妥協の思想を武器として、初めて闘いの陣型をあらゆる形態で実現できるのです。

戦前においては、綱領の中に「労働者の武装」ということがかけられながらも、真剣に武装について準備しぬけず、今日に至っています。また三〇年代において、一定、武装が意識化された時も、何の準備もなく労働者に武装させ、官憲

に対抗させ、丸裸のまま権力の前にさらすという冒険主義をやっています。組織体制においても、非公然であったが、それは権力の弾圧からのがれるためという消極的なものでしかありませんでした。

戦後その体質は抜け切れず、米帝軍を「解放軍」と規定することによって、階級的にその下での「平和革命」を幻想することに陥りました。それが「国際権威」からの批判と人民の闘いの中で破産すると、民族民主革命の武装闘争方針に急転換しました。

しかしその武装闘争とは、第三世界、とりわけ中国革命のひきうつしでしかありませんでした。しかも戦術による抵抗自衛組織からの建軍の方針は、再び何の準備もない党を即時的に武装させることとなります。日本革命の特殊性を無視することによって、人民を丸裸のまま権力の前にさらすことになっていきました。

それが破産すると今度は、それを完全に清算し、「発展した資本主義である日本」という特殊性を強調することによって普遍性までも清算し、再び、「平和革命」によって党の飛躍を果たそうとしてきました。

その転換期に登場した「新左翼」は、「平和革命」に反対し、暴力革命を唱えつつも、その日本共産党の合法主義的体質を継承してきました。武装闘争の中で勝利の革命をしつかり準備するというよりも、人民大衆の実力闘争へ拝跪して、それにのつかることによって闘いを続けてきました。武装の質としても、ゲバ棒や火炎ビンなどを大衆にもたせ、権力に対して突入させることしかできずにきました。権力奪取に向けて武装闘争をしつかりと準備しきれませんでした。

また、その大衆実力闘争の中で武装闘争を意識化し、準備しようとした部分においても、合法主義的な体質は抜け切れず、権力の前に敗北してきました。逆に合法主義を清算しようとした部分は、孤立し、人民としつかりと結びつけず、解体してゆきました。

この根本的な問題は、第一に、日本共産主義運動の主要な担い手が、知識階層、学生層というプチ・ブル階層の思想のままであったことです。そのことから、労働者階級、人民としつかりと結びつくことができずにきました。日本の武装闘争の革命的な伝統を継承しえず、全く準備と蓄積がなかったことにあります。

第二に、また武装闘争とは、人民の生きた闘いと結びつくことの中から、意識化され準備されていきます。しかし、日本共産主義運動は人民としっかりと結びつけない、知識階層の限界の中から、常に武装闘争は頭の中の知識でしかありません、現実の土台と結びつきえずにきました。そこから左右の日和見主義が生まれてきました。

第三に、その闘いは、人民を防衛し、人民の利益を実現しえず、人民を権力の前に丸裸にし、敵と自分との攻防しかみることができずに行いました。それが主観主義的実践となり、自ら解体してゆくという誤りをもっていました。

第四に、日本共産主義運動は、非合法活動の伝統においては、権力から自分たちの身をかくすという消極性しかもちえずにきました。非合法体制ということが、敵から規定されたものでしかなく、私たちが作りあげようとする社会の、権力の質という主導性の側からは、全く組織されえませんでした。本質的には合法主義的な体質しかもちえなかつたのです。したがって、それは合法的活動の余地があるときは、すぐに清算されてしまうのです。口先で武装闘争はいうが、いっこうに

実践しないという限界は、人や物が量的に準備されていないということではありません。

私たちに問われているのは、人民としっかりと結びつき、人民に学び、日本の特殊性に合致した武装闘争を準備することです。人民の即座の武装ということではなく、人民との思想的な団結を軸に地下で結びあつていくことです。独自に組織され、訓練された部隊が、人民の利益を実現し、人民を防衛する闘いの持続の中から始まります。

当初、一見人民と分離しているように見えようと、その闘いの内実と持久性は、しっかりと人民との結びつきを強めることができます。その結びつきを根拠とし、逆に人民は、組織された人民の武装勢力を根拠地として、全面的な革命勝利を一步一步勝ちとつていくことができます。

ベトナムの解放軍の戦士たちは、人民を敬愛し、人民を防衛し、人民の利益を実現する武装闘争を通して、ベトナムの統一と社会主義建設を実現しました。そのような指導思想を確立する闘いこそ、日本の武装闘争を人民としっかりと結びつ

け、社会主義建設を担っていける確信をつくります。あくまでも、社会主義実現の主人公は、人民の力にあります。

8 日本共産主義運動の問題として、戦前・戦後を通して敵にとらわれた同志たちの多くが権力に屈服し、自供転向していったことがあります。戦前においては、日本共産党の幹部が、天皇制権力に屈服し、転向したことから、大量の転向者を生みだしていったということがありました。また、戦後においても、戦鬪的に闘ったものが自供、転向するという事実が多くありました。そして私たち自身も同志の自供という痛苦の現実を教訓としてきました。

この問題は日本共産主義運動が、人間を第一とする革命的な世界観を欠如させていることを示しています。人民の代表である同志に対する階級愛を基礎とする不滅の絆、そこから生まれる敵愾心をもつことができないためです。また、そのような隊伍は革命の本質にふれた団結をもちえていないことをあらわしています。

革命とは、人に対する人の搾取支配の廃絶であり、人と人との共産主義的関係をつくりだすことです。それは人間が本源的に共に生きることができ、いいかえれば、人間的愛情でのみ結びあえる社会の建設です。それは単に制度的な樹立のみではありません。人間が共に変革しあって生きてゆけるという確信、だれでも革命に参加できるという深い確信が、勝利の確信をつくります。

共産主義運動を知識にとどめたりしてしまい、人間が求めている、その本質的な所に触れず、革命勝利を語っても、それはマルクス・レーニン主義の洋服をきたプチ・ブルジョアジエであることをやめることはできません。ブルジョア政治と全く同じ水準で、共産主義運動を考えてしまうことになりません。革命組織は、社会主義、共産主義の根本である同志愛を軸に団結し、それを武器としなければなりません。それは敵に負けるから団結するのではなく、新しい社会を建設する原動力であるからです。ブルジョア社会の中でしらすしらすに身につけた人間憎悪思想や虚無思想と自ら闘わず、本音を切りすて、政治の中に身をおこうとすれば、必ずブルジョア政治に転化します。さらに相互不信や表面的な団結しかできません。

そのことがまた、不断に人民観に反映し、人民を愛することができず、人民を信頼することができず、共に生きるという確信は不断に崩れていきます。

またそのことが、戦前においてはスパイの温床となりました。党内にはびこる相互不信や対立は、容易にスパイの入ることを許しています。またその党内生活における幻滅は内部のものがスパイとなってゆくことを許しています。

同志愛のない隊伍、本音の言えない隊内団結は、敵に本音をはくことを許してきました。同志愛は、本当に同志の誤りや欠陥を自分のものとしてうけとめ、不断に共に克服する中で、心からの団結をつくりだすことができます。同志愛によって隊内のしつかりとした団結と人民の深いつながりを作り出していくことができます。人民、同志、友人の苦しみを自分の苦しみとして受けとめうる感性をうちきたえる時、ブルジョア社会の中で作られてきた個人主義や利己主義を打ち倒し、階級的敵愾心が心の底から生まれてきます。また、党内生活において、日常不断に本音の内にあるブルジョア思想と闘い、克服しあい、唯一の階級思想を確立していく中にこそ、思想の統一性としての組織性も生まれてきます。

そして、人民愛、同志愛は、未来の共産主義社会の根幹であり、その中からこそ本当に、言葉や知識でない共産主義の確信が生まれてきます。その中で徹底して敵と闘いぬき、人民との深い団結をつくりだしていくことができます。

9 天皇制思想との闘いにおいて、日本共産主義運動は、どうであったでしょうか。日本共産党は、その三二年テーゼの中で、天皇制を「搾取階級上層から相対的には独自の役割をもつ絶対主義的君主制」と規定しながらも、それが日本人民の天皇制権力との闘いの実際的な経験の総括として出されませんでした。それが、コミンテルンという至上の権威から提起され、権威主義に犯されていた日本共産党の同志たちは、金科玉条として受け入れることにとどまり、消化不良に終わっていました。

天皇制のとらえ方において、それを天皇個人に解消させることによって、天皇制とその思想の本質をつかみえず、天皇制とその思想に屈服してゆきました。戦後においても、その天皇制の絶対主義的基盤が解体され、「象徴的天皇制」として

形骸化された様に吹聴されながら、天皇制は存続しています。それもまた天皇個人に解消され、一般に「あってもなくてもよいもの」という意識にさせられ、天皇制とその思想の本質そのものを延命させてきました。「象徴」として、本質をかくし、支配の形式を軽減しただけで、生きつづけています。日本の革命運動の中では、天皇制とその思想に対する闘いは軽視されてきました。

天皇制思想は、封建思想とニセの民族意識の結合環としてあります。日本人の思想に大きな影響を与え、人民支配の本質をかくし、人民を侵略へとかりたて、かつて多くのアジア人民を搾取、虐殺してきました。戦前においては、日本共産主義運動の思想的な弱さによって、天皇制思想が、人民の階級的な意識へのめざめを阻止してきました。人間が共同し、連帯して生きるという人間性（階級社会における階級性）が、天皇を頂点とするニセの民族的なつながりにおきかえられてゆきました。

ブルジョア思想は、歴史的には封建制に対抗し、個人の自由を求める所から出発しました。それが一担支配階級としての力を組織しはじめた時、個人の尊重で

はなく、商品価値の中に人間を置きかえた思想であることを示しました。それは人間の共同性を破壊する競走社会を作ってきました。「個人」を第一とすることによって、利己主義、個人主義というものをその基準におき、それを統合し調和するものとしての国家の暴力装置に支えられています。

天皇制思想は、具体的な天皇を頂点とするニセの民族的つながりを示すことにより、ニセの共同性の中に個人を否定し、人間のつながりをより超越したものとして思想的統一を果たそうとしました。人間が共に生きるということが、天皇制への奉仕としてあり、その奉仕自身は再びその人間のもとにかえることのないものとしてありました。

そして、日本「民族」の優位性をとき、人間が共に生きてゆくという本質を否定する反人間性と野蛮な侵略性を美化し、合理化してきました。すべての人民がみな同じであり、又、共に生きてゆけるのだということを否定し、人間の優劣を強調し、優位の下に、すべての人間を奴隷にすることを正当化する思想です。ブルジョア思想も天皇制思想も、支配階級の利益を実現する同一の思想であることに

はわかりありません。それはどのような外被をまとおうとも、被支配階級の人間性を認めないということにあります。

こうした敵の思想は、また左翼の思想の中にもまぎれ込んでいます。そのことは、日本共産党の国際権威主義と民族排外主義の思想の中にあらわれています。またその逆に、それに反対した「新左翼」のように、日本を革命の中心として考え、他の革命を不十分なものとして、自らに糾合しようとするその態度にあらわれています。それぞれにおいて、人間が同じであるということを否定し、それぞれがその主体性、自主性において結合するのを阻み、常に超越的、絶対的なものが支配するということに落ち込んでゆきます。

労働者階級の特性的の中に、主体性、自主性というものがあります。これが敵のおしきせの思想を打ち破って、自らを発展させ、労働者階級の思想を作っていきます。人民の主体性の結合を通して創造性をもち、階級の真の力を発揮していきます。それは何かしら形をまねるとか、似せたりするものではなく、しっかりと自分の力で考えるということです。自らの歴史性、個性性というものを創造的に発

展させる自力更生の力がしっかりと結びつき合う時、労働者階級の国際主義は、また発揮されます。優位性や比較や競走ではなく、個性性、歴史性の中から各国の革命が同じ質をつくり出してゆくことができます。

そして、その結びつきは、何かすぐれたものがあって、その下に従属することでなく、各国の革命が平等の立場から創意を発揮し、世界革命に向けて責任を共有し、不充分点を相互に克服し、ひとつの力をつくってゆくものとしてあります。その時何かしらひとつの形へと向かうのではなく、豊かで創造的な建設を果たしてゆけます。根本的に人間を競走や敵対から解放し、人間の共同の力を通して豊かな社会を建設しぬくものです。それは現在の階級社会では階級闘争として組織され準備されています。

それ故、革命の指導性は、能力的にすぐれたものが発揮し、技術や知識のないものは、その下に従属させられていくという構造であってはなりません。指導性とは、知識や技術の量の問題ではなく、人民・同志・友人に服務するというところにあります。自分が勝っているという優位性の中からは、指導性は生まれませ

ら。それでは不断に革命組織内でブルジョア社会と同じ競争を作り出すことになり、すぐれたもの、劣っているものの差別が生みだされてゆきます。

革命組織は敵の思想から自由であるという思い込みは、自らの発展を妨害します。私たちは、自らの中にはびこる天皇制思想と不断に闘わなければなりません。それは人間を第一とする革命的 세계観の確立に向け、意識的な変革によってのみ可能です。そしてそれが認識にとどまっている限り革命の力になりません。あらゆる領域で、真に資本主義批判、社会主義建設を実践する時、真の力を徐々に組織することができます。

10 私たちは、以上のように、日本革命の歴史を教訓化しています。その教訓をふまえ、自らの血肉としながら、日本革命の勝利完成にむけて、闘い抜きます。団結にむけて、私たちは次のように提起します。

(1) 私たちは、革命活動を人に対する働きかけと規定しています。人に対する働きかけそのものを一致させていく闘いをこそ、準備していかなければなりません。

ん。

私たちは、革命に対する態度が、党性、階級性、人民性にしっかりと立脚することを基本とします。それは一言でいえば、階級的立場を政治的立場とし、人民の利益を実現しながら、人民の党と軍隊を作っていくこととする立場です。それは私たちが、不断に、自分たちの「確信」を客観的真理、革命の是非の前で解体し、より正しくうちきたえ、団結を求めつづける持久性の中で実現されます。

(2) 革命活動は、どの革命家、革命をめざす組織のどのようなまちがいや失敗も、階級の責任としてとらえ、共に克服し、援助しあって進む観点をもたなければなりません。

革命活動における、責任の私物化、責任転嫁は、ただ人民の闘いに害毒をもたらします。自分だけが、自分たちだけが革命をやっているというセクト主義は、人民に革命をやらしたくないと言っていることと等しいのです。不十分性を階級の一つの責任として、共に克服することをめざします。

(3) 日本革命を人民の力で勝利しぬくために、革命的 세계観を基礎とするしつ

かりとした人民の、革命の中核を育成しぬくことが問われています。その中核育成は、思想闘争の中で、しっかりと人民観、組織観をうちきたえながら育成されま

す。

(4) 私たちは、実現する日本人民共和国の基本的な制度を確認しあつていくことをめざします。だれでもが結集できるものが綱領の基本であるという綱領観にやります。「党派性」や特徴としてあるものよりも、人民と必ず団結しうる、簡潔で、基本的な内容が問われています。認識の一致は、実践の中で思想闘争として深められ、社会主義建設の内実は、闘う人民・同志・友人が主体的につくっていくものだからです。

(5) 闘いの形態における分離と思想的結合をもつて、団結を無数の階級的力として闘いぬくことが問われています。自分たちの生活現場をまず闘いの場とし、地下で隠然と結びあつたアンテナで、相互の不十分性を共に克服しあう一つの革命の陣型をつくっていくことを呼びかけます。私たちは、人民の意志と叡智によつて支えられ、人民を防衛し、人民の利益を実現する軍の形態をもつて、団結を

更に求めます。あらゆる形態の中から、人民の中核部隊を育成し、階級性を党性とする一つの指導勢力を準備していきます。

(6) あらゆる分野で思想闘争をほりおこし、しっかりと団結を求め、思想的一致を軸に、日本人民共和国建設を、持ち場で闘いぬくことを呼びかけます。あらゆる分野の闘いと重層的に結びあい、智恵を出しあい、相互に支えあつて、反日帝の闘いを、日本人民共和国建設として準備しようではありませんか。それは、ある分野においては公然と、そして多くの分野においては隠然と、力強く団結を確認しあい、人民の力を一つにしていく闘いです。その闘いは、唯一人民と人民の思想闘争による相互の持久的な働きかけによつて保証されます。

思想闘争の基軸は、人民の利益になることを、一つでも多く深く実現し、人民の不利と一つでも多く深く闘うということです。そう思い込んで、やった結果を真剣に問い、まちがいを正し、自分を変革し、団結を求める持久性の中で、必ず階級的な一つの力が育成されていくでしょう。その闘いの担い手の一人一人として私たちも闘いぬきます。これは根本的に、革命に対する立場、観点、方法を

統一し、より階級的なものとしていく闘いです。

以上のような革命に対する立場、観点に立つて、日本革命の勝利完成に向けて日本赤軍は、五つの柱を軸に闘いぬぎます。

① 日本人民共和国の建設

私たちは、日本帝国主義を打倒し、アメリカ帝国主義を追い出し、社会主義を実現することを、日本人民共和国の建設として闘いぬぎます。日本帝国主義の物質基盤である独占・官僚・大土地所有者・皇室・軍隊・警察に加え、米帝の軍事基地、多国籍企業を中心とする反革命の支配の構造を、全人民の団結した力で、解体することをめざします。日本帝国主義支配の思想的環である天皇制思想と対決する、しっかりとした労働者階級を武器に、全総力を結集する闘いを展開します。

日本人民共和国は、人民を主人公とする世界的な規模の社会主義建設の一部です。建国に至る闘い、そして日本人民共和国の制度樹立の闘い、社会主義の勝利

完成の闘いは、しっかりと労働者階級の一つの思想で結ばれて、世界中の人民の闘いと共に発展します。

日本革命の勝利は、世界革命勝利の保証であり、日本人民共和国の建設は、世界人民の根拠地の建設であるといえます。逆に、世界の人民の闘いの勝利は、日本革命を支援し、保証する根拠地であります。ここに、労働者階級の思想によって一つに結ばれる国際主義と、自力更生の闘いの力があります。私たちは、現時点から、その責務をしっかりと見つけ、階級性を党性とする不断の革命実践を、持久的に実現します。

② 臨時革命政府樹立をめざす日本革命協議会

日本人民共和国の建設に向けた、人民の指導中核の育成が問われています。革命の主體的な力をどのように準備するのかという問題です。私たちの闘いは、社会主義革命に勝利するばかりではなく、完成する闘いを担うことが問われています。それは、制度的樹立や、形態的な、労働者階級独裁の執行だけを意味しません。真に、人民の力を主体として、社会主義建設を担いうる思想的な団結が保証

されなければ、それはできません。集団主義を闘いの中で育てることが問われています。現在の支配階級の思想をしらずしらずに肯定した個人主義の側に立って

いては、団結を建設の力にすることができません。労働者階級独裁—継続革命として問われる集団主義の力を、現時点から準備するものとして、思想闘争を軸とする団結が問われています。

私たちは、臨時革命政府樹立に向けた、日本革命協議会の建設をめざしています。これは、革命の中で育成される、実質的な人民の指導勢力の結集体であり、人民の指導勢力が、不断に階級的な利益の観点から、自らを変革して団結を求めつづけ、一つの統一された力をうち固めていくものとして、日本革命協議会を展望します。不断に思想闘争の中で、党を革命し、社会主義建設路線の同質化をおしすすめるものです。

どのように主観的にマルクス・レーニン主義組織、前衛党を名乗っても、実際の行動の中でそれが示されなければ、意味をもちません。社会主義建設に責任をもつ、思想性、組織性、指導性によって、人民と団結し、人民が導きの糸として

結集して初めて、党的指導を実現できます。主観的な自称の党や革命組織が、人民と団結せず、他組織との正統争いにあけくれば、勝利の革命を保証しえないどころか、害毒となり、革命の妨害者となってしまいます。

私たちは、自称の革命組織であるかどうかではなく、人民の利益を貫いている指導勢力であるかどうかを基準とする、臨時革命政府樹立に向けた日本革命協議会の建設を展望します。あらゆる分野から結集した指導勢力が、自らを変革し、党を革命し合い、補い合う中から、指導思想の統一を社会主義の建設に向けて、勝ちとっていくことを、日本革命協議会の中で果たします。真に階級性を党性とする力の統一を果たしていくためです。

現在、まず日本革命協議会を担いうる中核部隊へと自らをうちきかたえるものとして、当面の闘いを組織します。日本革命協議会を実現する中核部隊の育成を、思想闘争を軸に、あらゆる人民・同志・友人と共に、実現していきます。

③ 地下大衆運動による全人民的団結

革命の入口は無数でも、出口は必ず一つに連なっています。正義感から出発す

る闘い、知識によってめざめる闘い、自分の生活を守ることから出発する闘いなど様々あります。闘いの中で、根拠を問いつづけていけば、それは必ず、資本主義的生産関係の廃絶を準備することによって解決されるものであることが明らかになります。何故なら、資本主義社会は、人間として生きることを許さぬ商品化された社会だからです。人間として生きることは即ち、階級支配そのものをなくする闘いへとつきすすまざるをえません。人間愛は、階級支配の中で、唯、階級愛として組織されてはじめて、人間としての社会を建設する展望を社会主義の実現として可能とします。どんなに小さな闘い、どんなにさまつに見える闘いの中にも、非妥協なしぶとい運動化の中で、階級の力を支えあうことができます。

かつて、どの革命組織も、人民との団結をめざしてきました。右の日和見主義は、階級性の欠落した大衆の欲望——それは、あくまでも現状肯定を基礎とする欲望です——に拝跪し、革命を、量的な力で実現しようとした。左の日和見主義は、運動的な先鋭化に、人民・同志・友人をひきつれ、丸裸の敵との対峙の中で、階級形成することに一面化してきました。主観的な質的飛躍は、人民・同

志・友人を、革命から遠ざけてしまいました。

さまつに見える闘い、合法的な闘いは、何の意味ももたないか、持つとしても、自称党の下部機関とならなければ、意味のないもののようにされてきました。私たちは、人民との団結の実現が、果たしえなかったこと、しかしそれにもかかわらず、人民の闘いは支えあって発展していることを、真剣にみつめることが問われています。それは、生活そのものの中に思想と反撃力を持っているからです。

地下大衆運動は、生活を闘いの場とし、社会主義建設をめざす、二重権力陣型の創出過程として準備されなければなりません。そしてまた、その力は、不断にあらゆる運動を結びあい、相互の連けいを密にして、発展していかなければなりません。敵の側からは、個別の無数に見える闘いが、味方の側からは、社会主義建設に向かって、刻一刻整然と隊列をととのえた進撃として組織されるものです。一見、無数で、複雑に見える闘いの価値を、階級支配に対決する人間として生きる価値、つまり、階級的絆によって、統一していくことを実現していくことです。現場の力を発展させて、あらゆる持場を、全人民的団結の一部として実体化して

いくことです。

私たちは、あらゆる階層の人民・同志・友人と出合いうる、主体の側の階級性の構築こそが問われねばならないという観点に立っています。人民との結合は、あるがままの生活基盤を、闘いの出発点として、団結をめざし、主体的な力を変革しあつて、社会主義のとりでをうちかためていく中で、果たされてゆきます。

私たちは、思想的絆によって結ばれる全人民的団結を、地下大衆運動の組織化として展望します。現時点における帝国主義支配に抗した地下の二重権力対峙陣型を、あらゆる生活領域において組織し、準備することを提起します。それは、人民共和国建設に向けて、党と人民の、相互の発展を実現していくものです。

④ 日本赤軍の役割と武装闘争

反帝社会主義実現に向けた、党・軍・人民の階級的団結の弱い環は、思想的な団結力のなさに根拠があります。真の人間の思想・労働者階級の思想を武器とする国際主義の広がり、自力更生の持久性をもって闘い抜くことを、党軍を展望

する主体は問われています。

これまで、日本赤軍は、主導的な人民戦争を基軸に、闘いぬくことを提起してきました。そして、一分野における系統的で持久的な遊撃戦を、全分野における遊撃戦として発展させることを、基本的な、私たちの実践としていきます。あらゆる闘いを思想闘争の実践と規定しているように、私たちは、自らの役割を、軍の形態をもって実現します。遊撃戦を基軸に、思想闘争による人民・同志・友人との出合いを展望します。

組織された日本赤軍兵士による遊撃戦展開は、不断に、人民の意志として、実現されなければなりません。地下武装対峙を軸に、不断に帝国主義支配の政治中枢を打倒する闘いへと発展させなければなりません。つまり、徹底した階級利益を実現する武装闘争を軸に、階級的団結を求め、逆に形態的には分離した人民の闘いを保証しぬくことが、基本的な私たちの闘いの任務としてあります。大衆運動と武装闘争の結合は、思想的な団結をめざすことを軸として、はじめて、別個に、運動的に結合しえるからです。

⑤ 国際革命協議会の建設と国際共産主義運動の統一

私たちは、世界的な労働者階級独裁をめざし、各国の社会主義の建設に向けて闘いぬいている人民の指導勢力との階級的団結をめざしてきました。それを、国際革命協議会へと組織することをおして、単一の国際共産主義運動を創出していくことを課題化しています。これは世界革命勢力の単一の指導母体創出の闘いであり、同時に、国際主義につらぬかれた日本革命を勝利に導く後方でもあります。各指導勢力が培ってきた民族性を、歴史性を、国際共産主義運動として組織しぬく闘いは、長期的な闘いです。まず、出合いの連合性を、思想闘争を軸に、武装闘争を最良の共闘形態として、相互に建党建軍する過程において、初めて具体的な問題として、国際革命協議会の一定の基盤と影響力が問われてきます。これは、日本革命協議会と照応する関係にあります。現時点において、私たちは、日本人の代表として、国際革命協議会の準備主体として闘い抜きます。

これまで述べてきた闘いを担いうる日本赤軍自身の指導性、組織性、思想性を打ちたてるのが、まず第一に問われています。今、問われている課題は、ひと

ことと言えば自力更生です。私たちは、人民の利益をしっかりとらえ、人民と共に、団結をめざし、日本人民共和国を建設し抜くために、主体的準備を必ず闘い抜きます。

四、思想闘争を共に闘い 社会主義実現に向け団結しよう！

1 思想闘争は革命勝利の保証

日本赤軍は一貫して、革命の最前線任務を担おうとしてきました。不退転の武装闘争の非妥協性を堅持し、リッダ闘争以降、最前線をうちかためようとしてきました。しかし、私たちは、武装闘争の勝利の軍事的地平を、全ての革命性の基準と考えてきました。そして、そのことに無自覚に拝跪してきたということができません。

帝国主義者共の、「自分の姿に似せて世界をつくりかえる」侵略と抑圧の思想と非妥協に対決する労働者階級思想は、自己変革と創造の人類発展の基盤であります。自己の主観の固定的独善によって対象に働きかける観念論こそ、「自分に似

せて世界をつくりかえる」帝国主義の立場、ものの見方、考え方を持っている結果であります。日本の共産主義運動の持つている独善的観念論は、マルクス・レーニン主義の徹底した自己批判による階級的団結に反する結果を生んでいます。主観的にどう考えているかではなく、社会的実践がどのような結果をもたらしているのか、客観的、批判的に自己組織をとらえようとしない限り、永遠に団結はできず、新しい奴隷思想を人民に押しつけることになるでしょう。

日本赤軍は、日本の共産主義運動を母体とする革命主体として、実践をとおして登場してきました。しかし、自己の立場、ものの見方、考え方を徹底的に改造する目的意識性をもちえず、不断に客観の反映をうけて自然成長してきたために、帝国主義思想の立場、ものの見方、考え方を改造することができずにいました。私たちの勝利のひとつが大きな革命性と積極性を持ちながらも、思想的には「ブルジョア英雄主義」と希望的観測をふくらませ、自らが、自らに幻想をもつ結果を生み出していたのです。

形態や、方法や技術や、実務を規定する根本が思想であることを、しっかりと

わきまえずにいました。あらゆる闘いから、形態ではなく、思想を学ぶという徹底性と、その自己改造こそ、全人民の階級的利益を実現する前衛性を確立することができます。

私たちは、スウェーデンにおける二人の同志の被逮捕屈服によって、真に自己批判を進んで担う、謙虚な階級の前衛らしい萌芽に目覚め、それを実践の中でうちかためようとしてきました。階級性を自己批判の基盤とし、社会主義建設、継続革命を現在から押し進めるものとして、思想闘争をとらえてきました。思想闘争は、日本赤軍の生命ともいえます。

思想闘争とは、人民内部における階級闘争であり、労働者階級独裁・継続革命へと継承される社会主義政治の現在の姿であります。私たちは、私たちの客観的力量を知っています。遊撃戦を基軸とする私たちの闘いは、全人民とひとつの隊伍へと団結し抜くほんの端緒にすぎません。そのために、遊撃戦陣型の主導性をもちながらも、不断に私たちの組織的力量にとって正面对峙戦を要求されているという現実にあります。階級の、組織された前衛として、党と軍の建設と、人

民の階級的団結によって保証される真の遊撃戦を人民戦争に発展させる過渡に私たちはいます。この過渡において、敵との攻防における遊撃戦展開を総力戦としてしか闘いきれていません。敵は物質力においては比べものにならないほど大きな力を持っています。軍事反革命同盟を軸に、物質力と技術をつくして、奴らは非妥協に搾取抑圧支配を野望しています。

しかし、どのように敵が物質力において、技術においてまさっていても、人類愛、階級愛につらぬかれた人間観とその思想を反帝闘争の武器として闘う限り、私たちは必ず勝利することができます。攻防の力関係の中で闘い、かつ勝利しうるのは、科学的に私たちの闘いが正義であり、人民と共にあり、人民の利益をつらぬく革命の確信にみちた労働者階級の思想があるからです。この被抑圧人民の正義の力は、不動の労働者階級の思想を基盤に、つぎることのない革命の隊伍をうちきたえることができます。私たちの闘いの地平は、より固い団結によって結ばれた階級的力、不動の労働者階級の思想を唯一の基盤とする人民愛、同志愛こそが、なにもものにもまさる私たちの武器であることを教えています。この不滅の武器を

持ち、真に全人民と団結して最前線を担おうとする私たちは、更に思想闘争の中で不断に階級性をうちかためることが深く問われています。

国際共産主義運動を、国際革命協議会―日本革命協議会として単一の労働者階級独裁に向けて準備するために、その呼びかけ主体である私たち自身の国際共産主義運動の内実が逆に問われているといえます。徹底した階級性に立脚し、自己批判―批判を革命活動の基本とする不断の継続革命こそが、思想闘争として今問われ、すべての実践の領域へと拡大されなければなりません。

レーニンが語った、党内闘争は党の生命であり、党をうちきたえるという意味もまた、この思想という問題としてあります。

全人民と共に、自己批判―批判の思想闘争を武器に革命実践をうちきたえること、すべての日本革命を担う同志、友人に思想闘争をもって働きかけること、兄弟組織と思想闘争をもって実践的団結を深めること、革命の根幹である労働者階級の思想を、まずもってすでに出会っている同志と共にうちかためることをしたたかに続けます。

革命の端緒期における階級性に立脚した謙虚な建党建軍の闘いこそ、私たちの未来を決定します。どのように量的に隊伍を増やしても、真に思想的―一致を保証しえなければ、勝利をもたらさず、社会主義建設を一貫して担うことはできません。「未来のため」に現在を犠牲にしたり、「現実のため」に未来を犠牲にする左右の日和見主義を克服し、階級的利益を徹底的に体現する組織性を養い、責任ある革命主体として、大胆な団結をいまかちとらなければならぬ責務を負っています。思想闘争を通じた、ためらいのない、かきねのない、素直で確信にみちた対人活動の日々の積み重ねは、「この階級的な隊伍だけが、真に人民の代表である」という確信を、一歩一歩人民の中に生み出してゆけると確信しています。

2 自己批判―批判

自己批判と批判は、ひとことでいえば、目的意識性の追求とその実践に他なりません。弁証法的な関係で客観世界と主観世界が発展するように、自己批判と批判もまた、弁証法的にとらえることによって正しく認識し、確立し、実践しなく

てはなりません。自己批判と批判は、客観的世界の反映によってひきおこされた矛盾を、主観的世界を改造することを通じて、客観的世界に働きかける過程であります。つまり、批判的実践によって矛盾を統一する方法です。統一とは唯一の革命基盤である労働者階級の利益（それは思想）を深め、統一をさらに共産主義思想へと深めることであるといえます。

それでは、自己批判と批判はどのようになされるべきでしょうか？ 自分をせめる自己批判も、他人をせめる批判も正しくはありません。自己批判が確立されていないならば、他人をせめる批判になってしまいます。自己批判を確立しようとしなければ批判がうまくいきません。他人をせめる批判であれば、それは自己批判が確立されていない結果であるように、自己をせめる自己批判もまた、他者に対する批判を見失う結果をもたらします。自己批判と批判の質の獲得とは、まさに、主観・客観の実践を検証し、飛躍させることであり、自己をせめて自己嫌悪におちいったり、他者をせめて分裂気分をもたらすものではありません。それと同様に、革命事業で批判活動（自己批判―批判）を見失うならば、他人の自己批

判―批判を受けとめることができず、自己保身におちいったり、しかえしをしてやろう、という気分におちいります。

要は、批判活動（自己批判―批判）を通じて主体を革命し、その革命的实践によつて客体に働きかけることです。つまり、自己批判と批判は、環境に規定された認識能力を意識的に高め、敵愾心を理性的にとらえ、敵と味方の確固とした非妥協性をやしなうものであります。「気づいたことは何でも言い、いいたいことは残さずに言う」、「言うものはとがめられず、聞くものはいましめとする」、「誤りがあればあらため、なければ一層努力する」という人民の有益な格言はそれを示しています。

日本赤軍の革命事業に対する思想闘争（自己批判と批判）は、日本赤軍の特殊な問題ではなく、全人民のものとしていかなければなりません。真に、人民の力を動員し、人民と共に、勝利の革命を保証しぬくものだからです。

私たちは、自己批判―批判を内容とする思想闘争を、革命活動の柱としています。それは、これまでの部分的な批判活動や、批判―自己批判を、その内容にお

いて、根本的に問うものです。形態的に、批判―自己批判か、自己批判―批判かを、問うているではありません。自己批判を第一におくということは、自己を変革する力で、団結を求めることです。これまで、日本の革命運動の中で、批判活動は生きた力となりえていませんでした。批判を第一におくことが、常に自らの正当性の側に身をよせて、自らを絶対化・固定化していくことを許してきました。これでは、労働者階級の批判活動たりえません。労働者階級の立場は、自らの解体をも含む、発展的な立場であります。労働者階級とブルジョアジーは、資本主義生産関係の中で対立物としてありますが、労働者階級が支配階級に転化する闘いは、労働者階級そのものを解体し、創造的に人類が解放される社会を準備します。人類の歴史は、階級闘争による発展の歴史でした。しかし、被支配階級から支配階級に転化することは、新たな搾取階級が生れてくることに他なりませんでした。ところが、労働者階級の出現は、支配階級となることそのものが、自らをも解体し、支配―被支配の関係総体をも解体しうる階級としての出現であったのです。労働者階級の闘いは、切実に批判活動を要求しています。何故なら、

労働者階級は、帝国主義者共のように、自らの姿に似せてしか世界を作り出せないような、固定的なものからです。逆に、資本主義を批判し、その批判を自己の能動性に転化し、客観世界を改造発展させていく力を持っています。しかし、労働者・人民の生活としてある思想基盤は、敵の支配の中で育成されてきました。そのことを意識化し、革命実践の中で、労働者・人民の力を開発し、階級の組織された力へと発展しぬくものとして、思想闘争は根幹をなしています。支配階級打倒の闘いを、同時に人民内部における敵の反映の解体として組織していくことが、真に階級の生命を組織しぬくからです。

しかし、批判活動を通して、主体・客体そのものを、創造的に発展させる関係性をうちたてきれず、階級の生命を打ち鍛える批判活動が分裂や敵対に転化してきました。自己批判―批判を内容とする思想闘争は、これまでの非団結を問う、自らの革命歴史の検証と総括の中から生れたものなのです。批判の本質を見失えば、革命を勝利させることはできません。批判は、あくまでも資本主義の基盤を打ちこわし、人民が主人公となる新しい社会を建設する実践とならなければ意味

がありません。それは支配階級との、全分野における闘いであり、味方内部の団結の保証といえます。

批判活動とは、人類が解放されてゆく社会を作り出すために、敵との闘いを通して、私たちの内にある不十分性や否定面を相互に改造し、創造的に高めあつていくことです。また、これが団結の意味でもあります。

自己批判を第一とするということは、客観世界との矛盾を自己の改造を通して能動的に統一するという、指導性、目的意識性の追求であるといえます。資本主義支配のもとでは、現状の自己肯定、他者肯定とは、自らの人間としての存在の否定に他なりません。労働者階級の解放とは、この現状を否定し、新たなものを生み出す創造的な運動に他なりません。それは、批判活動のあり方が、自己を肯定したところからしかなしえない資本主義社会のものは、相容れることはできません。

資本主義社会においては、自己批判ということが弱さとしてしか見ることができません。何故なら、批判活動は、自分たちの現状を守るといって自己肯定の側か

らしか働きかけることができないからです。敵共の批判の目的は、資本主義社会という現実を肯定するためのものでしかないからです。

また、資本主義社会の原理から生れる競争や利己主義、個人主義の思想は、批判というものが他者をけおとし、自らがはいあがるためのものとしてしかなしえません。他者の否定は、即、自己の肯定としかなりえず、自己批判・自己否定をしたとたんに、それは他者を肯定することにしかなりえず、それは、競争における自らの敗北にしか結果しえません。そのような自然成長は、批判そのものが、不団結や分裂としてしか、また、他を従属させるという支配関係をつくり出すこととしかできないものです。そして、資本主義社会においては、分裂をさけようとするれば、批判を回避し、「人の和」による現状固定か、逆に批判をやることによって、自己の支配下におくことによつて分裂をさけることとしかできず、団結を生むことはできません。

そのような資本主義社会における批判のあり方を、共産主義運動の中にもちこみ、知らず知らずのうちに肯定し、それが共産主義運動の分裂と不団結という現

状をつくり出してきたといえます。批判活動が、不断に自己肯定、自己を絶対化したところからしかなしえず、それが創造的な団結をつくり出すものとはなりません。自己批判をすることが、何かしら敗北であり、批判者に屈服することに思え、それは屈辱的なものとしてしか感じえず、自己批判がつねにその場をのがれるためか、自己弁護におちいつてきました。

労働者階級にとっての批判活動は、一つの階級の責任においてなされるものです。自己と他者の否定面とは、同一の責任において克服されなければなりません。他者の否定面とは、同時に自己の否定面です。自己批判とは、自己の否定面の克服を教訓化し、ひとつの未来、ひとつの責任において他者と共有して克服しようという態度のことです。批判もこのような態度からのみ、創造的で発展的なものになります。否定面を共有し、克服しようとする中にこそ創造的団結をつくり出すことができます。肯定面のみで結合しようとしても、それは自己の正当化を伴い、創造的で心からの団結をつくり出してゆくことはできません。

自己批判を第一とすることは、学びあうことでもありません。人民に、同志に学び、学びあうことは、ひとつの階級の責任を果たすために、謙虚に学びあい、不断に相互を改造し発展させることができます。

自己批判を第一とするということは、労働者階級の指導性でもあります。強者が弱者をひきあげるといふ中には、資本主義社会と同質の指導性しかなく、それは新たな資本主義的な関係をつくり出していくこととなります。階級的な指導性とは、自己の不十分性、欠陥と不断に闘い、それを教訓化し、人民と共有し、共に発展してゆくということの中にあります。その中にこそ先駆性や牽引性があります。

自己批判―批判は、実践活動そのものです。実践がなければ意味を持ちえません。批判活動は対象への働きかけであり、自己批判―批判の立場は、創造的な働きかけであるといえます。そして働きかけの実践をとおして、さらに発展していくものです。

自己批判―批判は、マルクス・レーニン主義の科学です。それは客観的世界の根本が弁証法的であり、真理の前に謙虚で卒直な自己批判―批判は、つねに主観

的世界の限界を能動的に打ち破り、矛盾を統一し、客観法則に合致させ、客観世界へ働きかけるものです。そこにマルクス・レーニン主義の科学的な世界観の科学性があります。また、それがマルクス・レーニン主義の革命的な世界観の基本であります。

私たちは、今、自己批判―批判を内容とする思想闘争を、闘いの武器として獲得しています。私たちに、いかなることがあろうとも、しっかりとこのものの見方、考え方に立脚している限り、正しい道をさがし出し、革命の勝利完成を実現することができるのです。人民の創造的な団結を促し、共産主義社会へと確実にみちびく原動力であることを示しています。

私たちは、人民・同志・友人に、いま思想闘争を呼びかけ、団結を求め、私たちのもの見方、考え方を提起します。共に自己批判の立場から教訓を出しあい、ひとつの階級の責任において克服を共にし、創造的な団結をつくり出していきましょう。敵を打ち倒し、人類が解放される共産主義社会をめざして共に闘い抜くことを誓います。

3 団結の力で日本人民共和国を建国しよう！

現下の情勢は、ベトナム人民が明確に証明したように、人民の闘いの勝利と帝国主義の野望の敗北という特徴を示しています。人間の価値を金の価値にとつてかえた帝国主義支配は、日々破綻をきたしています。人民の創意と工夫、血と汗で学びとった闘いは、人民を歴史の主人公にかえました。

人民の主體的な力を総結集し、不屈に闘い抜けば、いかなる国においても勝利を切り開くことができます。

日本人民解放の闘いもまた、例外なく、勝利の確信にうらづけられています。日本革命勝利の闘いを担うことが、世界被抑圧人民の革命勝利の後方であるように、世界中の被抑圧人民の不屈の闘いもまた、日本人民の闘いを支えています。各国、各民族の革命前線は、また共に後方として共通の敵、帝国主義を敗北へ追いやっていきます。敵は、こうした人民の闘いに規定され、奴らの一時的同盟を余儀なくされながら、帝国主義支配の矛盾を、奴らの中に蓄積し続けています。

日本帝国主義は腐敗し、延命のために汲々としています。人民は搾取支配に日

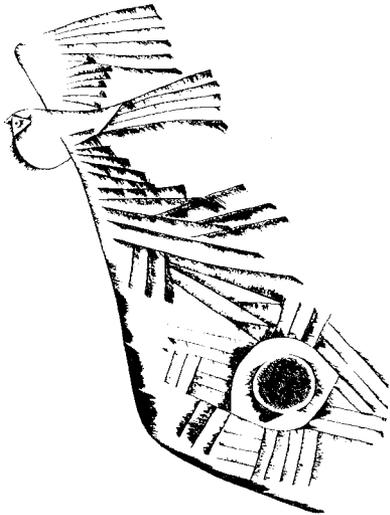
日苦しめられ、そのくびきを打ち破る闘いをあらゆる所で不退転に続けています。しかし、革命の指導勢力の不団結や主観主義が、人民の主体的力の総結集をはかることができず、敵の分断支配を許してきました。

今、日本革命を主体的に担おうとする部分が、思想的な準備をしっかりとし、団結し、主体的な力を結集すれば、必ず日本帝国主義を打ち倒し、日本革命の勝利、完成を勝ち取ることができます。

日本革命の勝利、完成を勝ち取る源は、階級的団結にあります。それを保証していくものが思想闘争です。人民の団結を阻害してきたものは、私たちの内に反映している敵の思想です。敵の思想を打ち破り、日本革命の指導思想、労働者階級を共に打ち固め、あらゆる人民と団結し、一握りの帝国主義者共を打ち倒そうではありませんか。

団結の力で日本人民共和国を建設しよう。

日高同志と よめい



写真にあるように、くつたくのない笑顔で同志とともに闘っていた日高同志。すべての人民を愛し、心から団結を求め、だれからも愛され信頼されていた同志でした。

訓練中に、ある同志が高所から落ちた時、自らの危険をかえりみず、まっさきにかかけつけ抱きとめようとした日高同志。そして、手投弾の信管がはずれた時も、冷静におちついてさしこみなおし、確実に投てきして危険を救ったことがありました。

心の底から団結を求め、同志を愛しているからこそ、本音で真剣に思想闘争を実践し、深い団結を作っていく、そうした同志でした。他の同志のことを自分のことのように考え、働きかけていく、高い革命家としての徳性をもっていました。同志が幼いころから、敵の弾圧の中で培った敵愾心の強さは、限らない同志愛となつて、日常生活での誠実さとしてあらわれていました。

だからこそ、敵と非妥協の思想で闘い抜いた日高同志を、敵は虐殺したのです。かけがえのない日高同志を虐殺した敵どもへの限らない憎悪、復讐心を階級的憎



が さ い れ

1) そのひのー あーー さくらしいち に
 2) ちちはとま どうははを しかりつー け

こ わ れ か け た と が は げ し く た た か れ
 お び え る こ らー を だ き かー かー え

ぎ し きーしーと こーじあ けらーれ
 なにもわ るいことを した かけではないととく

お お お と こどもが なだれーこんできた
 お お お と こどもは いえしゅうをふみにじ る3この

おそれと くつじょくと いか りをまんしん

にこめて たたかひのみりに わ けいた よ

くあつの くるしみを こら にあじあわせて

はならない そのためにこー そ いのちをかけて われわれはたたかう

悪へとうちかため、同志の遺志をうけつぎ、日本人民共和国を建設していくことを約束します。

私たちは同志の作った詩に、曲をつけて歌い続けることにしました。それがこの「ガサ入れ」です。

この詩は、私たちが労働者階級の文化を創造していく闘いの中で生れたものです。文化活動を思想闘争として担うことに積極的だった日高同志。幼い頃経験した敵への憎しみを卒直にぶつけた詩です。この「ガサ入れ」は、子供たちに二度と自分のような苦しみや悲しみを味あわせたくないと闘い始めた日高同志の意図がみなぎっています。人民・同志・友人と共に、国境をこえて、ことあるごとに、この歌を声たからかに歌いあい、団結を求め続けていきたいと思います。

私たちは、「この憎しみと怒りを満心にこめて」、かけがえない日高同志を虐殺した敵への階級的報復を誓い、革命の途上で斃れた同志たちとともに、永遠に深く心に刻みつけていきます。

ヨルダン反動共は、不当にも、日本赤軍兵士、同志日高、同志奥平を、九月二
 四日逮捕、監禁した。米帝、シオニスト、日帝と結託したヨルダン反動共は、帝
 国主義者共の指図に従って、同志日高をヨルダン監獄において虐殺し、同志奥平
 を一〇月一三日、日帝のもとに、強制送還した。我々日本赤軍は、不屈の階級的
 同志愛をもって同志日高を追悼し、同志奥平の熾烈な闘いに連帯し行動する。唯
 一それは、帝国主義者共への階級的憎悪を組織し、準備し、勝利の革命を保証す
 ることである。

我々は決して忘れない。同志日高、同志奥平が指し示した不退転の革命勝利の

声 明 文

九七六・一〇・一七
 日本赤軍

日本革命家のために

d. 60

1) たたかいのなかで わーれら そだちゆく
 2) はいぼくのなかで わーれら まなびゆく
 3) しゅうりのたいまつを かかげよ すーすめよ

うらざりと ろうごくを おーーそれす すす
 だんけつを もーとーめ しんかにこたえん
 じーんぶん たましいを ひとつにつなげ

め すすめ じゅうのせん し じん

ぶんのむすめむすこたちわ れら ば

確信に満ちた犠牲的行動を。労働者階級を武器とし、その非妥協な闘いの途上で虐殺され、敵の捕虜となったことを。

我々日本赤軍は二同志が指し示した不滅の勝利の確信の上に、更なる闘いの発展を準備する。リッタ闘争戦士が切り拓いた日本赤軍の不退転の党性と、その階級性は一つ一つの闘いの中で示されて来た様に、今も、太く、したたかに生きつづけている。

同志日高！ 必ず、日本革命を勝利完成させる労働者階級の指導中核として、我々は、同志の意志をひきうけるであろう。

同志奥平！ 不屈の、労働者階級思想をうち固め、必ず、同志と再会し、共に革命の責任をひきつづき担うことを誓う。

プロレタリア独裁・継続革命の思想闘争を団結の絆とする日本赤軍の思想は不滅である。労働者階級の立場、観点に立脚し、自己批判を柱として、自らを革命化しつつ、人民と団結する日本赤軍の革命思想は不滅である。我々は闘いの途上に虐殺され、闘いの途上に捕虜となった多くの無名戦士の一人として、日本赤軍

兵士の戦死の事実も、逮捕の現実も又確認しよう。それは唯、敵階級への限りない憎悪を人民と共に組織し、非妥協の革命陣型をうち固める日本赤軍の革命に對する責任を更に自覚する以外の何ものでもない。

敵、帝国主義者共は、我々日本赤軍のアラブ地域における活動を封殺する為に、一貫して、嘘とギマンの情報でアラブ諸政府が我々を弾圧する様企てて来た。日本人民の代表としてアラブ人民、革命的諸勢力と団結して闘いぬいている日本赤軍は、しかし不滅である。敵共の悪らつなデマや、汚れたやり口は、益々奴らの不正義を証し、人民と我々の闘いを強固に結びつけるだけである。

天皇を頂点とする強盗と戦犯の集団、一握りの日本帝国主義者共は、日本国内においては人民大衆にドレイ思想をうえつけようとし、我々の闘いをゆがめ、人民と我々の闘いの絆をたちきろうとして来た。しかし、労働者階級の解放によって達成される新しい社会の建設はいかなる困難に出合おうとも、団結を促し、革命の原動力を組織し合うだけである。奴らの思想はたとえ一時的に成功する時があっても、必ず正義にとってかわられる。奴らの我々に対する敵対と弾圧は、人

民の勝利と希望を深く準備するにすぎない。

そして、同志、友人、戦士諸君！ 一九七五年、米・スウェーデン大使館制圧、同志奪還闘争の勝利の上に、我々は多くの同志と出会い、階級愛によって結ばれた不滅の隊伍をうちかためて来た。一九七四年、同志戸平、同志西川の逮捕と敵への自供、屈服は我々日本赤軍自身の思想的未熟と組織性の弱さを、真剣に、謙虚に考察する機会を我々に与えた。同志奪還闘争の勝利の地平から、我々のみならず、日本革命家総体の不十分性を同志と共に、人民と共に克服すべく労働者階級思想によって結ばれた団結をうちかためて来た。自らを革命化することぬきに勝利の思想は獲得されない。我々は、不滅の労働者階級の思想的立場、観点、方法へと日常不断に隊伍を革命し、勝利の確信にうらうちされた不屈の進撃を一步づつ担って来た。その途上、我々はかけがえない同志日高の虐殺と、同志奥平の逮捕に直面した。

しかし、同志、友人、戦士諸君！ 我々日本赤軍は同志日高の戦死、同志奥平の獄中の闘いを共有し、自らを革命しつつ、真に、日本社会主義を勝利完成させ

る責任をもって不屈の隊伍をうち固める。我々は革命に対する。人民に対する責任を一つ一つの闘いを通してひきうけるであらう。同志奥平の獄中の闘い、国内の闘う友人と連帯し、我々は確実な一步を再び準備する。

必勝の信念を、高くかかげ、同志と共に、人民と共に、日本赤軍は進撃をちかう。

家族への手紙



拝啓。

永い間、御無沙汰しております。その後、いかがお過しですか。皆さん元気で
すか。

敵の犬畜生どもがいろいろと嫌がらせをしていると思いますが、必ず我々の時
代が来ます。それが、歴史の流れとしてあります。

お母さんは太ったと聞いていますが、病気のせいだと心配しています。

お父さんは酒が過ぎているのではないですか。ほどほどにして、貴重なからだ
を大切にして下さい。

○おちゃん、お父さんお母さんを支えて、頑張っていますか。兄貴の分まで、

(一)

充分つくして下さい。今考えてみると、家に居たときに、何もしてこなかった自分を恥しく思うし、非常に残念です。

日本を出るとき、羽田から電話して、最後に、お母さんと話をしましたが、そのときになってはじめて、自分があまりにもいいかげんな生活を送り、親孝行もほとんどしていないことが、非常に心残りでした。できれば、もう一度家に帰って、出直そうかと考えたくらいです。

しかし、世の中には、もつと悲惨な生活をしている人々がいることを考えると、社会主義のために闘うことが、そして、それを持続させることが、本当の親孝行になると考え直し、出発しました。

今の日本には、多くの矛盾が生み出されています。基本的には、金持ちと貧乏人の違いがあることです。今の自民党が支配している学校では、人間には能力があつて、能力によって決まる、あるいは、幸運に恵まれている人と、生まれつき不運な人がいる、という風に、本当のことを教えていません。また、働きが少なから貧乏なのだ、努力をすれば、金持になれるとウソを教えています。

果してそうでしょうか。私たちの家でいうと、お父さんもお母さんも、朝から晩まで、十二時間も働いていたではないですか。世の中には、学歴がないから、という人もいますが、お父さんも、お母さんも、そういう意味では、学歴を持っていました。(もちろん、学歴があるかないかを基準にすること自体間違っています)しかし、金持ちになれましたか。そうです。今の資本主義社会の中では、働いても、働いても、豊かにはなれないのです。病気になったり、交通事故にあつたりすると、生活はどん底になります。

一度、〇〇ちゃんが、病気になつて入院したとき、早く退院させないと入院費用が払えないので、もう病気が治りかけていたこともあつたけれど、体温を医者に低くみせるために、体温計をふつたことがありますね。あのときは、なんで自分たちだけが、こんなことをしなければならぬのかと、憤つたものです。

今の世の中では、生れつきからだが不自由なだけで、学校の成績が違っただけで、さげすまされたり、働く自由さえも奪いとられていきます。また、朝鮮人、中国人というだけで、職につけなかつたり、「部落民」として、差別されたり、結婚でき

ない人々もいます。どこに人間としての違いがあるのでしょうか。

世の中には、もうひとつの人間どもがいます。そいつらは、多くの人たちが、働いて稼いでいるのに、自分が稼いだようにごまかして、多くの働いている人たちから血と汗を搾りとっています。そいつらは、遅く会社に出てき、椅子にふんぞりかえり、自分だけうまい高いものを食べ、夜は宴会に入りびたっています。一日に何時間も働かないし、バー、キャバレーにいたりびたり、二号、三号をかこうことに熱中しています。労働者から搾りとった金で、家を広くしたり、土地を買いあさったり、バカ息子が医者になるために、何千万円と金をつぎ込んだりしています。そいつらは、労働者が過酷な労働条件で、病気になったり、死んだりしても、涙ひとつ流さず、はした金で、人間の大切な生命を奪った責任をとらずに、済ましています。

貧しい農村から出稼ぎにきた人たちが、作業場で死んだときに、奴らは何をしたでしょうか。公害で多くの人々が、水俣や、四日市や、新潟で死んでも、奴らは知らん顔をしています。こいつらは、ゴウマンにも、自分が資本を出しているから、儲けを受けとるのは当然とウソぶいています。今では、こいつらは、国の政治まで牛耳っています。その力で、社会をますます奴らの都合のよいものにしていきます。奴らのインチキに気がついた人々に対しては、ヤクザまがいの「警察」を名乗った犬どもを使って、監獄に入れたり、この前の五月の三里塚では数メートルのところからガス銃を撃って、正義のために闘っている人を殺しています。また、中小企業がつぶれても知らん顔で、大会社に組み込んで、会社の乗っ取りを平気で、国ぐるみでやっています。ところが大企業が倒れそうになると、あわてて、税金として人々から搾りとった金を与えて再建しています。今では外国にまでのりだして多くの人々を苦しめています。

奴らは、自分が資本を出したから、それを拡大することはあたり前とと思っていますが、そうでしょうか。ここに、ある資本家が千万円の資本をかき集めてきたとします。その金で、土地と設備と建物を設置したとし、労働者を雇い、生産を行い、千六百万円の売り上げをすると、人間の労働以外の資金（地代、設備費など）を引くと六百万円残り、それは、労働者が生産したものです。ところが、そ

の一部を、資本家は労働者に渡し、自分は労働者の血と汗で生活しています。こんな不合理なことはありません。更に、資本家どもは、独占を目指し、商品価格を吊り上げ、二重に、人々の生活を苦しめています。今まで、年が越せないとして、何人の人が自殺したでしょうか。幼い子どもたちも巻き込んで。こんな世の中は変えなくてははいけません。

お金が全ての世の中では、親類はもとより、親兄弟の間でも、醜い争いが行われています。お父さんお母さんも経験済みでしょう。ほんの一部の大資本家どもが大多数の人々を苦しめ、自分たちで全ての力を集中し、ますます、人々を悲惨のどん底につき落しています。私たちは、この社会を、本当に全ての人民が主人公になる社会を創らなければなりません。

人民が主人公の新しい社会では、大金持や悪徳政治家や汚職もなくなり、あの戦犯ヒロヒトも追放され、公害企業もなくなり、お金の心配もなく病院に行け、子どもたちは自由に伸び伸びと、老人たちは何の憂いもなく生活することができ、全体的に人たちが能力に応じて自由に働くことができ、金持と貧乏人の違い

もなく、本当に人間らしい世の中ができます。

私たちは、この新しい社会を作るために、勝つまで闘い続けます。正義の闘いは、必ず勝利します。そのときに、お父さん、お母さんと多くの人たちと共に、勝利を祝いましょう。それでは、また。

(二)

父母へ。

お元気ですか。今までたよりをだせなかったことを許して下さい。最後にお父さん、お母さんと別れた日から今日まで、ぼくが逮捕され、敵に屈服する中で、お父さん、お母さんをはじめ日本の人民や、同志たち、また、国外の同志友人たちに対するうらぎりのことを考えてきました。そして、今、父さん母さんをはじめとする日本人民、同志、国外の同志友人に対して、自己批判しうる確信をもちえてきました。

自分のいままでの、父さん母さんに対する態度、また、ぼくが運動の中で接してきた人々に対する態度を考えると、本当に人間として、革命家としてはずかしい態度であったと考えます。そして、自分が革命、革命と考へ、叫んでいたのが何んであったのかを問い返してみるとき、本当に恥かしい思いがします。今日日本赤軍の同志とともに、それを問い返しながら、本当にみんながたのしく仕合せにくらせる社会をつくるにはどうしていけばいいのか、それまでの私たちはどうであったかをもに考える中で、やっとひとつの問題に気がつきました。それは人間を愛すること、父さん母さんをはじめとする人民を愛することが、社会を変えていく根本的な問題であるということでした。

ぼくが高校にいるとき、学校や、人生について考へたとき、本当に今のままの社会や、人と人との関係では、自分が本当に解放されない、このままでいけば本当の生き方がみつけれなくなってしまうと思ったときに、学校体制に対する疑問は今の学校体制に対する闘いとなりました。そして、他の学友と共に闘う中でたたかいのよろこびを感じました。しかし、父さん、母さんをも、自分の抑圧物と考へ、反抗し、自分の好き勝手な行動を正当化し、父さん、母さんの苦勞をかえりみることはありませんでした。そして、ぼくにとっては、この世はすべてウ

ソツパチで、本当に人間が個人の利害以外に立つて動くことはないと考え、自分ひとりしか、この世の中にいず、この世には愛も、人が共に生きるということもないのだ、ただ、この世に反抗することだけがすべてで、自分の解放があると考えていました。マルクスの本などを読んで、資本主義の本質を知っても、その根本のところでは、共産主義、人間が共に生きていける社会については確信などもっていませんでした。だから共産主義の根本である、ともに生きることを自分の日常生活の中で拒否し続けていました。父さん、母さんに、人間が、打算や、利用や、搾取なしに、ともに生きてゆける、人間が人間的愛情のみくらせる社会が必ずできるし、それは、父さん母さん、兄弟や、みんなの力ではじめてつくり出していけるということを、自分が共産主義の思想をもちえない分だけ知らせることができませんでした。利己的でない家族の愛情が、本当に新しい社会の基礎となりうるということを知らず、それを切り捨てて、別のところに何かがあると求めてきました。

根本的には、私の態度は個人主義であったと言えます。自分ひとりのためのたかかいを「人民」という名においてやっていたといえます。だから、自分の一番身近かな人民のひとりである父さんや母さんの苦しみを共有して、父さんや母さんのために働き、人民のために働くということができませんでした。本当に身近な人々にも奉仕できなくて、一体、ぼくらは何をしようとしていたのか恥かしくなります。

そのような態度は、多くのたたかひの中で出会った人民に対してもそうでした。自分の都合の良い時だけ利用し、心から団結しようとせず、それでさまざまならざりをしてきました。この根本は、私が私たちの社会、資本主義社会の悪い思想の影響をうけていたことです。資本主義の世の中は、少数の人間が自分の私腹を肥やすために、大勢の人間を利用する社会です。ひとりが良くくらしをしようとするれば、だれかをけ落とし、踏み台にしなければ生きていけない社会です。受験戦争や、大資本によって、中小資本が倒されていくこともそうですし、工場や会社の中でも、自分の地位をあげるにはだれかをけ落とし、踏み台にしなければなりません。そこから人間がともに生きてゆけること、またすべての人間が、人

間的愛情で結ばれることなど、考えられるはずもなく、自分がどうやって、他人を踏み台にして仕合せになるかしかないのです。せいぜい、ともに生きてゆくことが実現されるのは、個的な、小家族的な中のみです。ぼくは、それすらもくずし、踏み台としてきました。自分が「革命、革命」と叫んでいたのは結局は、革命でも何でもなくて、資本主義社会の人間の典型的な考え方であったと思います。そんなことでは、父さんも、母さんも、また人民も、革命という言葉をぼくのような人間を通して見たとき、ゲンメツせざるを得ないと思います。

自分自身が、個人主義や利己主義というものを克服せず、共産主義を百べとなえても、できるはずもなかったのです。

社会は変わるし、人間も変わります。今の人間のフハイした側面とは、今の世の中によってつくられてきました。ぼくたち、共産主義者は、人間を心の底から愛さなくてはなりません。また共産主義は、本当にみんながひとりりを愛し、ひとりがみんなを愛する社会です。今の実感——言葉ではなく、ぼくたち日本赤軍の隊内で同志たちと共にそのフハイした思想を改造する闘いの中で——実感してい

ます。

人間が、父さん、母さんとぼくが本当に人間的な、家族的な愛情で出会うことができなかつたのは、資本主義の社会とそれがもたらす、利己主義、個人主義のためです。本当に人間が団結を、共に生きることを求めるとき、それらのものと闘わざるをえません。それが、革命なのだと思感することができました。今、父さん、母さんをはじめとする日本人民のために、自分の生命がかぎり闘うことができるという確信をもちました。

ぼくたちは、だれに頼まれたものでもなく、自らすすんで、この革命の道に入りましたが、この革命とは、本当に今資本主義の世の中で本当に生きようとする人々は、必ず自らすすんで、闘いの道に入ると思います。父さんや、母さんが革命の主人公として、また歴史の主人公として、自分たちが人間らしく生きるために、革命というものがあります。

ぼくたちをはじめ、日本共産主義者の運動は根本において、人間を、人民を愛することに欠けていたといえます。また、自分たちを「前衛」ととらえ、自らを

かえりみない独善性をもっていたといえます。それが、共産主義を何か恐しいもの、非人間的な唯物主義であるというような、敵のデマに根拠を与えていたといえます。共産主義ということが、人間の生きる本当の姿としてとらえられず、全体主義であるとかいわれてきました。しかし、人間が生きるには、ひとりでは生きていけません。この社会というものは、さまざまな人々が結びあわなければ生きていけません。それが資本主義社会では、ひとにぎりの、ほんのひとにぎりの人々が、ぼくたちが生きていく上で必要とするものをつくりだす手段、工場や機械を独占し、それを私的な利害のためにつかっています。そのことによって、私たちの生活が苦しめられる結果となっています。労働者には低賃金、公害を与え、彼らが、自分たちのために勝手気ままに生産するので、不況やインフレ、失業などがたえません。また、農業をハカイし、人間が生きていく根本にある農業生産をハカイし、それをアメリカからの輸入品にかえ、自分たちが生きていく途をふさぎ、農民を土地から切り離し、都市の下層労働者にしています。また労働者をくだらないサービス業、バーとか、他の俗悪なしろものに労働力を使い、ぼくた

ちが必要とする以外の余計なものばかり力を注ぎ、多くのムダをつくっています。

それは父さん母さんが肌身で知っていることだと思います。それに対して、このような社会が変わる、人と人との関係が変わるといふ確信を与えられなかったのです。

ソ連などにおける誤りというのは、人間を第一にするということが共産主義の根本であるということを忘れさり、生産力を第一にする修正主義におちいり、社会には、いびつな資本主義社会と同じ関係ができあがってしまったのです。例えば、内ゲバをしている「共産主義者」がいますが、彼らの根本の思想は、資本主義社会のものであります。すべてが変わるといふ観点、自分を（共産主義的に）変えることから、相手をも変え、団結をしていくという態度がないのです。ブルジョア社会と同じ弱肉強食で生きているのだといえます。人民を、同志を愛せないこれらの人びとは革命を完成させることはできません。

本当に、私たちの日々の生活の中で、家族がそして近所の人びとが、またすべ

ての社会の人びとが仕合せに、ともに生きていけることを求める革命、その阻害物、人間の頭のなかにある利己主義や個人主義、その根源である社会を改造することなのです。

父さん母さん、人間がともに生きる、みんなを愛せる、みんながひとりのために、ひとりがみんなのために生きるというすばらしさ、これこそが、ぼくたちのめざすものであるし、そのために生きることには誇りと喜びをもっていきます。

以前にこのことが理解できていたら、父さん、母さんを理由のないかなしみにおちいらすこともなかったと思います。また、逮捕された時も、本当に父さんや母さんをうらぎらず、愛情をもった態度で闘うことの喜びを共有しえたと思います。

兄弟たちにも、本当に自分のためでなく、父さん母さんを、隣りにいる人民を愛し、ともに生きていけるために努力することこそ、本当に、人間の生きる道だといえます。労働を愛することは大切なことです。はたらくとははたらくということばにもあるように、はたをらくにすること、みんなのために働くことこそ労働

であり、人間の生きる基本的な態度であると伝えたいと思います。共産主義者となることの基本的なこととはこのことですし、共産主義者となり、あらゆる努力をして革命に参加してほしい。ここにこそ人間の生きる道があるのです。

今、父さん母さんと遠くはなれていて思うことは、本当に今そばにいてくれたら、父さん母さんのために働きたい。また革命の道をとともに語りたい。生きることをともに語り合い、父さん母さんとともに、みんなのために闘い抜けたらと思います。

敵は巨大で狂暴です。生やさしいことでは倒れません。本当に皆が手を取りあい、力をたさえて進むとき、このフハイ物は倒れます。そして、そのときこそ、人間の未来への建設をはじめることができます。血は流れるかもしれないけれども、父さん母さんたち人民が仕合せになれる社会がつくれるなら、すこしも恐くないし、どんな困難でも甘受してゆきたいと思います。

今愛する同志たち、今本当に同志たちを、ただとなりにいる人間ではなく、本当に愛するということがいえます。その同志たちとともに、今、日本の夜明けを

めざし、かたときも、父さん、母さん、そして日本人民の苦しみを忘れず、日々闘い抜いていきたいと思えます。再会を！

あとがき

持久的で、全面的な思想闘争を柱に闘い抜く態勢をとって、数年がすぎました。人民との団結を、文字を通して担う私たちの機関誌、思想闘争を軸に、やっとな「団結」創刊号の完成をみました。同志たちに支えられ、援助してもらって、みんなの力で創れたのだと実感しています。

はじめての機関誌作成を通して、思想闘争は私たちをきたえてくれました。最初の計画が、せっかちな主観的願望によっていたため、時期・内容とも、計画を変えたりしました。また、日常生活をおろそかにして、となりにいる同志との団結をいかげんにして、人民に伝えるのだからと、編集作業に熱中したこともありました。そんな時、必ず、文章は理念的になります。私たちは、それに気づき、態勢をたてなおしてやることもありました。今、十分にとなりにいる同志と

団結して闘い抜くこと、思想闘争をしっかりとやること、その中で、文章は、真に階級の利益になるように書かれていきます。これが創刊号を担った私たちの第一の教訓です。

はじめての試みで、失敗も多く、創刊号を担ってみて、私たちの編集会議がまったく大ざっぱだったことがわかりました。そのために、文章を書く同志が、各、自分のもつとも言いいたいことを強調し、それが同じくり返しとして、文章上に結果しています。編集会議をしっかりとやり、的を定めて矢を放つこと、これが第二の教訓です。

また、読む人民・同志・友人が、十分に把握されていず、自分たちの書きたいことを書くという結果におちいりました。そのために、人民・同志・友人の魂にふれるように書ききれいていません。人民・同志・友人の立場にしっかりと立つこと、これが第三の教訓です。

それに加え、技術上のさまざまな教訓も得ました。また、私たちの思想上のいかげんさが、言葉上のいかげんさになっていることも教訓としました。そし

て、日本人である私たちが、日本語がへたであることにも気づきました。しっかりと、人民の言葉で、簡潔に書けるよう一歩一歩努力していきます。文章上の、様々な不十分さを克服していけるよう、がんばります。

様々な制約の中で書かれているという外的条件を理由に、不十分さを正当化することはできません。私たちの未熟な創刊号を、それでも人民・同志・友人に提起するところから、より批判を援助として受けとめ、一号、一号前進していくことを約束します。

創刊号の中で、提起する場所を十分持たなかった日本人民共和国建設に向けた闘いを、二号で、より提起していきたいと思えます。また、創刊号への批判を集約し、それを受けた日本赤軍の考え、自己批判を二号で実現します。人民と共に、同志と共に、友人と共に、この「団結」創刊号を発展させることを願っています。

5・30 声明への意見に答えて

日本の人民・同志・友人のみなさんへ。

元気で持ち場の任務をはたし、闘い抜いておられる事と思います。私たち日本赤軍の提起した5・30 声明に対しての人民、同志、友人の皆さんからの批判や支持の声を聞き、私たちは大変うれしく思っています。そして多くの人民、同志、友人のみなさんから5・30 声明へ意見をよせていただいた事により、更に私たち自身を検証していくことができました。私たちの手もとにとどいている限りの人民、同志、友人の皆さんからの意見に対して討議し、私たちの考えをここに提起していきたいと思えます。

一、人間が同じなのか、ちがうのか？

私たちの前に両極端の意見があります。ひとつは人民新聞七月五日付の「大阪M支局

での討論」の中の発言です。「ああいう人たちが自分らと同じことをいい始めたというので、自分の主張に自信が持てるような気がします」という意見です。もうひとつは六月十五日付の紙面の「一種の転向声明、東京T生」という投書のなかの「すばらしい社会主義を作ろうとするわれわれと彼ら（日本赤軍）とは根本的に人間がちがうのだと思えます」という意見です。

前者は以前は違うと思っていたが今は同じだという人であり、後者は以前は同じだと思っていたが今は違うと思っている人です。ここに私たちは今一度提起しなければならぬ根本的な問題があると考えます。それは人間観の問題です。世界観の問題であるともいえます。すなわち人間は同じだという事です。

かつて私たちは自分たちを「前衛」であるし、「武装闘争を先頭で担っている」として、自分たちを何かしら「えらくて、立派なのだ」という幻想を持っていました。そこで、自分たちの本当の姿を見ることができませんでした。

しかし、今、自分たちの言葉や形態の勇ましさを一枚、一枚はぎとってみると、その姿はえらくも立派でもない、誰とも同じ姿であることに気づきます。

前者の人は、「えらくて、立派だ」という日本赤軍とはちがうと思ひ、立派でもない日

本赤軍と同じであると気づいたのです。後者の人は、「えらくて、立派な」日本赤軍と同じと思っていたが、えらくも立派でもない日本赤軍とはちがうと考えている人です。

私たちがマルクス・レーニン主義の本を百冊読破し、ありあまる共産主義の知識を持っていても、最先頭で勇ましく銃を握っていようと、自らの生きていく姿そのもの、本音、欲望というものを意識的に改造しなければ、みんなが幸せにくらせる社会をつくりだすことはできません。

めしを食う事が思想だといわれることがありますが、誰もが自然成長してきた思想をもっています。闘いの中でそれは自然成長的な階級性となって、革命活動の中で実践されます。マルクス・レーニン主義の洋服をぬいでみると、そこには自分の事だけしか考えない一人のブルジョアジーがいることも、往々にしてあります。洋服ではない骨や血肉としての革命観を、主体的な力にすることが問われています。それは立場の改造といえます。

革命は共産主義の知識の量や形態・方法の問題ではなく、生きている人間そのものの問題です。人間がかかる、人間をかえることは、革命の根本の問題です。前衛性とは、指導性とは、何よりも自分の本当の姿のブルジョア性と意識的に闘うことにあります。

誰もが同じであり、変りあえるという確信こそが、革命の確信です。だからこそあらゆる人民、同志、友人と手をたずさえて、新しい社会を作っていけるのです。

二、団結をめざすことは自明の理、 思想の問題である事は当り前なのか？

私たちのところに直接きた意見の中に、「団結をめざす事は自明の理であり、思想の問題であることは前からわかっている。問題はそれからどうするかだ」というものがありました。私たちはこの意見には異議があります。これは「新左翼」と呼ばれる人々の一部に多い意見だと思います。

「団結は自明の理」「思想の問題である」といつている同志、友人の実践をみると、自明の理でない事におどろきます。共産主義者を名のる以上、団結が必要だといわない人はいません。私たちはなぜ団結の問題、思想の問題をいうのかというと、その実践が理念と全くはなれているからにはかなりません。そしてそこに日本革命の敗北の根拠があると考えるからです。

団結、思想の問題といいながら、分裂したり内ゲバをしたりするのは、一体何に根拠

があるというのでしょうか。

団結は実践の問題です。なぜそれを実践しえないのかを問うたとき、実践の問題として、思想の問題は明確になります。団結へと向かわない思想の問題のとりえ方は、実践としての思想ではなく、知識理念でしかない事は明らかです。

自分たちが資本主義社会の中でつくられた立場、自然成長したその生き様を不断に革新しようとしないうり、団結は生みだせません。口先でいくらマルクス・レーニン主義をいおうと、団結しえず分裂や内ゲバをくりかえすのは、その根拠に敵階級の思想を反映した立場があるからです。

階級的な立場、階級的な価値は一つです。階級の利益、人民の利益のために、自らの自然成長してきた階級性を変革していくことを通して、あらゆる人びとがその普遍的な価値のなかにひとつになつていくことができます。それが思想的な団結です。自らを絶対化したところからは、自らの姿に似せて世界をつくりかえる帝国主義者のやり方しかできません。そこから支配は生れても、創造的、主体的な団結は生れてはきません。

自分たちがえらくも立派でもないという真の姿をみつめ、それを団結に向けて改造していくことが必要です。謙虚で実際的な思想闘争を通して、思想的な階級的な団結をつ

くりだしていくことができます。その中から初めて正しい革命路線をつくりだしていくことができます。

三、日本赤軍は共産主義者同盟、赤軍派を 再建しようとしているのか？

先にあげた「一種の転向声明」という投書の中で更にこう書かれています。「共産主義者同盟が再建統一されるとしても、彼ら（日本赤軍）がその対象になることはないと思います」と、また七月五日付の紙面の「党的な立場で大胆な総括」という投書の中で「日本赤軍とともに、赤軍派再建に向けて奮闘しよう」ということが書かれています。これも、前者は反対する立場からのもので、後者は支持する立場からのものです。私たちはどちらに対しても異議がありません。

私たちは共産主義者同盟や赤軍派という党派の再建はめざしてはいません。あらゆる人民を結集しうる、階級性を党性とする真の指導主体をつくりだすことこそ、私たちがめざすものであると考えています。そのために共産主義者同盟、赤軍派に限らず、あらゆる人々と党派の利益ではなく、階級の利益、人民の利益のために手をたずさえあつて

いこうと考えています。そのために、もし日本赤軍という組織名や党籍が邪魔になるとすれば、私たちはすぐにでも、より階級の利益、人民の利益のためになるようにかえていくでしょう。

過去の遺産にしがみついているは何にもなりません。古い党の利益、党派性そのものを解体し、階級性を党性とする指導主体の創出に向けて、不断に自己改造していくことが大切だと考えています。言葉が勇ましく「革命的」であっても、行動がともなわなければ意味がありません。行動が革命的で言葉が一般的であることの方が、革命活動に必要です。

四、支持するか、反対するか？

私たちの声明に対して、様々な立場から支持、反対の意見が出されています。私たちは支持、反対からはじまると思いますが、しかしそこから一歩すすめて考える必要があると考えています。なぜかという点、現在私たちが問われていることは、日本の革命運動の敗北の根拠を問い、階級の一つの責任において克服を共有することです。すなわち、それぞれの人民、同志、友人がそれぞれの持ち場において、主体的に、自分の口先や運

動的評価ではなく、えらくも立派でもない本当の姿を切開する必要があると考えています。そのことを通して、私たちは、みんながひとつの問題と結論へ向かうと確信しています。

日本の革命運動の否定面をとらえる時、自分たちだけが正しいとするのではなく、すべての否定面は誰もがつくりだし、表現しているのだという視点から、共に克服していく立場に立たなければなりません。そうしなければ批判は本来の意味からはずれ、相手をけ落とし、相手の否定面を自らの存在証明のためや自己正当化の道具となってしまいます。また支持することは、自らの主体抜き、実践すること抜きの、第三者的な立場となってしまいます。こうなつては、今克服を問われている問題を共に克服していくことはできません。

私たちは、日本階級闘争の敗北や否定面を自らの問題としてとらえかえし、不十分性を共に克服していくことにより、団結をつくりだしていけると考えます。肯定面で団結しようとしても本当の団結は生まれません。否定面を共有し、その克服を共にするということの中に、本当の団結は生れるのです。

自らの主体的総括を通して共有する立場をつくっていくことが、あらゆる実践を批判

として日本赤軍をうちきたえていきます。そして共に考え、自らの持ち場をしつかりと総括検証していく闘いは、不断に自らの革命化を通して団結を生みだしていくでしょう。

五、持ち場の闘いの主体的総括を果し、 克服を共有していきましょう

今問われている階級の責任を果していくために、あらゆる持ち場から主体的総括を出しあい、自己批判―批判を通して団結し、共に克服し、日本革命を勝利完成させましょう。

人民、同志、友人のみなさんが、口先や形態、方法の問題ではなく、えらくも立派でもない同じ姿を問うことから開始し、総括を共有することを期待します。

私たちは今、みんな同じなのだという実感を強く持っています。みんなそんなにえらくも、立派でもありません。持ち場や革命の入口は様々であっても、革命の価値は必ずひとつであることを確信しています。自らをかえ、団結を求めあいましょう。

一九七七年八月九日

附・2

日高隊 声明

日本の同志、人民のみなさん。

私たちは団結をもとめて作戦を遂行します。そして同志虐殺にたいする階級的報復と獄中同志奪還・革命基盤かく得のために作戦を遂行します。

1

日本帝国主義のブタどもと、その追随者どもよ。

お前たちは自らの欲望と野望の実現のために人民に寄生し、その血と汗の上にふんぞりかえってきた。人民にあげせられたありとあらゆる汚名はお前たちにこそふさわしい。

日高同志を虐殺し、奥平同志たちを強制送還し、英雄的な闘いに起ちあがった同志たちを獄に閉じこめ、苦しみ、虐殺しようとしている天皇制日本帝国主義と反動どもにた

いする憎しみは、けっして消えるものではない。それは人民の日々の生活と生命を奪い続けていることにたいする憎しみである。

お前たちは私たちの要求にこたえる義務がある。虐殺と送還の責任をとらねばならない。もし、応じないなら、私たちはお前たちの一人一人を確実に処断する。

お前たちがいかに権力をもち、弾圧を強化しようとも、お前たちが個々人の欲望と野望の実現を基盤にしている限り、支配の道具であった差別と分断を自らにもちこみ破滅していく。お前たちは敗北し、死滅する。労働者階級、人民は勝利し、新しい社会をつくる。

2

日高同志、やっとな階級的報復ができます。

私たちは同志の一つ一つの闘いを思いおこします。つねに本音で生き、闘い続けた同志の限らない愛と明るさをけっして忘れません。「一番大切なのは同志愛だ」と最期の闘いにおもむいた同志の政治生命と使命を、私たちはしっかりとつけぎます。

奥平同志たち。

この闘いは私たちの自己批判です。私たちはどんな敗北や屈辱や欠陥をも共有しあい、共に学び克服しあい、不滅の同志的団結を築きたいと思えます。私たちは必ず出会います。そして、日本革命の勝利完成の確信と階級の中核の団結をうちかためるでしょう。天皇制日本帝国主義と最前線で闘っている戦士は、「政治犯」「刑事犯」を問わず、全て同志です。

今、日本共産主義者に、国際権威主義から自立し、皆が自分の頭で考え、卒直に自己をかえ、団結を武器として闘うことをよびかけます。

3

私たちは、私たち自身の敗北、連合赤軍や東アジア反日武装戦線、そして日本共産党の戦前戦後の敗北等、日本共産主義運動の敗北を自分たちの日常実践の中で総括してきました。それは私たち個人各々の思想欠陥の日々の総括です。

その思想闘争の結論と成果をもって、私たちは作戦を遂行します。

その結論とは「人間が変わる」という確信です。

人間は必ず変わります。短気な人は粘り強くなります。自分のことしか考えなかった

人が、他人のことを考えるようになりません。失敗しては嘆いていた人も、失敗を大胆に教訓化して楽天的になります。しかし、変わるということは、自分の好きなように変わるということでも、表面的な作風や能力だけが変わるといふことでもありません。自分の立場やメンツにこだわっていたら、自分のなりたいうように作風や能力を変えようとするだけです。そうではなく、自分の立場、観点そのもの、つまり、感性として日常不断にあらわれる思想を変えていくことです。そのためには、日常的に、同志、人民の立場に立って実践し、思想闘争をする以外にありません。思想闘争、組織生活はあらゆる場でできます。家庭や職場や学校で、団結を求めて実践し、団結して実践すれば必ず変わります。

4

日本共産主義運動も国際共産主義運動も、人間が変わるといふ観点から、必ず統一できると確信します。そして、人間憎悪のブルジョア思想と非妥協で闘う階級性こそが、それを保証します。

日本の内ゲバや、中国とソ連の分裂にたいして、「仕方がない、現状だ」と現状肯定せ

ず、人間が変わるといふ確信から、非妥協に思想闘争を続けねばなりません。私たちは武装闘争を非妥協に持久的に闘い続けます。

5

私たちは、労働者階級人民の生活を守ることは、一回の軍事作戦やばなしい宣伝戦ではできないことを知っています。父さんや母さんたちが生活を闘いとして私たちを育て、支えてくれたことも知っています。生活の場を闘いの場として持久的に闘い続けることよってのみ生活はかちとれるのです。そういう闘いと心一つにして結びつきあって、初めて武装闘争が人民の闘いとなるのだと確信します。

私たちは天皇制日本帝国主義を打倒し、アメリカ帝国主義を追い出し、社会主義を建設するために闘います。だれもが革命し、飢えることも、生活のために屈辱を味わうこともなく、革命の主人公として、共に幸せに生きられる人民共和国建設を私たちは今からあらゆる分野で行います。

私たちは必ず勝利します。

これからも敗北をすることはあるでしょう。私たちは、まだまだ主観主義や個人主義の誤りを根強くもっているからです。しかし、私たちは、人間は変わるといふ確信と、必ず一つの真理の前に私たちの隊、さらに全軍が統一できるといふ確信のもとに作戦を遂行します。だから、どんな困難や危機に陥っても、必ず団結して克服します。不滅の同志愛と敵愾心をもって。

私たちは必勝を誓います。団結を！
更なる階級的団結を！

●人民新聞革命叢書——1●

団結をめざして

——日本赤軍の総括——

第二版 一九七八年一月十日発行

編集・
発行人 日 角 八 十 治

発行所 人民新聞社出版部

大阪市北区池田町21安田ビル2階
電話 〇六一三五八一四三七六

発売元 ウ ニ タ 書 舗

東京都千代田区神保町1の52
電話 〇三一二九一一五五三三

定価 一〇〇〇円



人民新聞革命叢書

1,000円

■ 発行 人民新聞社出版部 ■ 発売元 ウニタ書舗